

曰ふ、願くは溫和に事を處理せられたし、尤も目的を損ぜざる限りに於て信切を盡せよ、兵力によりて勝利を獲んとすれば、予の城邑は爲めに殘破せられ、臣家は乖離するのみにて何等利得する所なからんと。是に於てラ・ロチュールの平和を結び、改教黨に思想の自由を許可せり。改教黨の各、を破滅せんとて起りし戦は變じて彼等の勝利に局を結べり。

プロテスタントの敵今や分離して味方の利益たるべき形勢を現ぜり。セント・パアソルミウの同盟は舊教徒の分裂となり、また王弟アレクサンソン侯は一黨與を形成せり、主義は舊教及びプロテスタント教が目してブリュランツと呼べるものなり、反王者は勿論大望を有する輩、或は野心ある人民、或は成立の當初黨與尠く、團結心鞏固ならずして勢力微弱なりし最近の新黨は、寛容主義發達の爲めに漸く勢力を伸張するに至れり、ヘンリー四世の戦勝は全く此等に負ふ所多し。

一千五百七十四年チャアルス九世死し、後繼者は王弟ヘンリー三世なりき、三世は以前ポオランド王に選ばれたりし者なり。王の才知衆に卓越せりと雖も、また惡徳も伴ひしかば、當時代諸人の嫌惡する所となれり。彼は自己の愛するマキア

ゾリーの學説及びカゼリンの政畧、即ち二黨をして互に争はしめて、自ら兩黨を衰滅せしむる、必竟敵を以て敵を滅ぼすの政畧を實行せんとせり。

ブリュデント黨プロテスタントと結び、アレクサンソンのフランシスはナヴァルのヘンリーと結合せり、ヘンリーはセント・パアソルミウ虐殺の際幽囚の身となりしが、今や遁れて自由の身となれり。戦は、軍畧拙なるによりて、ウエル・スカアドの異名あるガイス侯の子勝利を得たり、彼は改教徒援助の爲めに來りしゼルマン兵を討てドルマンの大勝利を得し人なり。王はビュリウ條約によりて第五内亂の終を告げ、コンデ公にピカルディ政府を興へたり。

ペロンネの太守ジャックス・ド・ハメリスは此の特許に對して抗議をなし、宗教保護の爲めに結合したる舊教地方信徒五千人以上と團結したり。これに倣ひて暫時に各州各、同盟を形成しぬ。ガイス公ヘンリーは巧みに支離分裂せる此等の各同盟を自己の手裡に入れて、優勢なる一團隊を組織し、自ら頭領と成りたり。これよりフランスに二王を見ることゝなれり。

是に於てヘンリー三世はプロアに大官會議を開きしが、ゼスイト教僧侶より成

れる同盟ありて、集會の投票權は勿論、あらゆる會議に關する全權を掌握して王の自由にならざりしのみならず、却てピュージェイの布告に遡つて處理せざるべからざるに至れり。

黄金の缺乏によりてプロテスタントはイソアラチャリテ及びプロオグを失へり。ヘンリーは大官會議の監視を免かれてベルゲラックに平和の新布告を發布することを得、これによりてプロテスタントは前の布告よりも思想の自由に好都合なる、また甚だ擴大なる權利を得たり、そは八の地方會に特別の裁判官を有し、九個所の土地を開放し、及び守兵を置くことを許可せられたる等なれども、こは舊教に取つてむしる勢力を増殖したるやの觀あり、如何となれば舊教徒并にプロテスタントが從來組成したりし各同盟を廢止することとなりて、プロデスタントが鞏固なる團結をも廢止せざるを得ざるに至り、今後再び團結の必要ある場合には一方ならぬ困難を感じるに反し、舊教にては比較的團結の容易なるものあれば、舊教の爲に勢力の加はりしこととなる所以なり(一千七百一十七年)。

ヘンリー三世は王子なかりき。王弟アレンソン侯一千五百八十四年死去して

プロテスタントの頭領ナヴァルのヘンリー王位の豫備相續者となれり。舊教徒はフランス國民中の大部を占むるを以て、王としてカルピン教なるナヴァルのヘンリーを戴くことは各の危害なりとし、同盟してヘンリーに對抗せしが、勢力の猖獗なること想像以上にあき。

ガイス侯ヘンリーは今ぞ一打撃を加へてプロテスタントの頭領ナヴァルのヘンリーを一撃に顛覆するの時至れるものなりとし、一刻の猶豫なく、フィリップ二世とジョインギルの條約を締結し、それによりて異教徒は勿論分派の根源を絶ち、フランス王位を窺ふ異教徒の貴族等を驅逐し、ボルボンのカアデナルチャアルスをパロア家相續者と確定することを約定したり。かくて新系統を汎ねく各州に布告せしが、新系統とは即ちフィリップとガイスの關係を定め、かくしてプロア承系の權利よりも尙勝れたる權利を確立したるもの謂なり。法王シキスタス五世はヘンリー及びコンデの兩ボルボン家はフランス王位に陞るの資格なく、且つ其の血統にあらざれば、王位を要求するの權力なきものなることを布告したり。假令良心に鐵火を加へざるにもせよ、無法なる法王の處置と併に王位の獨立に危害を與

へたる諭告に對しては、國會は反對もし、また忠告をも試みられたり。無効に終りたり。

是に於て三ヘンリーの戦は始まれり、三ヘンリーとは即ちナヴァル、フランス及びガイスのそれなり(年一千五百八十六)。ヒュギノットは激戦によりて單獨の大勝を得たり。王軍は殆どカウトラスにて全敗し、寵臣ジュウス一千五百八十七年遂に戦場の露と消えたり。然れども北部に於てフランスのプロテスタントを援んとて、ゼルマン新教徒の貴族等が率うる軍隊はギモリ及びアウニウに於てガイス侯の爲めに敗られたり。ヘンリー三世再び戦利あらず、第一戦には寵臣を喪ひ、第二戦にて敵軍の爲めに勝利を奪はれたれば、憤慨措く能はず、ガイス侯に黨與して陰謀を企てたるパリ市民を威嚇したりしかど、効なく、却つて騷擾を惹起するの基となり、市は諸處に防柵を建てて亂民を防ぎたり。三世のスウキッル兵數千は包圍を被り、全く戰鬥力を失ふに至り、王は困難を排し、身を以て漸くパリ城外に脱することを得たり。ガイス侯凱旋の餘勇を振ひ、隊伍を整へ、整然としてパリに入れり、時に一千五百八十八年三月なり、こはフリッブ二世の大アルマダ艦隊スペインの海岸

を出港したるの時に當れり。形勢此の如くなれば、フリッブ二世と舊教徒には萬事成功の徵候現はれ、熾々たる勝利目前に横はりたり。然るに七月英國艦隊と對抗の結果アルマダ艦隊砲火を中止するの敗況に陥り、加ふるに颶風の襲ふ所となりて全艦隊殆ど殄滅するに至れり。ヘンリー三世再び時めき來れり。三世は力めて辭を卑ふして温和の態度を裝ひ、ガイス侯を副將となし、ヒュギノットに對し暴虐の戦を起さんとを約し、プロアに大官會議を召集したり。三世はかゝる手段を弄し、巧みにガイス侯に害心なきことを示して市に誘致し、人をして彼を暗殺せしめ、(十二月三日)翌日ロウレンのカアデナルをも斷首したり。

抑、ガイスは同盟の力を得て自家の勢力を扶殖したりしも、同盟は彼によりて得る何物もなかりき。暗殺の報傳はるや、パリ市民は起ちてガイス侯の弟マエンネ侯を國の副將となし、其の他の大市また起て戦を宣せり、茲に至り三世はナヴァル王の軍に投じて援助を乞へり。ナヴァル王喜んでこれを迎へ、堅く同盟を結合したり。二王は四万人の兵を率ゐてパリを圍めり、然れどもヘンリー三世はシヤケキスクレメントといへる托鉢僧に刺されて重傷を負ひ、遂に起つこと能はざるに

至りぬ(一千九百年)。

三九八

ナザアル王は直に立つて佛王たることを宣言したれども、舊新教徒の何れも之れを首肯するものなかりき。王は已むを得ずパリの包圍を解き、急ぎドイツに赴きてエリザベスの援軍と會し、精銳の兵を率ゐてアアキスに戦ひ、アイザリイの大捷を獲て聲譽を恢復したりき。時に一千五百九十年なり。パリは再度王の包圍を蒙り、將に陥落の悲運に會せんとしたりしが、フィリップ二世の優勢なる干涉によりて漸く免るることを得たり。當時二世の逆境は如何、一方スペインの海岸に遊弋せる英國の艦隊はカルデス及びリスボンを嚇し、或はアメリカより歸來する商船を横奪せんとするあり、他方にはネザアランドと兵を構へしが、ナッサウのマウリス能く兵を用ゐ、二世の勇を以てするも破る能はず、兵亂久しく結ばれて解けず、加之一千五百九十年ワルウン地方の諸州を失ふに至れり、かゝる困憊の形勢をも意とせず、二世は其の將アレキサンダア・ファアネスに命じ、急ぎパリ市民救護に赴かしめたり、八月四日ファアネスはヴレシシネスを出立して二十三日モオに到着し、四月の久しき包圍を解くに至りしは至幸なりといふべく、若し二日間晩かりせばパリ市民

は城門を開くの已むを得ざるに至りしなりと。ヘンリイは進んでセレスの平野に至りスペイン軍と對戦したり。バルマ侯は戰略に富み、巧みにフランス軍を支持へ、四日間敵をして戦に忙殺せしめ居たりしが、五日目に至り、朝來深霧模糊として平野を蔽ひ、咫尺を辨ぜざるに乗じ、メエン河にラグニイを襲ひ、此處に艇隊を作り、兵士及び糧食を搭載してパリ城内に送らんとし、敵の敗る所となり、焦思の計畫は遂に水泡に歸したり。

スペイン及びイタリアの舊教徒は同盟軍を扶護したりしも、新教徒はヘンリイ四世に加擔して英兵七千、オランダ兵二千及びテウレン子爵の率うるセルマン兵一万二千來り會し、佛國は二宗教の戰場となれり。

一千五百九十一年大軍初めて相對峙して交戦せしか、未だ以て雌雄を決するに至らざりき。此の役に於てヘンリイは四月十九日チャートルを取り、十一月ルウエンを略してノルマンディ及びセン河の下部流域を掌握したり。ファアネス再び兵を督してヘンリイを破りしが、カウデベックの役に重傷を蒙り、瘡疵未だ癒ざるに乗じ、ヘンリイはキウヰトオに彼を破り、敵兵三千を殺し、セン河と海岸との間なる窮

地に敵を追躡したり。バルマ侯此の窮境を脱し、河を渡りてネザアランドに進行中病を以て斃れしかば、ヘンリイは強敵を掃ひ、戰場唯一の主となれり。

此の時に當り同盟軍は分離して早晚仇敵たるべき状態を顯すに至らんとせり、十六人黨(バリ同盟の牛耳を握りたるものにして、首府の十六區より撰出せられたる頭領)はアイザリの敗戦は舊教徒優柔不斷の然らしむるものとなし、國會の統領ブリッソンを絞殺したり(一千五百九十一年十一月十)。ガイス侯メエン之れを聞きて大に驚き、十六人黨の四人を捉へて斬に處し、集會を解散して市の管理權をブルウデント派に委任したり(十二年五月九)。此の措置によりて市民の騷亂を鎮壓し、また十六人黨の勢力を挫きたれども、後スペイン人の刺戟によりて秘密の黨派起り、メエンの計畫を阻礙したり。バリは久しく主權を失ひ、人民歸順する所を知らず、一日も早く平和を見んと一般の希望なりしを以て、メエンは大官會議を招集し、九十三年一月代表者等はバリに集會したり。この大競争者はガイス侯メエン及びフィリップ二世にして、何れも王權を爭へり。二世は其の女イザベラに佛國の主權を附與すべきことを揚言したりしが、列席の一員、イザベラの夫たるべきものは何人なるかを尋問

したり、人々皆ガイス侯なるべしと期し居たりしに、スペインの大使はアウストリの大公爵ア、ネストなりと答へしかば、列席の諸員悉く意外の感に打たれ、物議紛々たり。太公頻りに其の誤言なることを主張し、公主の夫はガイス侯なるべきことを以てしたれども、發すれば駟馬も追ひ難く、國會はスペイン王の口實を斥けて用ひず、メエンをして異宗派の外國人に王權を委ぬること能はざる旨を發布せしめたり。

戰亂三十年の久しきに涉りしより、舊新教徒共に勢力衰へ、フィリップ二世の富と兵力を以て扶護せられたる同盟も、カウトラス、アルキス及びアイザリイ戰捷の名譽を擔ひしナヴァル王も、共に市民の歡迎を博すること能はざりき。佛國の將に死解せんとする危機に際して、當時ナヴァル王の改宗は最も必要となれり。法王シキスタス五世も亦ナヴァル王の改宗はエウロッパ及びフランスを危急より救ふの唯一方法たることを揚言するに至れり。

デュアン・ド・アルプレットの子にしてコリグニイの弟子たるナヴァル王ヘンリイは主權者たるヒュウギノットの徒と分離して改宗の舉に出づること甚だ忍びざる所な

りしならんも、徒黨中主要なる人々の勸告辭し難く、遂に七月二十五日セントデニスに於てプロテスタント教を棄るに至りたり。ヘンリー已に主權を握るに至り、同盟の成立最早其の理由なきも未だ餘黨消滅せず、王に刃を向けしも、ベアネスに大敗し、王軍大捷を獲たり。九十四年三月十二日ブリサクはパリの城門を開きて王に降れり。ガイス侯勢力衰へ、九十六年降服の意を表しぬ。九十五年スペインとの小戦并に、アミインの回復(一千七百九十五年)は、ブルギンの平和を來し、二王國の境界はカトウカムブンス條約に準據して再び樹立するに至れり(一千七百九十五年五月)。之れより三週間以前にヘンリーはナントの布告を發して國內の平和を確固たらしめたり、(一千七百九十四年四月)布告はベルグラック布告を基礎とし、到る所プロテスタント徒に信仰の自由を許したるものなり。

第三章 宗教戦争の結果

スペインの衰頹。

フィリップ二世は、ブルギン條約及びナントの布告後四月にして死せしが、二世の西方エウロッパに對する大望は一も効果を收むると能はず。

りしのみならず、スペイン國內世襲の領土をも危ふするに至れり、ネザアランドの大半を失ひ、佛國の主權は、得ること能はず、今やスペインは單に血なき膨大の一帝國に過ぎざるものとなりぬ。

前章に於て宗教戦争を述ふるには、叙事の統一に心を用ひたれば、之れに附隨する挿説を省略するの已むを得ざりしが、本章に至りては戦争の完結を告ぐるの目的を以て、當時に於けるスペインの無謀なる大望が如何なる終局を告げしかを説かんとす、歴史に於ける道徳上の教訓は蓋し之れに過ぐるものあらざらん。

逐次述べんとする傍説は、フィリップ二世のポルトガル征服、地中海上にオットマンの侵略を支へ、遂にデムマルクを領し、北海及びバルチック海上の覇權を握らんとせる冀望等なりとす。

葡王ドン・セバスチアニアフリカ遠征中、タンディア灣の南アルカザアキヴィアに於て死せしかば、伯父カアデナルド・ヘンリー六十七歳の高齡を以て王位に上りしが、幾日ならずして死し、王弟の私生子ドン・アントニオ王位を繼承せんことを主張したり、然れともフィリップ二世已に王權を要求して多くの貴族を買收し、又アルゾ侯

を兵士三千に將としてポルトガルに遣はし、ドン・アントニオをアルカンタラに破り、アントニオはフランスに逃れたり。二月にして王國舉りて二世の有に歸し、トマアのコルテス(Cortes)は二世を國王に承認すると同時に、ポルトガルの裁判所及び首府は現存の儘にて凡ての習慣を保ち、獨立の王國となすべき條件を附帶したり(一千五百八十一年九月二日)。かくて半島全土二世の有となりしは勿論、東インド及びポルトガルの諸植民地も悉く王の支配する所となるに至れり。

スペインの首府マドリッドは河川の利なく、港灣の便なく、一市として見るべき價値なし、されは半島中の大河に瀕せるリスボンに奠都し、此に中央政府を設立したらんには、スペイン將來の隆盛は如何なりしならん。然るに二世及び人民の頑迷にして偏見なる、此に注意を拂はずして、空しく國運の伸張を逸せしめたるのみならず、王は荷國民を鎮撫するの策を取らず、唯呵責して民衆の怨恨を招くに至りしは是非もなき次第といふべし。二世は上下の怨聲を意とせず、二千の僧侶を斬して殘虐の血を瀕き、或は官職を賣り、或は富有なる寺領をスペイン人に與へ、前王の領所は沒收し、貴族等を官位より斥けて領土に閉居せしめたり。十八年の治世中

葡人にして官職にあるもの僅に三人、他は悉くスペイン人なりしといふ。

二世の暴戾に加ふるに諸大臣等漸次貪慾の手を擴げ、アメリカ商業の專權を横領し、スペイン人に賦課する所の諸税を葡人にも亦負擔せしめしのみならず、諸種の勞役に服せしめたり、然れども兵役のみは然らず、そは彼等の反心を慮りてなり、さればスペイン人は殆んど軍隊の勤に服し、英國及びオランダの攻撃に對し東西奔走し、心身を疲勞するに至りたり。二世の死後尙ポルトガルはスペインの有なりしも、暴戾に堪え忍びたる國民の感情如何て久しく靜平にあり得べき、機會の乘ずべきあらば常に爆發せんとするの形勢を呈したり。爆發は遂に一千六百四十年其の萌芽を現したり。

フィリップ二世已にポルトガルを併呑し、今や半島統一の大問題に解決を告ぐるの好機に會せるも、施政の途を誤り、人心日に背離し、加ふるに葡領植民地防禦のためカスチール人の戰場に斃るゝもの多く、人口大に減少するに至りて、オランダ人に擅に海上の霸權を掌握せしむるの端を啓きたり。

地中海のネエブルス、シシリイ、サルデニア及びバレアリック諸島は當時スペイン

の存にして、マルタの武士領は二世の統御下であり、何れも海上の要害に位し、假令二世の勇を以てせざるも、海上の権利を握り、エウロップ通商の保護者を以て任ずることとは容易の業に屬せしなり、然るに一千五百五十八年ソレエマン一世セント・クエンチンの役後幾何もなく艦隊を送りてイタリーの海岸及びバレアリック諸島を掠奪したり。是より先六年アルゲリアのオットマン人はマルタ武士領のトリポリを略取し、またオットマン海軍總督ドラゴウは毎年海賊船を出してスペイン海岸を脅掠せり。二世震怒し、五十八年海陸の大軍を率ゐてオオランより出發して遠征の途に上れり、然れども戦利あらず、海陸の兵士を失ふこと極めて多かりき。翌年再び遠征の師を起し、戦艦二百隻、海兵一万五千より成れる艦隊トリポリに進航中颶風に逢ひ、其の大半を失ひて殘艦漸く歸國することを得たり。六十三年ネエブル艦隊また暴風の爲に全滅し、後二年マルタ島はソレエマン一世の精兵四万の大軍に包圍せられたり。一世は即位の始より夙に基督教國に對して獲る所ありしが、今や其の治世の終りに當り、一舉して大功業を收めんと欲し、攻撃激烈なりしも、勇將ラ・ヴァレタ能く防ぎ、四月の久しきに亘るも終に陥らざりき。若し夫れマルタ

島にしてオットマン人の手に歸せんか、地中海は遂にエウロップの存にあらざらん。ソレエマンマルタを奪ふ能はず、七十年ヴェニスよりサイブラスを、スペインよりチユニスを奪ひて忿恨の一部を霽したり。

是に於て基督教國大に震動し、ヴェニス、法王及びスペイン王の間に一大同盟を組成し、三百餘の戦艦を艦装して海陸の兵士八万を搭載し、司令官ドン・ジュアン之れを率ゐ、オットマン征伐の途に上れり。レバント灣にオットマン艦隊と會し、激戦數時、遂に敵艦を破り、三万のオットマン人を殺し或は捕へ、大艦百七十艘を捕獲し、八十艘を撃沈し、漸く殘餘の四十艘のみを遁逃せしめたり。此の大捷によりて異教徒の羈絆を脱し、自由を回復したる基督教民は實に一万三千人なりしといふ。

法王バイアス五世戰捷の報を得たるとき、神は偉人を遣はして世を救ひ賜へり、偉人の名ジュアンを忘るべからずとの語を發して感喜したり、法王已に然り、教民また狂喜し、就中ギリシャ全土はオットマンの管理を脱せんとして大に動搖し、コンスタンチノブルまた動き、ためにサルタンを驚かせり。かゝる形勢に乗じてオットマンを攻撃したらんには、永久歐洲の危害を除去し得べかりしに、二世の明こゝに

至らず、却つてジエンの名聲を忌み、アルバニア及びマセドニアの王たることを容さず、單に目前の利害を慮りて百年の大計逸するを覺らず、赫々たる大勝須臾にして消滅せしは惜みても猶餘りあるべし。

後幾何もなくサルタン、セリム戰艦百五十艘を率ゐてヴェニスを襲ひて破れり。一千七百七十八年フリッブ二世マウド三世と會見して休戰條約を締結し、治世の間再び戰役を見ることなかりしも、トリポリ、チュニス及びアルヂアスをオットマン人の有に歸し、反服常なく、貪婪飽くことを知らざるムウア人及びアラビア人を制御して能く鎮撫したり。然れども彼等は劫掠隊を編成し、互に力を分つてシシリイ、イタリア及びスペインの海岸を劫略せしめられたれば、歐洲の商業國は税金を出して漸く通商上の危害を免るることを得たりしとは實に屈辱の極といふべし。フリッブ二世は一所に力を集注することなく、漫然多方面に武力を殺き、終に宿日の大望を水泡に歸せしめたり。

フリッブ二世のスウキイデン及びデムマルクに於ける商業もポルトガルと同様の結果を生じたるに過ぎざりき。先王チャアルス五世はデムマルクのクリスチア

ン二世を納れて義弟とし、また同盟を結びて北方サキソン及びヘシアンの新教徒防備に援助を與へたるのみならず、デムマルクを五世の配下に屬せしめんことをクリスチアン二世より申込みたるも、五世は自ら謙讓し、若し王儲なきときはアウストリア家出でて北方三州の主たるべきことを答へたりき。

フリッブ二世も亦此の例に倣ひたりしが、ゼルマンは當時二世の有にあらざれば、先王と異なりて多大の資を要せざるを得ざるものあり。一千五百六十四年王はガスタヴァス・ウサの後葉エリック十四世に保護金を與へて、デムマルク王フレデリック二世と戰を起さしめたり、こは私にフレデリックを仆して舊教徒たる同族のロウレン侯を王たらしめんとしたればなり。計策無効に歸し、エリック十四世廢せられ、弟ジョン(カソリック)カゼリンジャゲロンの夫三世位に登りしかば、フリッブ二世兵を送りて彼を責め、且つ新王に迫りて人民を悉く舊教徒とし、法王に使節を送りて恭順の意を表し、ルウサアの著書を讀むを禁じ、人民は皆ゼスイト教徒となりて國內に有する教壇を擧てゼスイト教會に交付すべきことを以てしたり。これ、一方には宗教上の利害、他方には政治上の得失問題たるなり。フリッブ二世はスウキイデン及

ビボオランドの二王と同盟を組成し、デムマルクの分割を議定し、サウンド・ジイランド(コオペエヘエゲンを抱括す)、ファイオニア及びジャットランドを以てスペインの領地となしたり。然るにカゼリン・ジャゲロン(一七三五年)死してより舊教徒の勢力大に衰へ、ゼスイト教徒は國外に放逐せられ、バルチック海上に於けるフィリップ二世の計畫悉く消滅するに至りたりぬ。

此の時に當り、フィリップ二世も父王チャアルスの如く王位を退き、寺院に隠遁して功業の衰頹を蔽ひたりしならんには、半生の偉勳永くに光輝を放つことを得べかりしならんに、さはなさて先見の明なく、遂に絶望の死を遂げしは惜むべきにあらずや。それチャアルス五世の戦ふや、必ず之れに伴ふ正當の理由を認めざるなく、かのイタリイに於ける佛國の權勢を打破したるが如きは、イタリイは勿論フランスに取りて危害の憂ありしことは、何人も首肯する所なり。また能くオットマンの侵略を防阻し、當時支離滅裂の状態に存したるセルマンをして國內の統一を圖り、平和の曙光を與へしは、五世の功業中特筆すべきものなり。その兵馬の裡に往來するや、兵士の掠奪を抑制することなく、また苛酷の處置ありしとは、雖も彼の胸算

は常に大局に在り、未だ以て自己の利害に拘束せられたるものあるを聞かず、且つ商工業の發達に大障害を與へたるも、一旦希望の逸したるを自覺し、到底回復の機なしと知るや、猥りに人民を苦しむるを好まず、泰然として王冠を棄て、後半世を寺院に隱遁し、過去の罪惡を悔ひ未來の祝福を祈るが如きに至りては、當に帝王の器あるものといふべし。之れに反して、フィリップ二世は單に猛進の勇氣のみに驅られ、頑然として王位を固守し、勢力の脚下に墜落したるを知らず、假令王として死したりしと雖も、全く虚名に過ぎざるものといふべし。

チャアルス五世はスペイン、イタリイ、セルマン帝國及びネザアランド各州に均一の賦役を課し、決して企業の爲めに一地方の民衆のみを苦めざりき。フィリップ二世は然らず、殆んどスペイン人を驅り盡したるのみならず、精力と自由の精神とを奪ひて、自己の大望に全國を瀕死の境に陥らしめたるのみなり。

二世の世までアラゴンは數個の特權を保留し居たりしも、アントニオ・ペレズの審問後之れを奪ひたれば、全半島を通じてバスク地方のみ *privileges* を有するに過ぎざりき。

二世は異教徒を目して單に上帝の破教者なりとのみなさず、また己に對する反逆者なりと見做し、異教徒糾問所の裁判を勵行し、異教の種子を芻除せざれば已まじと決心したりき。是に於て彼は先づ宗教の統一を圖らんがため、往昔よりグラナダ王國を建てたるムウア人を虐待せしにより、遂に叛亂の端を啓けり。ムウア人はフェルチナンド・ゼカソックの時信仰上の迫害を蒙り、已むを得ずグラナダ條約を破棄したりしを、一千五百六十八年二世は彼等に迫りて姓名を變じ、傳來の言語及び服裝を改めしめたるのみならず、法官の許可なくして居住を移し、又武器を貯ふるは勿論、杖端に金屬すらも附くることを嚴禁したり。即日人民蜂起して叛逆の旗を擧げ、山また山に炬火を焚き、烽火を各所に擧げ、以て獨立の信號をなしたり。老若男女を問はず悉く武裝してアルバジャラスの巖間に防堤を築きて死守したり。此の時に當りチュニス及びアルチャアスの同胞來援したらんには抵抗久しきに耐へ得べかりしも、サルタン・セリムの救助なく、孤獨の悲境にあるに際し、アウストリアの豪將ドン・ジアンヌスペインの精兵を提げ來りしかば、ムウアは空しく恨を吞んで降服したりき。二世はムウア人をカスチイルに輸送し、十歳以上の

男女を悉く奴隸となしたり(一千五百七十年)。

スペイン政府は從來内外の計策に顯著なる活動をなしたりと雖も、異教徒平定の師連年起り、ために國家の富強に心を須ゆるの暇なく、國事日に衰頽に赴き、商工業はユダヤ人の追放とムウア人の叛亂によりて衰へ、加之政府の專賣權を採用せしにより益發達を阻礙せられたり。從來アメリカに輸入する貨物は悉くスペインのものならざるはなき状況なりしが、今は漸く其の十分の一となり、他は悉皆密輸入品のみとなり、以前セヴェイルに於ける絹布、毛織の工場に任用したる織機の數は千を以て數へられしも、是れ又二三百に減じたりき。戰亂絶ゆる間なくて人民塔に安んずる能はず、隨つて農作に力を用ゐざれば、害蟲は田畝に滿ち、耕作物は荒敗したりき。國民は兵亂に斃れ或は植民地に移住して國內の人口大に減少し、却て僧侶の數非常に増加し、二世の世殆んど百萬の多きに達したりといふ。

人民は或は海外に出て、富を得んとするものあり、或は兵士の群に入りて功名を博せんとするものあり、或は僧侶となりて無事太平の日を送らんとするものありて、國の富強を慮るものなく、國民の勞働力は全く中絶の形勢となり、一國の需要

品すら産出すること能はず、小となく大となく悉く隣國の供給を仰ぐの貧弱となり、英國艦隊の襲撃を逃れて辛くもカデイズに到着せるアメリカ歸來船の搭載せる金塊は、國家の資力とならずして直ちに隣國に流出するに至れり。兩インドの主となり、且つ世界富源の領主たるスペイン王は、恰も仕拂を停止したる無資力の商人の境遇に瀕し、死後負債の多きこと實に二千萬弗の巨額に達したりと。スペインの朝野を擧げて、真正の富は金貨にあらで、此れを作る勞力にあることを知らざりしは、誠に遺憾なりしといふべし。

一千五百九十八年、フィリップ二世は激烈なる肺勞を病みて崩殂しき。在位の久しき一日も靜平なき活動は當然スペインに偉大の功蹟を遺すに餘りあるべきに、國民の心裡に唯專制の勢力を印銘したるのみ。前項述ぶるが如く、二世はスペインに遺すに血なき形骸を以てしたり。專制政治の因習久しく國民の心に染浸し、十八世紀に至り、猶プロテスタントの聖書を読みしとて、斷首の刑に問はれたる人々の中には、世の尊敬を受けたるものもありしといはる。

イギリス及びオランダの隆盛。イギリスは已に幾多の難關を通過し

たりしと雖も、フィリップ二世の威嚇と舊教徒の陰謀は、猶國內の動搖を招きたり。女王の措置は大に人心に満足を與へて愛國の士氣を勃興し、アングリカン教派は其の勢力を扶植したり、かく英國は内に英氣振興し、外は敵の凌駕を防沮し、まつた戦捷ありたるにより、國民は勿論歐洲の輿論は英國の隆盛に危懼を抱くに至りたれば、政權の歸一を圖り、内外の人心を收攬するの必要生じ、王朝の權利茲に鞏固となり。當時の權力及び施政の状態を目して、恰も東洋專制國の治世と同一なりと史家のいへりしまで、絶對權を支持したり。エリザベスは國內の舊教徒は勿論清教徒及びノオンコンフォーマリスト(宗派の名)を苦しめ、監督教會の教令を容れず、宗教裁判の權利を認めず、且つ信條に關する諸種の祭典を禁じたり。之れを要するに、信仰の自由を檢束する嫌惡すべき法令を發布したるなり、蓋し王者の口實として、由來己の非望を蔽はんがためには、皆以て國家必要の政策なりとするなり。虐待四十年の久しきに亘りたりと雖も、教徒は日に月に數を増加し、又教會の輿望大に隆盛となりて、却て禁令に反抗するの狀況を呈し、將に革命の萌芽を顯さんとしたり。かく宗教上の暴戾は、また以て政治上專制の具となり、舊教徒の攻撃に關しては

アングリカン及び嚴肅教徒インコンフォミスト同一の歩調を取り、法律を犯すも之れを意とせず、王權の濫用を生ずるの果を生じたり。スタア・テムバアの如きは專横最も甚しく、陪審官にしてテムバアの意思に反して、被告人に解除の宣告を與へたらんには、事理を審かにせずして直ちに陪審官に課するに多大の罰金を以てし、或は無期の入牢に附することありたり。かくてイギリス人に對して唯一の權利保護者たる陪審官の權利施行力は當時有名無實の状態となれり。此の他樞密院は專擅に人を罪し、國務大臣は猥りに軍律を弄して些末の罪科をも裁判したり。

かく陪審官の權利壓塞せられたりしと雖も、國會は猶存立し居たり、然れともエリザベスは之れに自由の權を與えず、加ふるに政治に隻言だも容喙することを檢束したり。一千五百八十一年國會が國內に宗教自由崇拜の特許を許容したることの如きはエリザベスの嚇怒に觸れ、全院謝罪したり。また上下兩院を通じて王の意息を窺はず、自由に發言するものは牢屋に投ぜられたり。專制實に其の極に達し、人民の自由は殆んど死せるの國情にありしと雖も、エリザベスは夙に心を國運の發達に注ぎ、國に命ずるに勤儉力行の美風を獎勵し、人民の財囊を肥すに汲々

として國政を見たり。之れを以て當時國家の富強は大に顯表すべきものありたり。

加之エリザベス朝にはセエクスピア、ベエコン等の文豪あり、政治家としてはバアレエあり、航海者としてはドレエク、ハウキンス、フロビッシャア、ラレエ及びデヴィスの輩出したるありて、後世のもの此等偉人の行蹟を想起する毎にエリザベス朝の盛期を追慕し、同時に當時の國民が自由の權利を失ひたる事實を忘却するに至らしむるものあり。ドレエクは航海の中途マゼランの死により、艦隊の司令官となりて世界廻週者の先導となり、始めてケエブ・ホオンを發見したるものなり、彼名譽の航海を了へて英國に歸るや、エリザベスは親ら其の船に臨幸して「ナイト」の稱を與へたり。ハウキンスはドレエクの親戚にして、奴隸賣買を發達せしめたることによりて有名なる人なり。フロビッシャアはセバスタアン・カボットに亞き、北西の航路を索めてシナに達せんとしたる有名の航海者なり、この通路は實に爾後三百年間幾多の勞力と苦心とによりて漸く發見せられたる所なりといふ。デヴキス海峡はデヴキスの發見する所にして、ニエウフランドの植民地はギルバートになれ

り。ラレエは北アメリカに地を有し、清女王のためにヴァージニアと稱す、英國に輸入したる物産中最も著名なるものはかのポテトオ(馬鈴薯)なりとす。アイルランドの櫻樹はラレエの始めて植附けたるもの、また、英國に喫烟の習慣を導きしは、ヴァージニア植民地より渡來したる煙草によれり。

エリザベス治世中工業盛に勃興し、フレミング人はスペインの羈絆を脱して無数の移民を英國各部に送り、就中ランカシアアの如きは其の甚しきものにして、永住の基を樹て、人口次第に繁殖し、各人皆英國のために職業を勵みたれば、工業中羊毛業長足の進歩をなしたり。以前フレミング人はロンドンに假店を營み、陶器及び刷毛の類を販賣したるに過ぎざりしが、今や大商店を起し、大倉庫を有し、世界物産の集散所となるに至れり。一千五百七十一年一月廿五日エリザベスは親ら銀行家トマス・グレッシャムの創置したる公立ロンドン交換所の長となり、大に商業機關の發達を奨励したり、商業保障の組織之れに始まる。

賢明なるエリザベスも亦晩年不幸を見るを免かれざりき。女王はエセックスを寵愛してリイスタア伯となせしが、伯寵を恃みて暴慢不遜日に加はり、遂に女王の

嫌惡する所となりて、不愍の最期を遂げたり。そは伯の驕慢極點に達し、自ら謂らく、己の權勢を以てせば能く政府の大臣を斥け得べしと信じ、一千六百一年二月八日餘黨三百人を率ゐ、自ら劍を持してロンドン街上に現はれ、市民を招きて己に歸せしめんとせしが、應ずるものなかりき。伯捕はれて死刑の宣告を受けたれども哀願することなく、益々狂暴したりしを以て、斬せられたり。三年四月三日女王崩殞す、齡七十歳なり。女王治世中に英國に與へたる二大偉業は、英國にプロテスタント教義を普及せしめ、海上權を掌握し、スコットランド王を後儲として英國の統一を圖りたることなり。

エリザベスの朝に二偉人を出せり、即ちセエクスピア、ベエコン是なり、何れも一個の英國人といふよりは世界的偉人にして、殊にセエクスピア最も顯著なり。セエクスピアは自由の意想に富み、放豪の軀度を持し、詩想は深玄にして悲劇的なり、其の創意の卓越なる近世史中比を見ざる所とす。古來有名なる劇詩多しと雖も、英國はセエクスピアを以て古今獨歩の偉人として崇拜せり。一千五百六十四年に生れ、一千六百十六年五十二歳を以て死せり、著作中主要なるものを擧ぐれば、

Othello, Hamlet, Macbeth, King Lear, Richard III, Romeo and Juliet, The merchant of Venice, Caesar, The Tempest, 等にして、始めの四作を世に四大悲劇と稱す。フィリップ・シドニーは學識才能に於て遙かにセエキスピアに及ばずと雖も、身貴族の班に列し、詩に巧みなり。セエキスピアの友人にして喜劇及び諷刺詩人スペンサーあり、其の著作中有名なるものを The Faerie Queen, Ben Jonson とす。

フランシス・ベエコンは一千五百六十一年に生れ、近世哲學の泰斗なり、一千六百二十三年 De Augustinis Scientiarum 及び二十年 Novum Organum を著し、何れも科學界に新見地を開發したり。然れどもベエコンは無上の拜金家なりしを以て大に品位を墜落したるものあり。一千六百十九年英國高等法院長に任ぜられしも監守盜の罪を犯し、牢獄の辱を享るに至りたりと。

合衆共和州 (The Republic of the United Provinces) には詩人又は哲學者の輩出なく、且つ未だ内地靜平の域に達せざれども、從來の騷亂にて能く國の元氣を増加したり。土地は半海水に瀕して天然の防障をなし、宗教上の迫害を脱して自由の精神を發揮せしむるの地となれり。されば歐洲人にして宗教上の關係より火刑又は虐待

を免れて逃遁するもの悉く合衆共和州の國旗下に集合するの形勢となりたれば、國內農作に従事するものなく、海陸軍は日に増大となり、オランダ及びジイランド兩州にて水夫の數七万に達したり。一千六百一年より四年に至る三十九ヶ月の久しきに亘るオステンドの包圍に同盟軍の死するもの六万人、スペインまた八万を失ひしに、バクヴィア人は戰艦を率ゐて海上を蔽へり。オステンド城寨を擧げてスピノラに降りたるの年、漁業者に賦課したる税金のみにて五百万「フロリン」の巨額に達し、悉皆國庫の有となりたりと、またオランダ艦隊の一部はマラッカの征服に依り、世界の兩端に新植民國の基礎を樹立したり。

オランダ人は自國の輸出品を有せざれば、船舶を利用して大洋を横行し、他の貨物を運送するの任に當り、或る一國より貨物を買收して他國に輸送販賣し、以て巨利を博したり。堪忍なる漁夫は絶えず海上に游弋して天然の富を獲收するに力を盡し、無數の海産物を全歐土に供給せしかば、一週一回の魚食の習慣を有するロオマ教國にも亦之れを運搬するに至りたり。漁業の利は鯖「ト」に對し黄金「ト」の交換なりしとは當時の俚諺に上れるものなり。其の他商人の多くは當今

の間屋業にして、口銭手敷料を收めて營業に従事せり。巨多の船舶を有するを以て、貨物充満して價低き地には自由に船を行き、それを搭載して缺乏せる諸國に分布し、かくして莫大の利潤を得たり。毎年二三千のオランダ船舶はフランスの諸港に來り、穀物葡萄酒及びブランデーの類を收め、又外國旗を扛げたる四百以上のオランダ船はスペインの港灣に入りて自國の穀物及びスペインに缺乏する北方の産物を販賣して、アメリカより獲たるスペインの富を拉し去れり。

フィリップ二世は一千五百九十四年リスボンを閉鎖してオランダ人の來船を禁じたり。翌年彼等は遠き外國に商社を設立し、貨物生産地に於て賣買取引を開始したり、組織は漸次鞏固となり、一千六百〇二年の頃に至りてはインド會社の設置を見るに至れり、ポルトガル人は羨望の念に驅られ、オランダ人の隆盛を嫌惡するに至りたれば、彼等は自營の必要に促がされ、ジャバ、アムボイナ、タイドル、臺灣、セイロン島及びマラッカに堡寨を築き、工場の安寧を維持したり。かくて十三年間に船艦八百を武裝して敵の船舶貨物を捕獲すること五百四十五、利するところ實に一億八千「リイダル」なりしといふ。東インド會社の利益配當は二割を下らず、時として

は五割に上騰したることありき。此の如き全盛時代は今猶見ること能はざるも、オランダは富國の一に位し、首府アムステルダム（一千五百九十八年）の如きは世界富有の市場となれり。

ヘンリイ四世の功業、フランス再興（一千五百九十八年）。ヘンリイ

四世は國內の統一を計らんとすため、當時同盟の主領に巨額の金銀或は名爵を與へて悉く服従せしめ、又ナント條約に依りプロテスタントをして政治的存立の基を樹立せしめたり。内憂外患の餘フランスは休養を要し、秩序を整頓し、且つ國家の安寧を保持せざるべからざるの時となれり。ヘンリイは先づ國家組織の改善に心を注ぎ、個人の情念を拋棄して、専ら行政の普及を勵行し、兵備の充實を圖り、過去の怨恨を離れ、國家の利益及び隆強を擧ぐることに心身を委ねたり。

當時の財政は紊亂の極に達したりき。佛國の負債は三億四千五百万フランにして、現時の價格にては凡そ十三億フランの巨額なり。年々の納稅額一億七千万フランなれども、政府の純収入は漸く三千万フランにして、内一千九百万フランは政府の債務支拂に減却せらるゝなり。王領土は悉く賣却して跡なく、政府財政の

官衙は上下擧つて監守盜の府となり、政府に収入すべきもの或は收入したるもの性質を知るものなく、甚だしきは支拂中に所在を失ふとあるも亦知るによしなく、全く暗黒迷裡に在るの状態となり居たり。ヘンリイ四世風に茲に見る所あり、一千五百九十九年舊知サリイを擧げて財政の顧問となしたり。サリイは先づ政府組織の巨細に精通し、凡てを精査吟味したる後、裁判所に命じて不正の判官を淘汰せしめ、收税吏をして收税徴書を附し、之れに現金を添へて官納せしめ、各州の知事に嚴達して規定外の課税を禁じ、政府の債務を校刪して疑はしきもの多くを無効とし、且つ公田貸用法を興したり。無用の官職を廢し、不當の年金を刪減し、不法の免税を回復し、其の他改竄删除したるもの夥しかりき。人民にして自ら貴族と稱し、又は貴族の位置を持したる富豪も、公認の貴族にあらざる限りは悉く納税の義務者となしたり。されど一千六百〇四年の創設にかゝる世襲官職、即ちパウレット權のみは國庫の財源なるを以て廢せざりき。(財政、裁判所の官吏にして其の職位に對し、年々國王に納税を納付し、年間に死亡せざる限りは世襲權を有せり。此の税則は一千六百〇四年の宮内の長官パウレットの始むる所にして官職收入の六十分一税の規定なり)

収入方法の正確は又當然支出方法の節減を伴はしむるものなり、實にヘンリイ

四世治世の終末には、政府は能く一億四千七百萬フランの負債を償却し、八千萬フランに値する土地を回收し、八百萬フランの年金を減却し、二千二百萬フランを國庫の有とし、堡寨及び公共の建築物に四千萬フランを投ずることを得、また二千萬フランの國庫準備金をさへ得るに至りたり。

經濟は富を處理するの力を有すれども、未だ以て之れを生ずるものとは云ふべからず。されはヘンリイ及びサリイは農商工業を獎勵し、之れによりて國家を富強ならしめんとせり。ヘンリイは此の三大業に對して一様に力を竭したりしが、サリイは特に農業に一層注意し、自分ロオヤル・エコノミーと稱する書を著し、盛んに農業は國家富強の基礎なることを鼓吹したり、書中「農作及び牧畜は恰も國を肥す二つの獸の如きものなり」といへる句あり。一千五百九十六年及び九十八年を通じて再度汎く國中を巡遊し、親しく國內の實情を觀察したる結果、一千六百年布告を發して諸税二千萬フランを免じ、且つ土地税約百八十萬フランを減じて大に民力休養の實を擧げたり。一千五百九十六年公私の債務によりて勞働者を捕へ、用具或は耕作用の牛馬を徵收することを禁する古代の法令を再興し、且つ嚴禁令を

布達して、兵士にして無爲徒食猥りに國內を横行するもの、又は國王に勤侍するもの、外武器を携帯するものは死刑に處すべきことを命じたり。一千六百一年サリイは穀類を輸出することを許可したり、此の策や當時の形勢より觀察するときには全く大膽の行爲なりしが如しといへども、サリイの明能く國內需要供給の度合を精査したる結果、此に出でしものたるとは疑ふべからず。彼は又土地灌漑の法に心を傾け、國人に其の必要を告示したり、土地にして灌漑の完備を告げしものあるときは、租税を免じたるを見ても志の一端を窺ふに足るべし。當時溝渠法の名人フラバントのブラッドレエの指揮に土木を興したるフレミングの工人等は、メドックに一區縣を建てたり、世人呼んで小フランダア國といへり。ラングドックの一人プロテスタントオリヴァ・デ・セルレは *Theatre of Agriculture* 及び *Management of the field* を著し、耕作法の摸範を國人に教へ、佛國農業の祖父と尊稱せられたり。

サリイはプリニイの説と同じく、田野に於ける耕作は有力の兵士を生ずるものなりといへり。此の持論に依りて、工業は佛國人の活潑なる生涯を營むに不適當なりとし、原野の業は能く身體を強健にし健康を保持するに足ると雖ども、工業は

塵埃充滿せる工場内に行はるゝものなれば、體力健康漸次衰弱し、終に人口を減滅するの基なりとせり。かゝればサリイは外國の工業組織を輸して自國に植ゆることには極力反對の意見を持ち、常に人に云へるには、國に物産の充満し又は缺乏するものあるは是皆天意なり、されば通商手段によりて自他の有無相補充すれば足れりと。ヘンリイ四世はサリイの如く單に農作のみを以て満足せず、國內に桑樹を植へ蠶業を奨励したり、テイレリイ、トアネルスの地桑樹の繁殖を見るに至れり。又各州に養蠶所を設置し、パリ、オレンス及びトアスの養蠶所は事業大に發達し、ために従來絹織物の供給をイタリに仰ぎ居たりし佛國は、却つて之れを輸出するの隆盛を致しぬ。又ミラン産の如き金糸の縮緬製造を興したり、當時ミランより佛國に輸入する太横糸の縦氈、鍍金革、玻璃器、水晶盃、鏡、オランダ布等は年々百二十萬クラウンの巨額に上れるなり。一千六百四年ルイは商業大會を招集し、種々の議題中、従來の組合に大改革を加へ、また軍馬育成所の設置を起したれば、佛國は爾後ゼルマン、スペイン、トルコ及びイギリスより軍馬輸入を防阻するに至れり。フランシス一世によりて擴大となりたる海軍は當時甚しく衰態を呈せり、そは

カアデナル・ド・オサットの一千五百九十六年ヴェロイに與へたる書信によりて明なりとす、書中の一節に、イタリーの小貴族は海上に於ける権力の微弱なるにも關せず尙能く其の海軍兵器所には戰艦を有す、然るに佛國の如き二面海に瀕し實に海防の必要あるにも係らず、海賊の擄掠に備へ、イタリー小貴族に何等の保護を與ふるに足る海軍力なしとあり。かくサリイは海軍に心を用ゆることなかりしを以て、遠き外國にある植民地の屢々敵の嚇す所なれるを聞き、恐怖の念を生じたることありしと。ヘンリー四世最始の志望は諸大臣のそれよりも遙かに遠大なりき。一千五百七十八年の早きより佛國船舶百五十艘はニュー・フランドランドに往來したることありき、ヘンリー四世は北アメリカに商業を奨励せんとして、セントンジの人チャムブレンを其處に遣はしたり。チャムブレンは一千六百四年キアナダに一港を發見し、ポオト・ロオヤルと命名せり、之れ當今のアンナポリスなり、後一千六百八年セント・ロオレンス河に瀕せるクエベックを發見したり。ヘンリーは益々進んでインド會社を設立し、英國及びオランダ會社と競争の位置に立たんとしたりしが、計畫の實行なくして死せしと雖も、トルコ人と一の條約を締結し、あらゆる

基督教國民は佛國の國旗及び保護、又は外國領事の命令の下にレヴァントに於て自由に通商することを得べしと定めたり。

サリイは屢、國內を巡遊して道路を開鑿し、或は橋梁を架し、専ら交通の便を開きたり。今猶佛國を通じて交錯せる無数の水渠は其の設計四世の世に起りたるものなり。當時は唯ブライアルの水渠のみにして、ロイヤに起りフロンテンビユウより九キロメートルなるモレットに至りセン河に合せり。此の水渠は二坂道を連接する水匣式の最も古き工事の一にして、其の全長五十五キロメートル、傾斜百十七メートル、水匣の數四十なり。

一千五百九十五年には四個の聯隊ありて各隊長之れを支配せしが、ヘンリー四世十一個となし、ルイ十三世三十個に増加したり。然れども外國兵を雇用するの習慣當時尙存せり。騎兵の數は全軍隊に比して多く、貴族専ら之れに當れり。王の親兵は別に兵舎に收容したるなり。サリイの手にある砲兵は非常の権力を有し、頭領には國王の大官之れに専任することすらあり。一千五百七十二年以來貴族は國王の直接允許なくして大砲を所有することを禁ぜられ、兵士は從來年二回

若くは四回に給料を交付され居たりしを、サリイ改めて月拂の制を定めたり。一千五百九十八年始めて砲寨監を、翌年軍糧監を任命し、サリイ之れを監督し、多数の砲寨を修理し、内亂のために空しくなれる兵器庫を充實せり。終りにヘンリイはルイ十四世の古智に倣ひ、老兵の扶持法を制定したり、然れどもリュウ・デルウシンの慈惠病院創設前崩殂せしは遺憾なりといふべし。

ヘンリイ四世の意志悉く佛國の隆盛を企圖するに外ならざりしかば、國民の興望大に昂まりたるも宜なりといふべし。老傷兵士に扶持を與へ、農工商を興して國民の致富を招きたる光輝の一面を見て、全然ヘンリイの功業を謳歌すれども、彼の弱點あることをまた忘るべからず。彼の政略は或る黨派又は人々に對して深き創傷を與へたるなり。ガブリエル・ド・エストレスをビウ・フォルト侯爵夫人となし、ヘンリイ・ド・エントレグをヴェルニール侯爵夫人とせしが如く、私情偏曲の處置多く、加之四世のナヴァル王たりしときに忠勤を勵みしものに對しての豫約を、佛王登位の日に至りて全然忘却して顧みる所なかりしか如き、これ皆不平の聲となり、遂に陰謀を企圖するものあるに至れり。

陰謀結黨數多かる中に、最も有名なるをマアシャル・デ・ピロンとす。サヴォイ侯はラブレッセの領邑を失ひて心中平かなる能はず、スペインも亦佛國に敵意を抱きて壓倒の念昂まり居たりき。此等の三雄は佛王の人望地に墜ち、貴族等の内心太く背乖せるを見て彼等を煽動し、反逆を企てしめて己が復讐となさんとせり。ピロンは才幹人に勝れ氣宇壯大なり、國王及び法律の羈絆の重荷を嫌惡せる貴族等の頭領となり、私に黨徒を集めて陰謀を企畫したりき。一千六百年陰謀の初めて露現するや、ヘンリイは彼を誡めて赦免したり、然るにピロンは再度不軌を計り、顯はれて再び捕へられしが、又ヘンリイは彼に諭すに忠信の誓約を以てしたれども、肯ぜざりしかば、其の頑強を惡み、且つ貴族一般に惡例の傳播せんことを慮りて斬に處したり(一六〇二年)。王の舊友ブイロン侯陰謀に加擔せしが、禍の身に及ぶを知りて逃遁したりき。ヴェルニール侯爵夫人の父弟は一千六百年スペインと再度の同盟を結び、捕はれて斬首せられ、侯爵夫人は罰金を出して死を免れたり。

かくの如くスペインは自ら戦ふの力なく、單に他の陰謀によりて敵國の勢力を殺がんとしたるなり、蓋し國內の富強を計らず、漫然佛國に對して敵對の位置に立

つことの不利は、エウロッパ舊教國の主となれるアウストリア家さへ絶へずヘンリー四世の蠶食する所となれるを見ても知らる。然れども四世がアウストリア家の勢力を打破せんことは夢想に過ぎざりしが、終に夢想はエウロッパの政治的組織に鞏固なる基礎を築き、宗教及び國家の獨立は列國保障の下に樹立せらるゝの結果を生ずるに至りたり。四世はアウストリア家をネサアランド、イタリイ、及びセルマンより驅逐し、アウストリアの擴大なる邑土を包括せるハンガリイにより有力なる王國を設け、以てオットマン人の來襲を防禦せんとし、サヴォイ侯にロムバアダイを、ヴェニスにシシリイを與へ、イタリイ半島を一國となして法王を首領となし、ゼノア、フロレンス及び附近の貴族領を併せて共和政體を作り、ネザアランドにもまたしかしてスウヰス同盟をタイロルの地に及ぼし、セルマンをして一撰舉帝國となさんことを希望せり。果して然らば、當時エウロッパのフランス、スペイン、イギリス、スウヰイデン、デムマルク、及びロムバアダイの六世襲王國、ポオラント、ハンガリイ、ホミア、セルマン帝國及び法王領土の五撰舉國、ヴェニス、ゼノア及びフロレンス、スウヰス、及びネザアランド等四共和國を包括して宛然一大共和國組成せられ、各國各州

の代表者相會して不正行爲及び戰亂を防阻することゝなるべしと望めりしなり。然るに國の治世は恒に權利を以て執行し得べきに、今は武力の強弱によりて國家の興敗を招くに至れるなり。さはれ計畫は國家獨立に關し賞嘆すべき結果を生ぜり、ヘンリー四世はこれにより佛國に多大の利益を獲取せんことは寧ろ豫想外なりき。彼會て人に向つて曰く、スペイン語使用國はスペインに屬し、セルマン語使用國はセルマンに屬す、フランス語を用ゆる國民また悉く吾の有する所なりと、されば四世はサヴォイ侯にロムバアダイを與へてサヴォイの地を去らしめ、ロウレンの女主と佛國皇太子との婚儀を約して之れを取り、ベルジウム及びフランチ・コムテは當然スペインの有にあらざるなりと思惟したり。

四世が總ての事業を成就せんことを冀望せざりしは疑を容れざる所なれども、其の一部を遂行せんがため、イギリスと同盟を結びて勢援となし、女王エリザベスの死に至るまで佛國と好意を永續し、サヴォイ侯に一万五千の兵を遣はし、總督レスヂキエルを將としてダウファイネに屯せしめ、報酬としてロムバアダイ、當時スペイン領土に王國を組成せしむるの外何物をも要求せざりき。ネザアランドのプロテ

スタントを扶助してスペイン人に備へしめ、エヴァンヂリカル同盟を組成したるセルマン・プロテスタント主領の一人ヘッセのランドグレイエツ家のマウリスまた王に來りて合従したり。王は他にインクイジション(異教徒糾問所)の厄に呻吟せるスペインのムウア人に心を傾け居たりき。當時恰もクレヴス及びジュリア侯死して後承者なかりしかば、プロテスタント及び舊教徒は互に富有の承繼者たらんとして争端を啓けり、兩徒は裁定の口實により干涉を始めたりしが、宗教上の嫌悪は愈、度を高め、遂に戦亂避くべからざるの光景となれり。大軍の準備已に調ひ四萬の軍勢は優勢の砲隊を率ゐ、シャンペインの境邊に向つて進軍し、衆皆四世の來援を待ち居たりしが、一千六百十年五月十四日狂信者ラヴェイラクのために暗殺せられたりき。

ヘンリイ四世はフランシス一世、ヘンリイ二世及びチャアルス九世の如く技藝の趣味乏しかりしと雖も、治世の間如何に光輝熾々たる事業を擧げしかは前述せる所の如し。チュウレンソオに二大堂宇を建設し、ルウブルの大廊閣をシャトウに延長せんことを冀圖し、竣功を告げずして死せしと雖も、また大功業たること疑なし。

王の信頼せる建築家アンドロエト・デュセルシオは獨創の技能を有したる天才なりき。ヘンリイ三世の起工したるポント・ニユウフを完成し、フランシス一世の礎を築きたる市廳當今のヴァレ旅館の前關を竣功したるも彼なり。一千六百四年ブレエス・ロヤアルの土木を起したり、建築は古代イタリイの遺風にして、煉瓦、石材及び瓦の材料を混用したるを見る。文藝復興時代の技術は當時已に衰頽せしも、將に文學の新世纪を啓かんとしつゝあり。即ちヘンリイ四世登位後三年にして死したる文學者モンテインあり、詩歌に一新體を創意したるマルヘルブあり、ユルネイユ、ラシイン及びポアリウ等の文學者争ふて彼の文體を襲用したりき。

第五編 ルイ十三、四世治下のフランス

(一千六百十五年)

第一章 ルイ十三世とリシエリュウ (一千六百十年)

ルイ十三世の幼時及び攝政メリイ・デ・メデイシ(一千六百十年) 英

の王權大打撃を蒙れるに際し、フランスには英傑リシエリュウ現れて國勢大に伸したり(一千六百二十四年)。ヘンリイ四世の子ルイ十三世齡漸く九歳なりしかば、府は王未丁年の間國政の補助者を要したり、前例によれば王母攝政たるべく、ルイ九世はカスチイルのブランチ、チャアルス九世はカゼリン・デ・メディン攝政たりき。メリイ・デ・メデイシは從來勢援なく、位置殆んど一外國人の状態にありしが、是に於て自ら奮つて國の顯要に立んとてパリ國會に現はれたり。前王四世五月十四日に死し、翌日の國會はメリイ・デ・メデイシに交渉して攝政たらしめたり、是れ蓋しエペルノン侯の援助與りて大に力ありしなり(一千六百十年)。ヘンリイ四世の王妃は意思薄弱極めて狭量の女なるを以て、大王の遺業を襲くの力なく、加ふるにゼルマンのプロ

テスタントは前に四世より佛軍の援助を享け、ジュリアア征伐の舉熟し居たるに、不幸にして四世の崩後王妃に保助の勇なれば、止むを得ず前王の計畫を抛棄し、また國家の柱石たるサリイを斥けて領邑に隱退せしめ、専らフロレンス人コンシニイを寵遇して、アンクル侯に封じ、後陸軍元帥とせり。コンシニイ數年にして八百萬フランの富を致したりといふ。

ヘンリイ四世は精力人に勝れ、殊に巧妙なる權謀により能く貴族を制御して王權に服従せしめ、凡ての人を遇するにも愛憎偏頗なく、常に貴族等の上に立つも黨派に牽制せられず、圓滿に彼等を壓伏したりき。然れども四世の死後に至り、貴族等は漸く頭を上げて鬱勃したる多年の感情を一時に迸發し、自己の利益の伸張を試みんとせり。プロテスタントはサリイの貶黜以來王朝に怨を含み、皆曰く、我等は能く信仰及び精神の自由を有せり、安んぞ朝廷二三黨派のために家庭を危ふするを欲せんやと。而して彼等は一時貴族の頭領コンデ、ヴェンドオム二家、ロングヴル、メエンネ及びブイロン侯等に信賴して朝廷に反抗し、また布告を發して人民の疲弊を救濟せんことを要求せしめたり。されど彼等の運動は確乎たる目的なく

主義なく、却つて弱點の多きこと當時の政府と毫も異なる所なかりき。コンシニイは陰謀の精神は陰に利慾の希望を抱懐しつゝ、陽に名を國民救済に藉るものなることを看破したれば、巨額の財を投じて略すに利を以てしたり。セント・メネハウルド條約によりて反抗者に金を與へ、或は封爵を授けたり、即ちコンデ侯は現金四十五萬フランを、メチンネ侯は結婚費として三十萬フランを、ロングヴェル侯は年金十萬フランを得たり。かゝる巨額の支出よりしてヘンソイ四世の蓄財は大に蠶食せられ、當時年金の總支拂額は六百萬フランに達せりといひ、一千六百十四年の政府諸官衙の經常費は支拂を受くること能はざりしといふ。

貴族等は陰謀を秘し貪慾を晦まさんがため陽に公明を装ひ、大官會議の開會を要求したり。會議はセント・メネハウルト平和條約以來五ヶ月の後に至り開かる、(一千六百十四年五月廿七日)。第三級貴族等は自己の慾望に離れて専ら國家有用の議題を提出し、就中ロバアト・ミロンは雄辯にして、大に朝廷の大官及び上級貴族の專横を痛論したり。彼等は愛國の精神自ら一致し、特權を固持して會議に提出したる議案中、主要なるものを擧ぐれば、王及び王權はロオマ法王朝の宣布により始めて確立す

べきこと、政府の財政は一般に報告すべきこと、第一、第二級貴族の年金は全廢すべきこと、國民に課する租税は公平一様なること、貴族領土に小作税を課すること、法律は貴族平民を問はず同一の効力を以て支配すべきこと、商工業は自由行為に委し、政府干渉せざること、及び定期に大官會議を開設すること等なりとす。第一案は政府の峻拒する所となり、第二案拒絶の理由としての政府の主張は、歳出入は國家の神髓なり、神髓は當に皮膚下に蔽はるるものにして、他に示さるべきものにあらずとし、また貴族及び僧侶の意志行動に反對したる案は悉く拒否したり。ロバアト・ミロンは國民窮乏の圖を王に示して救済方法を献策し、王若し心を救民に留むるにあらざれば、國民は失望の餘り正業を抛棄し、全民擧つて兵となり、葡萄栽培者も起つて銃を手にするに至り、鐵站は變じて鐵槌となり、王の領土は化して野盜草賊の巢となるべしと極言したり、然るも効なかりき。貴族等は暴慢を極め憎惡の念愈々増加したり。朝廷は議員の軋轢によりて、何等の決議をもなさざるを好機とし、故意に會議を遷延して第三級議員を疲勞せしめたる後、朝廷に演劇の催ありとの口實を設けて議會を閉場したり。(一千六百十四年三月廿四日)。三級議員等は自己の大任

を知らざるにあらざるも、質朴正純の徒多くして、權謀詐略の何物たるを悟らず、不法の閉會に對して何等の抗議をも提出せざりき。大官會議は爾後一千七百八十九年に至るまで遂に開設を見ず。

コンデ公は初度の陰謀によりて利し、一千六百十六年再度の反抗によりて再び利益を獲たり。ルツダン條約により百五十萬フランを收めしが、黨明の利潤に互に等差ありき。彼は富貴權勢一時に加はり、政府阿諛の裡に立ちて、恰も佛王の觀ありき。コンシニイは政府より逐はれて窮境に陥り、ルウソンの僧正リシエリッの忠告により、コンデ公の罪狀を擧げてバステイル朝に彈劾したれども、貴族等は此の擧に反抗したり、コンシニイ之れを壓倒せんとしたりしが、王は却て反抗者に加担し、母公の寵臣コンシニイに對して己が寵臣アルベルト・デライネを首領となせり。デライネは收税吏の子にして當時三十八歳なり。彼は捕鳥に巧みなりしかば幼王の愛を蒙り、深く信任を獲たり。彼王に告げて曰く、王年十五、國政を視るの齡に達せり、然るに猶幼兒として輔佐あるは屈辱なりと、王は妖言に迷はされ、近衛の隊長ヰトリイを呼び、アングル侯コンシニイの拿捕を命じ、彼若し反抗せ

る場合には殺すも厭はずといへり。ヰトリイ速かに拿捕に向ふ、コンシニイ劍を取りて反抗したるを以て、遂に銃殺したり。妻レオノラ・ガリガイもまた魔術者なりとの罪に問はれ、一千六百十七年火刑に處せられたり。

ルイ十三世はコンシニイの死によりて輔佐者の干涉を脱し、純然たる王なりと思惟せしに、デライネ假面を脱し、直ちにコンシニイの位置を奪ひ、王權を抑制するの行爲を始めたり。メリイ・デメシは貴族等との争を止めたるのみならず、彼等と交情を結び、其の援助によりてデライネを覆さんことを圖り、遂に一千六百十九年アングル政府を掌握するの幸機を得たり。翌年デライネに對する計畫は効果なかりしと雖も、リシエリッは前條約を確定するに至りたり(一千六百一十六年)。

プロテスタントはデウブレシス・モルネエの愛國的教訓及びサリイの深慮によりて陰謀に加担せざりき。此等有力なる頭領の間にロウハン侯といへる精力強健にして能辯なる一青年現はれ、勢力の競争起りたり。ヒュッキノット黨はビイルンに再興したる舊教及びビイルン改教徒の所領たる寺領財産の回附を強ゆる命令を受けて、大に激昂の度を昂めたり。是に於て軟柔なるサリイ及びモルネエの説

は衆徒の歡ぶ所とならず、ラロチイルに集會し、一同武裝して反せり。彼等はアウニスの招地に一市を設置せんと欲し、ラロチイルの地を相す、アムステルダム之れなり。當時彼等は八百六の教院を有し、十六州を保ちしが、ブイロン侯を斥けてロウハン之れが全權を握れり。

デライネは當時陸軍總督の要位にあり、モンタウバンを包圍攻撃したれども謀破れ、不幸にも一千六百二十一年惡症の熱病に罹りて死せり。翌年王はサウバイスをレ島より逐ひ、セントフォイを畧取したり。プロテスタント和を乞ひ、モントベリアアの條約を締結し、ナントの布告を確定し、ラロチイル及びモンタウバンを安全市となしたり、然れども、國王の允許なくしては政治的集會を禁じぬ(一千六百二十二年)。

○リシエリュウの榮達。メライ・デメ・デイシ已に權勢を回復し、一千六百三十二年リシエリュウのためにカアディナルの僧冠を乞ひ、國の執政を一任したり。彼内閣に列するを得て、あらゆる黨派及び私交の關係を絶ち、意志の及ぶ限り何等の障害を認めず、斷乎として所信を貫かざるはなかりき。權力に涸渴したるリシエリュウは大事業を遂げんがため直ちに王を壓して大權を掌握せり。ルイ十三世は國家政

策の何物たるを理會するの才を有し、善良を愛するの徳性なきにあらざるも、執行力に缺くる所あり、専ら政治をリシエリュウに委ね、朝臣の憎惡を意とせず、十八年間深く彼を信任したり。

リシエリュウの計畫は簡易にしてしかも宏大なりき。内に向つては大貴族の權力を剝奪せんとして、王の制定したる法律を勵行せんとし、プロテスタントの勢力に打撃を加へて、單に宗教的にして毫も政治的狀態を許さざらんとし、又外國に對してはアウストリア家の權勢を破棄せんとするにありき、之れ有名なる三連政略にして、著名なる彼の執政中一も矛盾する所なかりきといふ。

リシエリュウ執政の初に當りては急速事に従ひ、一時に全計畫を執行せんとし、スペイン人及びプロテスタントを攻撃したりき。其の頃スペイン領のミラン及びベルマンにあるアウストリア家の領邑タイロルの中間に位せるヴァルテリナの樞要地あり、住民は舊教義を崇拜せるも、グリッソンのプロテスタント共和國に屬せり。是より先マドリッド朝は異教に對して此の住民を保護すと稱し、邊境に城寨を築きて、住民を煽動せしかば、反亂の狀態となり居たりき。グリッソン之れに反抗し、大に

擾騒したるを以て、法王撰ばれて仲裁者となれり。法王逡巡久しく決せず、遂にスペインのため利益の裁斷を與へんとせしが、會リシエリウ職に就き、直にロオマ駐在の佛國大使に書を派して、佛王の宰相更替あり、新宰相は政治の方針を變じ、ヴァルテリナに軍隊を派遣すべし、法王の裁斷は無用なり、スペイン人は容易に壓倒し得べしと達せり。直にリシエリウはコオヴレス侯を將として兵八千を率ゐしめ、撃つてヴァルテリナを取り、グリッソンに回復せしめたり(二十六年)。

リシエリウは、チャアルス一世と佛のヘンリエッタとの婚儀によりてプロテスタントに對する英國の援助は絶縁したりと思ひ、激烈なる攻撃を與へ、ラロチイルの艦隊を破摧したりしが、時に國王及び宰相を廢せんとする陰謀起りしにより、リシエリウは成功の半に歸國して鎮壓するの已むを得ざるに至れり。佛王の豫備繼承者ガストンは廷臣四五の心を得たりしを以て、ムルデモントペンシアの婚儀を拒絶したり、そはリシエリウの仇敵たるべき外國と強勢なる同盟を作りて、リシエリウに反抗せんと欲したればなり。是に於てリシエリウはオルナモ元帥を捕へて獄に下し、又貴族等に懲誡を加へたれば、朝廷大に激動せしも、彼に對しては策の

施すべきやうもなかりき。此の機に乗し彼はヒウキノットと和を講じ、スペインとモンソンの條約を締結して、陰謀者と氣脈を通じ且つ補助するの手段なからしめんとしたり(二十六年)。此の政略後、シアライの捕縛事件起れり。裁判官は彼に有罪を宣告して(二十六年)斬に處せられたり。如上の行爲によりて貴族等の恐慌甚しくリシエリウに對する反抗は自家滅亡の基なるべきことを覺知するに至れり。次で第二の捕縛事件起れり、當時佛國最上の貴族パウザル・モントモレンシイ及びピウザロン侯は決闘に關する法律違反者の罪に問はれ、斷頭臺上の露となれり。リシエリウ會て王に勸告して曰く「下層人民に懲罰を加ふるは不當なり、さらばとて貴族は王の藩屏たるべきもの、こは能く遇するの要あるべし、然りと雖も、そを放任するときは恐るべき結果を生ずるの基なり、よろしく之れに鞭撻を加へて紀律を正さざるべからず」と。リシエリウの主張する所公平にして、階級の如何に拘はらず罪あるものは一も容赦することなき、宰相として最も善良の措置たること疑なき所なれども、弱點多き人間の常性に漏れず、彼も亦ルイ十一世の如く裁判權を濫用して私忿を露し、政府の特權を弄びて、不正の處刑に私敵の頭を刎ねたる行爲あ

りしはあたらしきことなり。

如上の措置によりて、リシエリユは自由に所思を斷行し、以つて新教徒に對して恐るべき攻撃を加へ、遂に根絶せんことに力を竭したるを知るべし。彼は陸海軍に改善を加へ、財政を整理し、レスディギアレス死後コンスタブルの官を廢し、モントモレンシイ家督の海軍提督の官職を取りて百萬フランを代償し、又五ヶ年間地租滞納の農民に對して強制執行を施し、同時にオランダ人と同盟し、船舶を利用してゼノアを攻め、又ラ・ロチイル征伐にも之れを使用せりき。

英王チャアルス一世はラ・ロシエルを援けんが爲め、寵臣バッキンハムを艦隊に將として赴き救はしめたり。英軍レ島に上陸したれども、トイラス及びシオムベルグに敗戦し、撃退せられたり。佛軍は陸路よりラ・ロシエルを圍みて海上よりの援路を絶たしめ、また英軍の來援を防碍せんがため、無數の障堤を築きて砲臺を備へたり。かく鞏固なる戰策と熱心とは將帥貴族等が害心を施すの餘地なからしめき。

市の防戦は花々しかりき、英國艦隊は再度防堤前に進入し來りしも、遂に破壊す

ること能はずして佛軍に奪はれたり(一八六六年)。人口三万を有する市の生存者もた僅に五千に減じたり。

當時ロウハン侯はラングドックに於て小勢を以て大軍に抗し、漸く殘滅を支へ居たりしが、此の時に至りて兵を解かざるを得ざるに至れり。リシエリユはアライスの平和條約を結びて新教徒の保安を保證し、ナント布告によりて彼等に宗教の自由を允したるも、新徒の城砦は武裝を解かしめ、國內に政治的結社を組成することを廢したり(一六九九年)。

佛國の政治的統一に再興し、宗教戦争は全く其の痕を拭へり。リシエリユの敵は彼を斃さざりしのみか、却て益、彼に屈從するの結果となり、勢力愈一身に集れり。メリイ・デ・メディシは彼をかくまで偉大の政治家ならんとは期せざりしに、今や權勢の日に彼に移るを見て私に恐怖を抱き、病王に請うて流罪の命令を強請せんとする危機に際して、リシエリユ之れを覺知し、王に拜謁し、談數刻にして却て玉に強壓を加へたり。メリイ・デ・メディシは廷臣悉く己に歸服せりと信じたりしが、事實は反つて人心離乖せるを覺知せざりしは愚なりといふべし、世に此の日を「瞞着

の日といふ(三千年六百)。攝政の罪に坐して二人の死を致したるものあり、一は王の印璽管理官にして、他は佛國元帥なり、何れもマリラック家の兄弟なりしが、王母の彈劾する所となり、元帥は受賄の檢擧を蒙り、ルウエルにあるリシエリュウの邸宅に於て糺問の結果、有罪の宣告を受けて死刑に處せられ、弟は幽囚の身となりて終に病歿したり。メリイ・デ・メデシは捕はれてロム・ピイエン城に幽閉せられたりしが、居ること六月、逃れてブラッセルに走り、餘命を茲に送り(三千年六百)。

ガストンは事變前已に朝廷を去り、ロウレン侯に身を委ね、侯の妹と結婚せしが、身の危を知り、己むを得ず、遁れてベルヂアムに避難し、ラングドックの知事モントモレンシイ侯によりて黨與數千人を集むることを得たれども、進軍の援助なく、諸邑また城門を開きて迎ふるなきにより、ラングドックに於てモントモレンシイの軍と連絡し、小軍を率ゐて動かさず、機のを待ちき。然るに佛軍は進み來れり、モントモレンシイ激して之れを迎撃し、頑固の抵抗を試みしも、終に佛軍に生擒せられ、ガストン救助の策を講ぜざりしかば、空しく斷頭臺の露と消え、モントモレンシイ家茲に至りて斷滅しぬ(三千年六百)。ロウレン侯は變に連累したれば、軍費を支辨して

僅に危難より免れぬ。一千六百三十三年ルイ十三世は兵をロウレンの侯爵領地に駐屯して、全世紀末までフランスの有たらしめたり。

十三世の措置は貴族間に恐怖心を惹起せしめ、隨て陰謀の勃發を防ぐこと能はざりき。ガストンは元來怯懦にして、恃みなき人なれども、猶共謀者を語らひて、私に反逆の擧に出んとせり、幸に寵臣バイラウレンなる者、バスチイル朝に内應せしにより、謀破れて事無きを得たり。次て一千六百三十八年王子誕生あり、これ後のルイ四世なり、之れによりてガストンの豫備儲位(フランス王の猶子)の權及び他の官位をも褫奪せられぬ。エペルノン侯及び他の大貴族の驕慢に加へたる打撃と、兵士の掠奪を制御し得ざりし罪とによりて、ウオレッタ侯の死刑は軍隊に服従てふ義務心を喚起して、一新生面を啓きたり、然れどもコンデ家のソイソン伯は猶リシエリュウを仆さんことに力を用ゐしかど、いかで大勢の潮流に反抗し得べき、マルフェエ勇者として驍名を轟したる伯も、終に戦場の露と消へぬ(四千年六百)。

リシエリュウの權勢王者を凌ぐものありと雖も、終始爭擾絶えず、殆んど寧日なし。シンク・マルスといふ一青年あり、リシエリュウの寵により王の侍臣たりしが、私にリシ

リッウを覆滅せんとの陰謀を企て、王もまた加盟したり。然るにマルスがスペインの實權者オリヴァレス伯と同盟締結せしこと端なく破滅の基となり、謀計漏洩して斬せられ、續いて一千六百四十二年マルスの友人デザウ及び一味のブイロン侯はセダン、ラウコルトの二城を以て降伏するに至れり。

一千六百二十六年リッウは邊境にありて用に堪へざる封建時代の城砦を取壊ち、またコンスタブル及び海軍提督の如き軍事樞要の官職を廢して、勢力の他に偏することを豫防せしのみならず、諸方面の實權を一身に集中せんが爲め、國會を壓伏して國家的の事件に關しては盲從せしめ、大官會議の開會をも廢絶し、諸事悉くリッウの意の如くならざるものなきに至りたり。唯不幸なるは國民なり、一難を免かるを得ば他難續いて至り、片時の平寧なきに反して、貴族の放肆は益増長し、王は總て法律外の專政をなして憚らず、市民の財産、自由、生命に至るまで王の意の向ふ所に一任せられたり。リッウの獨斷にて財産の沒收、罪人の禁錮は勿論、國事犯人の懲罰執行すら國會へは單に一片の通知をなすに過ぎざりき。カアデナル、リッウの新教徒に對する打撃は、充分に其の効を奏したりしと

雖も、未だ以て政治的團體を撲滅すること能はざりしかば、種々必要なる改革を企てて之れが全滅に畫策至らざる所なかりき。彼が財政管理上の政策に至りては、普通執政者が豫算書を手にして參酌考究するが如き寛容なるものにはあらず、軍資急を告ぐればあれば増税を企て、或は高利の負債を起し、或は新官職を設くる等、出費の額甚しきに到り、彼の死後は八千万フラン以上の歳入僅に三千三百五十万フランに減少し、歳出との不足額五千六百万フランに達し、而して三年後の收入まで支出し盡して剩す所なかりしと云ふ。明敏なる彼は國家の財政漸く亂れしと知るや、救濟策として一千六百三十五年 Intendant (財政管理者) の新職を設け、官吏は出所不明の輩にして、何れもリッウの任命したるものなり、其の權限は裁判、警察の二權及び財政にあり。從來國家の財政は國會の容喙を許さず、又知事の特權は管轄區域の行政に限られたれども、此の職にある者は多く大貴族にして、自己の支配近縣は全く獨立し、官職は子孫傳承すべきものと思惟したり。當時の主權者は大概勢力微弱にして、貴族の專横を制抑すること能はざるもの多ければ、知事の職は殆んど世襲となり居たりしなり。リッウ相となりてよりかゝる專横を

許さず、財政管理者の補佐を得、また王の名義を以て、到る所嚴密なる檢察を行はざる所なく、漸次州縣の實權を手中に收め、ルイ十四世の時に至りては、知事の權利は僅に兵馬の權にして、政治上の權利としては中央政府の代辨たるに過ぎざらしめき。是王國及び國家統一の基礎を鞏固にするの實行といふべし。チャアルス二世の時フランスに起りし常備軍の編成は、新に再興せんとしたる封建組織に非常の打撃を與へたること他に其の比を見ざりし所なり。

ラ・ロシユルの包圍は軍事上諸種の結果を生せしが中にも、海軍組織を創むるに至りしは其の一なり。リシエリュウ風地に地相を考察し、ブレスト、ハヴル及びプロウジは海軍兵器所設置に適合せりと思へり、プロウジのみは認定を誤りたるも、ブレストの如きは最も恰當の地たること疑を容れず、彼以前にありてはフランスに海軍として見るべき設置なかりしも、彼の時に至りては無數の船舶武装せざるなく、三十年戦争に及びて、フランス艦隊は優勢の域に達し、外洋及び地中海の制海權を有したりき。

スペイン人はネザルランド、フランチ・コムテ、及びルウシロンを有してフランス

の三境を壓塞し、ネエブルス及びミランを通してイタリアを保てり。リシエリュウは先づ邊境の敵を掃盡せんと志し、入つて相となるの日直ちにスペイン人をヴァルテリナより驅逐せり。數年後に至りマンチユア及びモントフェラットの周邊なるネヴレス侯のためにイタリアを得んとして干涉を始め、スペイン及びサヴォイ侯は此の要求に反論したり。是に於てリシエリュウは三万六千の兵を率ゐてアルプスを越へ、ルイ十三世は別にスザの山路より進軍したり。サヴォイ侯は抵抗の不利なるを知り、急ぎスザの條約を締結せり、スザはスペインのミランに通ずる要衝に當れり。然るに一年を経過せざるにリシエリュウは四万人を率ゐて再びアルプスを越へたり、そはゼルマンにて戰捷を獲たる帝國黨のグリッソンに侵入し、またスペイン人のモントフェラットに迫るありて、サヴォイ侯四面の侵畧に對し樽俎折衝これ日も足らざるの好機に際會したればなり、サヴォイ果して支へられず、一千六百二十九年三月首府ビグネロール陥りぬ。マザリンはセラッコ平和を商議し、マンチユア侯領を再興し、勇者アマデウスをしてビグネロールを以て降伏するの已むなきに到らしめたり、此の市はアルプス通路の要所に當れり(一千六百三十一年四月)。

全年リシェリュウはアウストリア二分家の勢力をイタリアに分離し、半島はフランスに對して何等の堡塞なきに乗じ、直ちに分離したる敵に向つて激しき攻撃を加へたり。此争亂を三十年戦争となす、こは後章詳述する所あるべし、戰の發端は一千六百三十五年に始まれるなり。

一千六百四十二年十二月一日リシェリュウは五十七歳にして死せり、最期の日フランスの領土にロウレン、アルサス、アルトイス、及びルウシロンを併せ、カタロニア及びポルトガルはスペインに對して反抗し、スウイデン及びフランスの勢力は殆んどヅキンナの城門に迫らんとするの形勢に進み居たりき。

リシェリュウは相たるの日、ルイ十三世との約束を履行したりしのみならず、外列國に伍して名實共に王者たるの權勢を王に還したりき。當時の人民はスペインの權勢偉大なるを見て將に世界の王たるべしと思惟せざるものなかりしに、事實は之れに反し、國庫缺乏し、不規律の兵を有したりしフランスが國內統一、土地豊饒、海陸の兵備充實の光景を呈して、急速の進歩をなすに至りしは、驚嘆すべきの急變なりしなり、實にリシェリュウ時代同國の偉業は世界に於ける他列國の再び及ぶ所

にあらざりしといふも決して溢言にあらざるのみか、著々として名に伴ふの結果を實現するに至れり。

リシェリュウは權勢のみを愛せず、又能く技術文學の趣味を有したり、フランスに勃興したる諸種の學校は當時に生まれり。彼は一千六百三十五年フランス中學を建設し、言語學を修め、人心に趣味を喚發し、粗野の風を脱して文雅の國民たらしめんとし、又ソルボン、國立圖書館、及び印刷所の規模を擴張し、プレシス高等學校を創立し、植物園を創置したり、現今の博物館これなり。彼の文士を遇するや、款待禮遇至らざるなく、學者詩人に年金を附與せり、コルネイユの如き其の一人なり。又書工ヅツエを獎勵し、ロオマよりプウシンを招聘して、美術の發達に汲々力を用ひしかば、終にフランス、文藝の一大新生面を啓き、一千六百三十五年に『Le Cid』及び三十七年に『Discourse on Method』を著したり。彼自身もまた有數の文士なり、才學コルネイユに及ばずと雖も、神學上の著は當時人の賞嘆する所となり、政治上の著『Memoirs』今猶尊重せらる。

ルイ十三世はリシェリュウの政策を改めず、彼の友人にして能くこれを蹈襲し得

るの伎倆を有せるジニウルク・マザリンを擧げて相とせり。然れども王もまたリシエリウの死後六ヶ月にして歿す時に一千六百四十三年五月十四日なり。

第二章 三十年戦争

三十年戦争に於けるゼルマン及び北方諸州。十六世紀頃まではロシア及びポオランダの勃興衰頹を見るとなきにあらざりしかど、歐洲全部に影響を與ふるには至らず、所詮政治的勢力は猶未だ北部エウロッパ諸州に及ばざりしなり。ロシアの主權はモスコウ諸侯の掌中にありて漸次勢力を増進せるに反し、ポオランダは一千五百七十二年ジャゲロン人の滅亡以來一種の選舉王國を形成せしと雖も、貴族政體にして争亂絶ゆるとなかりき。一千五百七十三年アンジオウ侯を王王は後フランスのヘンリイ三世となり不幸の生涯に終りたる人(に選舉せしも、王のワルサウ逃亡以來トランシルヴァニア公ステファン、バトリイ選ばれて王となれり(七十五年))。一千五百八十七年スウヰイデン王ジョン三世の子シキスマンド王位を襲へり、彼はチャアルス五世に奪はれたる父の王冠を回復せんとしてアウ

ストリアと同盟を結べり、遂に一千五百九十八年ポオランダ及びスウヰイデンの交戦となり、戦亂延て一千六百二十九年に至り、リシエリウの干渉によりて歇みぬ。リヴォニア及びプロシアは戦争の重要なる舞臺となりしが、ロシアも亦之れに加入したり。ポオランダの貴族等は久しき交戦中常に武勇を現はし、大に軍隊の名譽を博したるに反し、ロシアは一千五百九十八年リウリック統の廢絶及び一千六百十三年ロマノフ登位に至る間内訌絶ゆるとなく、國內の秩序甚しく亂れ、祖先イブン四世の經營したる諸種の利益を失ふに至れり。一千六百十七年ストルボフ平和によりスウヰイデンにカレリア及びイングリアの地を與へたり、即ちロシアはバルチック海に有せる諸種の權利を拋棄したるなり。十八年デズリナ條約によりポオランドにスモレンスク及びシムルニグヱグを回付し、一時荒茫不毛の地に閉息するに至りしかど、既に已に漸く發芽を試みんとするの形勢を存したりき。されば三十年戦争のゼルマンに破裂せんとするや、シキスマンドはポオランダの王權を要求し、能く之れを維持せしかど、一千六百十一年以來スウヰイデンの王冠は彼の從弟にしてヴァサ家創立者の孫ガスタヴァス・ドルフアスの有となりて、未だ回復するを

得ざりき。

ガスタヴ・ウアサは當時已にスウェーデンに王權を確立し、ルウサア主義の改教を制定したりき。ウアサは其の子ジョン三世、或はスペイン王フィリップ二世の陰謀及びポオランド王シギスマンドの攻撃ありしも、能く國家を維持し、熱心に寛容主義の精神を普及し、固く新教を保障したりき。スウェーデン及びポオランド戦争の他の結果は、始めポオランドはアウストリアの援助を得たりしに、スウェーデンは帝國軍のバルチック海岸に到達するや、ハプスブルグ家に對し殊勝にも武装して立てり、即ち國民は愛國の精神に富み、ルウサア主義また能く志氣を鼓吹し、加ふるにガスタヴ・ウアの才幹を以てしたればなり、幾何もなくスウェーデンがゼルマン地方に光輝赫々たる偉業を演ずるに至りしは、蓋し偶然にあらざるなり。

デムマルクはスウェーデンの如き利益の位置に到達せざりき。デムマルク王チャアルス四世は、國君の器なく、政府はあれども貴族より成れる寡頭政治に隸屬せるを以て、勢振はず、加ふるに海軍力は稍恃む所なきにあらざるも、陸軍は封建的備兵にして、貴族等の有となり、王の如何ともなす所なきにあらざれば、勢微弱にして

到底他國との交戦に耐ゆること能はず。領土はノルウェーよりスウェーデン南方の諸州を占むるも、貧弱にして國庫また缺乏の状態にありき(一千八百一十八年)。

前世紀の央チャアルス五世は志を失ひて帝位を退き、始めてアウグスブルグ平和を結び、ゼルマンに於ける宗教戦争の終局を告げたり(一千五百五十五年)。然るに此平和は休戦の外何等の効果をも收めず、是他なし、平和條約中の僧領土保留の箇條に關する大問題の未だ解決を告げざりしに因由せるなり。幸に當時ゼルマンの進歩遅鈍にして、兵馬の間に該問題を解決するの勇なかりしにより、能く休戦的平和の六十三年の久しきを保ち得たりしのみ。

やがて僧領土保留問題より新らしき戦亂の到底避くべからざる形勢となれり。蓋し此の條項は、當時の僧侶にして新に新教に改宗するものは、舊寺領を享くることを禁じたるにありき。これ寧ろ正當なり、然るに世襲不動産(僧侶の領邑を指す)の土地平分法は、痛く貴族の心を動かし、從來僧侶の富有を嫉視せる念を一時に勃發して、ルウサアに心を傾くるに至らしめたり、されど貴族等の精神は宗教上の争議よりも自家權勢の消長を慮るにありしなり。ルウサア以前に於けるロオマ教

の財源は實にゼルマン全土の三分の一を占有し、權勢の偉大なること僧正の如きは優に君主を凌ぐものあり。ロオマ教院が禮拜用に貧民救濟の費として與へたる擴大の采地は、僧侶等が自腹を肥すの餌とならざるはなく、又法王以下の高僧等は驕侈放逸金錢を浪費し、昔日の使徒時代の清貧を覺らざるの愚を演ぜしこと幾何なるを知らざりき。

かゝる形勢なれば、北ゼルマンに於けるマクデブルグ及びブレメンの大僧正領土及びミンデン、ハルベルスタツズ、ザエルデン及びルベックの僧正領土には新教徒の侵入せざる所なかりしも、西南の地は猶未だロオマ教の勢力優大なるものありき。一千五百八十二年コロンの大僧正にして帝國七選舉侯のトラッチセスのゲブハルト及びウエストフリア侯の如き者ロオマ教を脱したれば、法王はスペイン軍の後援により、コロン領に新に大僧正を任じたり。ゲブハルト新教徒の援助を有せしも、カルピン教徒に意を通ずるに至りてよりルウサア黨の棄つる所となり、一千五百八十四年遂に領土を失へり。

かく一度改教徒破れ、一千五百八十九年再びアイクスラ・チアペルに破れて教長

は逐はれたり。一千五百九十二年ストラスブルグに於て教長等は一人を撰びて僧正領土の主たらしめんとせしも効なく、一千六百〇七年ドナウウエルスに敗績して新教徒驅逐せられ、自由の市邑を離れてバヴアリア侯爵地の一市に遁逃するの已むなきに至りぬ。

かくてロオマ法朝のゼルマンに企てたる舊教回復の計畫は成就するに至れり。新教徒は數多の打撃を蒙り、今や自ら軍隊を編成して自衛の策を講ぜんことに思及し、一千六百〇八年エヴァンジリカル同盟を結びたり。ロオマ教徒も居ながら敵の對抗準備を見て武装せざるを得ず、翌年相議して舊教同盟を組成し、バヴアリア侯マキシミアン之れが主領となれり。

マキシミアンは夙に新教に對して暴烈なる憎惡嫌忌の念を有せり、彼齡未だ六歳の頃、ヘンリイ三世のジャキス・クレメントの弑に遇ふや、母に書を送りて佛王暗殺の報を聞き、欣喜に堪へず、此の報導の確否を知んこと一日千秋の思ありといへるによりても、彼の胸中を洞察するに餘あるべし。同盟員中マキシミアンに亞ぎて有力なるをステリアの大侯フェルデナンドとす、後皇帝となれり。彼人に

向つて云へるやう、己の領土内に異教徒を寛容せんよりは巧兒となりて食を乞ふに若かじと。彼は新教徒の教長を殺し追放し、又は教會に砲火を加へて之れを灰燼となし、一萬部の聖書を烏有に歸せしめ、死刑場にはカフチン寺院の石垣を運搬したりといふ。かゝる狂暴の人々に對抗せる新教徒の形勢を見るに、ルウサア派は教義上よりカルギン派と軋轢し、ルウサア派中亦統一を缺く所ありて勢力甚だ振はず、蓋し統一を完ふするに足るべき技倆の主領なかりしなり。管に勢力微弱なるのみならず、主要の黨員にして破廉耻の行爲をなすものすらあり、ニユウバルグ侯の如き、一千六百〇九年の頃、クレヴス及びジュリアーの富領土空位となり居るを見て、之れを得んと欲するの餘り、ロオマ教徒となりて援助を得んとせり。ルウサア派のブランデンバルグの選舉侯も同一の意志よりカルギン教徒となれり。前者はスペイン人を、後者はオランダ人を援助とせり。ヘンリイ四世其の渦中に入つて干涉を試みんとするや、暗殺の不幸に遭遇しき。

アウストリア國の形勢はゼルマン及び宗教改革の争亂によりて利する所なかりき。前章已に述ぶるが如く、アウストリア世襲領土にあらざるバヴァリアに於て

ロオマ教派は攻勢の態度を持し、其の援助を有せり。一千五百六十四年チャアルス五世の弟にして皇帝たるべきフェルディナンド一世の死後ゼルマン系の二族はエウロッパに於ける大業をスペイン系に委托したりき。オットマンの攻撃、ハンガリイ人及びポヘミア人の反抗は、終にフェルデナンド一世領土の分裂となり、勢力次第に衰退して遂に此の一門はチャアルス五世時代の形勢となれり。マキシミリアン二世(一千五百六十四年)は深慮にして豁達の人なり、オットマン人、トランシルヴァニア人に對して心を用ひ、ポオランド事件にも注意し、ヘンリイ三世逃亡後此地に選まれて王たらんことを冀ひたりしも、ゼルマンに關して心を勞する所少かりき。其の子ルドルフ三世(一千五百七十六年)は不肖にして治國の才なく、心身共に羸弱にして、迷信家なり、彼は鍊金者或は占星家などに擁せられて無爲の生涯を送りぬ、然れども占星教者中有名なるタイコブラへの如き者も加はり居たりといふ。彼の天體を觀測し、かのルドルフ表を畫せる間に、オットマン人の來襲を蒙りて敗績し、王冠を失はんとせり。弟マシアスといへる者、ルドルフは家門に危害を與ふるものなりとの口實によりて兵を擧げ、一千六百〇八年王に迫りてハンガリイ、アウストリ

ア及びモラヴィア并にボヘミア選舉王號を己に讓與せしめたり。

内訌は新教徒をして益々世襲領土に侵入の機運を進めしめたり。マシアスは新教徒に允すにアウストリアに於て自由崇拜を以てせしが、ボヘミア人の強勢なる奮起に拘束せられて、一千五百七十五年に制定せるボヘミア自認(Confession)の法律上成立を承認特許し、又新教徒に校舎を開き教院を建つるの權利を附與し、教徒より終身官を命じ、宗教保護の名によりて、特設權の執行を監督せしむることを委任したり、此の一事は王に對して最も耐へ難き措置なりしなるべし(一千六百一〇年十一月十一日)。

十一年マシアスは王に迫りてボヘミアの王位を讓らしめたり、ボヘミア王位はルドルフに對し帝國に於ける唯一の權利にして、彼の死後選舉侯等の爭點たりしものなり。

マシアスはルドルフの如き智者にもあらず、亦勢力もなかりき、されば彼のルドルフに對する計策を却て自ら蒙るの境遇となれり。大侯ステイリアのフェルデナンド儲位となりて補弼の任たり、是に至りて新教徒の享有したる宗教上の寛容は一時的の夢と消え、却て虐待を蒙るに至れり。彼等は官職を逐はれ、教院を奪はれた

り新教徒のアウストリアに跡を見ざるに至るや、直にフェルデナンドは公然ボヘミアに於ける宗教の自由を破毀すべき計策を發表したりき。

三十年戦争に於けるバラチン及びデムマルク(一千六百六十八年)。

一千六百十八年バプチスト派は禮拜用の教院を建立せんことを冀ひて果さざりき、そは新教保護者の主領サルン伯の性質狂暴貪婪にしてフェルデナンドの誑す所となり、ルドルフより受けたる特許狀を質入れせし爲め彼等の請願は侮辱を以て迎へられたるなり、是に依りて反亂起るに至れり。彼等はブレエグの市廳に退き、ボヘミアの舊慣に従ひ知事を拉して窓外に投じたり(五月二十六日、十八年)。

これ所謂卅年戦争の發端なり、戦亂の範圍はダニユプ河よりステルツ河に至り、ポオ河畔よりバルチック海岸に達し、諸邑を殘滅に歸し、野圃を荒廢し、人口を減少し、就中文雅の風致を没して野蠻の光景を露出するに至れり。抑も三十年戦争は種々の原因を有すれども、畢竟宗教上の問題に始まり、二宗派の諍争なりしかど、其の結果としてはアウストリア家の屈從及びフランスの擴大を致したりき。

ブレエグ事變後ボヘミア人は結合して防禦に力を注ぎ、エヴァンゼリン同盟主領

バラチン撰舉侯を擁して王とせり、バラチンはイギリス王の養子にしてオランダのスタニスオルダアの甥なり(一千九百)。フレデリック五世は遊樂に耽りて諸事を放擲せしに反し、十九年マシアスの死後皇帝となりたるフェルデナンド二世は明活の態度を持して宗教の爲には銳意力を用ひ、ポオランド王と和して自己の援となし、ボヘミアを援けざりしサクソンニイ撰舉侯と和親を結び、また法王よりは保護金を受け、ロオマ教同盟及びスペイン王より軍兵の供給をも受けたり。さればサルン伯の率うるボヘミア人及びベスレン、ガボルの率うるハンガリイ人のため、サクソナに包圍せられ、内にありてはアウストリアの諸大臣より降服を強ゐられ、内外憂患の間に立ちしも、あらゆる攻撃に對抗して同盟軍の來援に充分の時日を與へたり、是れ帝が堅忍不拔の然らしめし所なりとす。同盟軍の到着するや光景一變し、市民は悉く武装して立ち、自立の元氣回復したるに加へ、エヴァンゼリン同盟にはマンスフルト伯の軍敗れ、サルン伯已むを得ず兵を收めてボヘミアに退くに至れり、是に於てゲキンナは包圍を脱することを得たり。

此の時フランスのデライネは使者をガボルに遣して休戦を締結せしめたり、休

戰條約に當りライネはエヴァンゼリン同盟の諸侯を説きて撰舉侯バラチンを貶して大に帝の甘心を購ひ、彼は佛國外交に巧妙の手腕を振ひたり。

スペイン人のバラチン領に、サクソン人のルザシアに侵入せる間に、同盟軍はボヘミア人を撃てブレエグ附近のホワイト・マウンテンに之れを破れり(一千九百)。ボヘミア人哀を乞ふに至りて從來享有せる將權は褫奪せられ、加ふるに刑罰の慘狀を蒙れり、即ち頭領中二十七人は斷首せられ、二十九人は遁れて漸く死を免れ、貴族九百二十八人は財産を奪はれ、三萬八千の家族は國を放逐せられて、爾後二世紀間ボヘミアは猶ロオマ教回復の爲めに殘忍の虐待を蒙りぬ。

かくて不幸なるバラチン侯は國內に身を委する所なく(一千九百)、世襲領土をも防禦するの暇なく、遁れてオランダに走れり、彼の領邑はスピノラのスペイン人占領したりき。かゝる成功は再びゲキンナ及びマドリット兩朝の大望を惹起するに至りたり。チャアルス五世及びフィリップ二世の計畫は再び演ぜられて、オランダ及び新教勢力の衰滅を夢想することとなり、惹てセルマンの自由も直に破壊さるべきことを空想せられたり。

然れどもフレデリック五世の兵氣は懦弱に流れ、苟にも劔戟を弄するものあらば直に勇者として算へらるゝが如き状態に陥り、而してフェルディナンド軍のボヘミアになしたる暴戻は大に人心に反抗復讐の念を勃發せしめ、其の結果マンズフィールド伯の旗下に蝟集したる人民は優に一軍を編成して伯の指揮に服従するに至れり。劫掠を以て報酬とせる二萬の暴漢を率ゐて伯はバヴリアの將、テイリイの追撃を避け、ボヘミア及び上部バラチン領を逃れ、フランコニアの全部を横斷し、レン部バラチン領に至り、撰擧侯バラチンと會せり。一千六百二十二年マンズフィールドはミゲルセイムに於てスペイン人及びテイリイを撃破したり。スペイン人とテイリイは軍を合せしも、伯及びバアデン・ダルラクのバルグレエツと分離して兵力を割きしかば、ヘスのウムブヘンに敗績したりき。時會、パンスウィックのクリスチアンと呼べる猛者現はれて、教院を掠め、廟祠の神像を熔解して貨幣を鑄造し、以て軍資となし、セルマンの北方より兵士二萬を召集してマンズフィールドの軍に投ぜんとせり、テイリイの混成軍之れを知りて其の進軍を遮り、メイン河のホクストに於て撃破せり、是に至りてバラチン領再び敵の有となれり。マンズフィールドはシャンペ

インの境に血路を開きしも通過すると能はず、轉じて道をネザルランドに取り、此處にフランスウィックに會せり。フランスウィックはフリウラスにスペイン軍と激戦して重傷を蒙りながらも、軍鼓喇叭亂奏の裡に立ちて一腕を切斷したる勇者なりき。彼はオランダ人の來援を得てスペイン軍をしてベルグ・オブ・ツウムの包圍を解かしめたり。是に至りマンズフィールドはウエストフリアを掠略し、ウエストフリイランドに入りて兵備を嚴にせしかば、テイリイ之れを撃退せんとするも能はずして斷念せり。恁くて伯はフランスに至り、或はイギリスに航し、アウストリアに對する敵を探し、或は攻撃の手段を講究するに餘念なかりき。

然れどもラティスボン議會はフレデリック五世の侵畧地を領有することを承認しき。タニユブ河及びボヘミア山間の上部バラチン領、并に撰擧侯の特權を合せてバヴリアのマキシミアンに交付し、またスペイン軍はライン河にある下部バラチン領を占領せり(一千六百三十三年)。フランスウィックのクリスチアンは交戦を繼續したれどもマンスタア僧正領地にあるスタットロオエンに於て敗績し、オランダに退却したりき。

ゼルマン諸公の紛擾及びサキソニー、ブランデンボルグの撰擧侯等は旗色を伺ひ遲疑して動かざるより、宗教改革の運命は危害の境に瀕したり。是に於てや曩に撰擧侯バラチンを貶したる新教徒等は、侯の勢力の盛衰は直に自己の盛衰なりしことを漸く了解するに至れり。ブランデルボルグ撰擧侯はスウイデンと協商の局を結ばざるに、デムマルク王はゼルマン宗教改革援護の大任を獨りガスタヴ・ス・アドルフ・フアスに委ねざらんがため、自身帝國に侵入せり。オランダ、イギリスは艦隊及び軍糧の支給を約し、リシユウまた密かに彼に軍資を送れり。クリスチアン四世は下部サキソニー諸州の誘ふ所となり、一千六百二十五年ステエドよりエルベ河を渡り、第一戦の間エルベ及びウエサル兩河間の地を保ちしが、テイリイの攻撃は此處に及ばざりし、然るに翌年他の敵軍は彼の殿軍に起りたり。

ワアレンスタインなるボヘミアの一貴族あり、マンズフェルト編成の兵式に則りて一軍を組織し、皇帝の名義を以て兵五萬を得たり。フェルデナンドは此時まで單にロオマ教同盟軍のみを有するに過ぎず、テイリイはバヴリア侯名義の一司令官に過ぎず、兵戰の命令はマニッテ朝より發せられ、事件の處理はマキシミリアン及び

同盟の利益に屬し、アウストリア家の体戚また眼中になく、加之宗教上の利害より起れる戦争も今は政治上の性質を帯ぶるに至りしなり。始めフェルデナンドは單に異教徒に向つて争闘したれども、深意は宗教の名義によりて獲たる戦捷を利用して、曾てチャアルス五世の一時攫取したる帝國の大權を回復せんことを冀望したるなり。ワアレンスタインは二世の心裡を看破して願望成就の策略を献じた。さればテイリイの西方デンスを攻撃し、ブランズウィック侯爵地に於けるラッタアに於て敵軍の一部を破り居たる際、ワアレンスタインはデッサウに於てマンズフェルトを破り追撃してシレシアを通過し、終にハンガリイに退却せしめたり。マンズフェルトはトランシルヴァニア公ベスレン・ガボルの兵を率ゐて來り會すべしと期待せしに、却て冷遇を蒙り、疲勞と病苦に落膽してボスニアの村邑に落去して死せんとせり(一千六百〇〇年)。ワアレンスタインは轉じてデムマルク人を攻撃し、ワグリアのヒリゲン・ハアゲンに於てバアデン・ダルラクのマルグレエツを破り、殆んど全ホルスタインの地を占領せり、彼は又ストラルサンドの一部に攻撃を加へたり、しかもこは効果なかりき、此のハンス市にして陥落せんか、バルチックの制海權を獲得す

ることを得たりしなり。クリスチアンはルベックの平和を締結して同盟者を失ひしも、破滅を免るることを得たりしは蓋し幸福といふべし(一千六百)。

當時帝國軍の偉大なる勢力は空前なりき。ワアレンスタインはメクレンボルグ侯爵地を給與せられ、バルチック海軍提督に任じ、十萬の精兵を率ゐてゼルマンの戦に従事し、また領土償還の實行に力を注ぎつゝありき。一千六百二十九年三月六日フェルチナンドは布告を出して、アウグスボルグ平和以後寺領土の公用となり、或は新教の有となれるものを悉く復舊すべしと命じたり。此の布告たるやアウストリア家の秘計を發表したるものなれども、餘りに早きに失し、遂に戦亂の害毒久しきに亘りて防止する能はざるの因子となれり。布告は陽に宗教の名義を假りたれば、ロオマ教徒は始め喜悅に心酔せしが、帝が四僧正領土を皇子の一人に與へ且つ復舊領邑の大部分を舊所有者に返附せずしてゼスイト派に附與せし等種々の行爲を目撃するに至り、始めて帝の秘計を看破し、喜悅は怨恨失望と變じ、人心大に背離するに至れり。ワアレンスタイン揚言すらく、世に撰舉侯または貴族ほど必要なきものあることなし、國家の事一にフランス、スペインの如く一王の管理

に委ねざるべからずと、これ蓋し彼が其の始めフェルチナンドに秘計を献じたるに相應じたるものなり。

然れどもリシユリウは佛國の安危に關する計畫に留意すると日久しく、已にイタリイに於てスペイン家のザラリナ及びマンテアに對する野心を除去したるのみならず、彼の注意は國家の内治にあるが如き感ありしも、巧みに黄金を散じて外交に執掌し、戦の乗ずべき機會を洞觀するには寸隙をも等閑にせざりき。一千六百四十年リシユリウはワアレンスタインに對するゼルマンの反抗を利用し、密偵ジョゼフの機智によりて巧にラティスポン議會を操縦して彼の官職を免ぜしのみならず、ワアレンスタイン免官と交換問題たりし默契條件即ちロオマ王の名義を帝の一子に與ふることをも拒絶するの權略を施して成就したり。恁くてフェルチナンドは名將ワアレンスタインと離れ、軍勢また四萬人に減少せるの時に當り、スウイデン王はリシユリウの招聘に應じてポメラニアに上陸せり(一千六百)。

ポオランド王シギスマンドはロシアに於ける成功の餘威に乗じ、スウイデン王を目して篡奪者とし、彼と交戦を開始せり、何ぞ圖らんガスタヴスは三十年戦争の

勇者にして、勢力決して、自己の敵にあらざることを覺らざりしなり。ガスタヴスは一千六百廿一年リガを略し、廿五年リヴォニア全土を奪ひ、翌年ロシアの一部をも領したり。然るに廿六年シギスマンドはフェルデナンドに説き、從來の援助に酬ゆるに自己を援助することを以てしたり。是に於てアウストリアの大軍來援し、共にガスタヴスを攻めしが、二十九年ガスタヴスは戰敗れ勢力頓に窮迫したり、時にリシエリウはイギリス、ブランデンボルグの後援を得、ガスタヴスに説くに無益の戰を繼續するの不利なることを以てし、アルトマルク平和を締結せしめ、六年間の兵戰中止を得て、リヴォニア及びプロシア海岸一帯の地を依然としてスウイデンの有に存せしめたり(一千六百二十九年九月)。

ガスタヴス今は兵戰の累なく、國家成立に顧慮することなきに至りしより、リシエリウは彼に年金百二十萬「フラン」の保護金を給し、セルマンに於ける大舞臺の入演者たらしめき。

スウイイデン及びフランス時代(一六三〇年—一六八八年)。ガスタヴス・アドルフは雷神の猛威を振ひて帝國に出現し、巧に詭計を運らして、敵を混亂の渦中に投ぜ

しめ、數月にしてポメラニア全部を占領せり(一千六百三十八年)。ブランデンボルグ及びサクソニイの新教撰舉侯等はガスタヴスの勢力を思ひ、宗教上よりは寧ろ自己の安危を慮りて外國の君主に土地を與ふることを好まず、フェルデナンドに強請してポメラニアの允許を自己の手中に與へられんことを冀ひ、ガスタヴスに土地及び城砦の明渡しを拒みて攻戰の便を與へず、且つ本國スウイデンの交通を安全ならしめざりき。帝軍の包圍せるマクデバルグも撰舉侯等遲疑して動かず、ガスタヴスまた救ふこと能はざりしかば、終に陥落し、敵將テイリイのため悲慘の虐待を蒙れり(一千六百五十五年三月)。大慘劇は疾く撰舉侯等の心を激し、終に志を決して、ガスタヴスを援助したりしかば、ガスタヴスは帝軍を追撃してレーブシクに近きブライテンフェルトに撃退したり(九月)。サクソニイ、ポヘミアを通じてヴキンナに進軍の際、ガスタヴスは自ら兵を率ゐて西方の諸州を降し、フランコニア、バラチンの僧官撰舉領土を略取せり。而してスベイン軍及び帝軍の兵勢を分離せるを見るや、直に歸りて帝軍の中堅を突撃しき。彼はパツリア通路の要衝なるドナツウエルスを占領し、レツチの通路に砲火を加へてテイリイに重傷を蒙らしめ、續いてマニツチに侵入せ

り(一千六百三十四年四月)マキシミアン侯は城に籠居して大勢挽回の希望なく、曾て彼がバラチン伯に與へたる同一の運命を待つ窮境に陥りぬ。

フェルデナンド二世はスウイデン、サキソニイ兩軍の兵勢を結合してヅキンナ城下に迫れるを見て大に驚き、一時貶斥したるワアレクスタインの來援を得んとし屈辱を忍び、再び他に總指揮官の大任を與へて、漸く招致することを得たり。ワアレクスタインは貶黜の身なりしと雖も、名聲は世の尊重する所なれば、立て戰場に現はるゝや、部下に集まるもの忽ちにして優勢なる一軍を編成し、一舉してポヘミアよりサキソニイ人を撃退し、エイゲルを通じてガスタヴスに向つて進軍せり、エイゲルに至るや、マキシミアン侯敗殘の兵を率ゐて來會しぬ。ワアレクスタインは堅く計策を定め、靜に北方サキソニイに轉じ、エルベ、サアル間の地を撰みて冬期越年の保寨を築きたり、ガスタヴス之れを探知し、前年は進軍の躊躇よりマゲデバルグを失ひたれば、今又同一の理由によりてサキソニイの敵に奪はるゝことを好まず、速かにスリンギアを通じて急行し、ワアレクスタインの不意に乗じてエルファート及びニュルンベルグを奪へり。時會、十一月の初に當り、寒氣凜烈膚を裂く

許りなりしかば、ワアレクスタインはガスタヴスが冬期中交戦せざるべしと思考し、メルスバルグ、トルガウの間に壘壁を築きて冬陣の用意をなし、副將パペンハイムをラインランドに歸らしめ、行々ヘルを略取せしめたり。然るにガスタヴスは敵の準備未だ整はざるに乗じ、ワアレクスタインの本隊に突撃を試みたり。ワアレクスタインは戦の避くべからざるを知り、急使を遣はしてパペンハイムを招還し、急に堤壁を壊ち平野に深溝を穿ちてガスタヴスの來襲を待ちたり。此の戦争は實に歐洲環視の間に於ける二大優の決戦なりき。十一月十六日終に兩軍ルッヂェンに衝突せり。初回の交戦に於てスウイデン王銃丸に中りて斃れしが副將サキスワイマルのベルナアド侯はガスタヴスに亞げる驍將なり、直に復讐の熱情に驅られ奮戦勇闘敵將パペンハイムを殺し、猶進んで敵の堡壘に肉薄し、帝國軍を撃退せしめたり。

かく戦勝を博せしと雖も新教徒及びスウイデン人の間に起りたる分裂によりて再び勢力衰退し、帝國軍再び各地に優勢を示すに至れり、フェルデナンド二世またワアレクスタインの用なきを思ひ、且つ私に彼の非望を危惧したり。ワアレクスタ

タインは占星者の言を信じ、自らボヘミア王に登るべしと思惟せしが、エイゲルに於て遂に暗殺せられたり、時に一千六百三十四年二月なり。ワアレンスタインの相續者ビッコロミニイ、ガラス、ウエルスのジョン等兵を率ゐてスウイデン人及びベルナルドを撃つてノルドリンゲンに大勝を獲たり(九)。スウイデン兵の死するもの一萬二千人、生擒六千人、中に名將ホルン侯あり、ライン河に追はるゝ者或はポメラニア方面に逃るゝものもありたり。ゼルマンの諸公は再び此處に兵を止め、サキソニイ撰擧侯はブレエグ條約を締結し、二三の除外例を合せて領土復舊の布告を承認したり(一)。十五年五月(三)。

ガスタヴス・アドルフ・アス戦没して彼の希望と運命とはリシユウの收むる所となり、今やフランス自ら三十年戦争に干與するに至りたり。當時リシユウは内國の事情一も牽制するものなく、専ら力を外國に用ゆることを得るに至り、アウストリア家對抗の争亂に當りデムマルクを保護し、或はスウイデンを援助したり。始め彼はアウストリア及びスペインに對して固く同盟の網を蔽ひ居りしが、パリ會議に於て一萬二千のゼルマン同盟者を得、之れが保證としてアルサスを與へ(一)。百三十六

四年(十)セント・ジャアメン會議に於てはサキス・ウイマルのベルナアド及び其の軍を味方とし、(三)年十月(七)コンピイエンに於てはスウイデンの元老オクゼンスタルンと協商する所ありたり(四)。またウエゼルに於てはヘッセ・カッセルのランドグレエツに約するに保護金を支給して出兵せしめ(十)。パリに於てはオランダ人をしてネザルランドと分離せしめ(七)。リッヅォリに於てはスウイッル人及びサヴォイ・マンチユア及びバルマの諸侯と和親を結びたり(七)。

此の如き條約の範圍によりて如何に戦争の大なりしかを知るに足らん。リシユウは佛國の周圍に戰を起さんとし、ライン河の兵陣を以てシャンペイン及びプロレンを保護し、アルサスを略し、ネザルラントを攻てオランダと分割せんとし、セルマンに進軍してスウイデンと兵力を合せてアウストリアの勢力を破らんとし、イタリイにありてはヴァルテリナに於けるグリッソンの主權を保持して、ピイドモンドに於けるフランスの勢力を維持し、ピレニイ山方面に於てはルウシロンを奪ひ、外洋及び地中海上に在りてはスペイン艦體を破摧し、ポルトガル及びカタロニアの反亂を助けてイタリイの海岸を威嚇せんと欲したり。

トレサスの大僧正スペイン人の迫害を蒙り遁れて佛國に保護を乞へり是れ戰亂破裂の口實を佛國に與へたるものなり。ネザルランドのシャテロン及びブレエゼはリエジ附近のアヴェインに於て大勝を博したり(一千五百三十五年五月五日)。然るにオランダ人は優勢なる佛軍が國の近傍を壓するを見て大に惧れ弱勢のスペイン軍に心を寄せ佛軍に與ふる援助を少からしめき。スペイン軍は此の好機に乗じて大に利する所ありしのみならず、ビッコロミニ一萬人の帝國軍を率ゐて來援せしかば軍氣大に振ひ佛軍猶オランダに在る暇に乘じビカルデイに侵入しソムメを横切り、コルピイを占領せり(三十九年)。此の報に接したる佛國の朝廷及びパリ市は一時震駭せり然れども速に全市民は勇氣を回復し職工夫等まで集まりて義勇兵を組織し市會議員等は歩兵一萬二千人騎兵三千を三月に集めまた軍糧を得んとを王に奏請したり。ルイ十三世はリシユウも及ばざるの勇氣を示しロイル退軍を拒んで聽かず却て四萬人を率ゐて進軍しスペイン兵を國境より驅逐してコルピイを回復したりき。王弟リシユウの威名を忌み密かに彼を暗殺せんとし好機に乗じて決行せんとしせしに謀泄れリシユウは僅に災厄を免れたり(三十九年)。バルガン

デイの侵軍は思はしき効果なかりき。ガラス及びロオレン侯の兵はセント・ヂュアン・デ・ロスンに到りしが頑固なる抵抗を蒙りランツァウ伯のために撃退せられサキス・ワイマル侯の猛烈なる攻撃に遇ひて佛軍は算を亂してコムテに退軍せり。翌三十七年カアディナル・デ・ラ・ヴレトは上部サムブル、カトウ・カムブレシス、ランドレシイス及びマウピュウジの諸邑を畧せり。リシユウは貴族の制御し難きにより寧ろ温順にして効果ある僧官に兵馬の指揮權を委托するを好みしかば、ポルドウの大僧正ソルデイスを海軍提督とせり、ソルデイスは三十八年フォンタラピアの沖にスペイン艦體を破り、ネエブルス及びスペインの海岸を掠略したること一再に止まらざりき。然るに同年ライン河附近に於て大勝を得たり、即ちサキス・ワイマルのベルナルドはラインフェルトに帝國軍を破り、其の將ウエルス・のジョンを生擒し、爾後三大勝利の後ウエウ・ブリサクを撃破せり。ベルナルドは戰捷に酔ひ自立してアルサス及びブリスガウの主權を握らんとし、病没せしかば、佛國は好機に乗じて勝利の威名を奪ひ、遂に軍隊をも併せぬ(一千九百三十九年)。アルサスはアウストリアの屬邦なり、スペインの包圍せるアルトアはスペイン

に屬せり。ラ・マイレラ、シャテロン及びシウルの三元帥はアラスを包圍せり、ベック及びラムボアは三萬人に將として急ぎ救援に赴けり。二元帥は意見互に相容れず、一は堤壁に止まらんと欲し、他は戦列を抽んで攻撃に出んことを争ひ衆議決せず、遂にリシェリュウの採決を仰ぎたり。リシェリュウ答へて曰く、王卿等を統帥に任じ給ひしは卿等の技倆を信ぜられたるにあり、戦列を出て、戦ふと戦はざるとは一に卿等の心にあり、然れども城邑を略取せんには卿等生命を賭するの義務あるべしと。後數日スペイン軍を敗りてアラスを奪へり(一千六百四十年八月)是れアウストリア家より略取せし第二の城邑なりき。同時にフランスはイタリイの北部をも攻撃せり。一千六百三十七年(イクトル・アマデウスの死後)弟ユリグナノのトオマス公及びカアディナル・マウリス等は攝政の事よりヘンリイ四世の女クリスチネといふアマデアスの寡婦と好からず、却てスペイン軍を援助となせり。リシェリュウはキヤセイル、テウリン、及びイヴリアに於て三大捷を博したる驍將ハルコルト伯をピイトモンに派遣してクリスチネを助けて攝政の權利を保障せしめ、また巧妙なる條約をサヴォイの諸公と締結して、再び佛國の同盟たらしめたり(一千六百四十二年)。

一千六百三十五年にはまたロオハン侯再びスペイン人をヴァルテリナより驅逐せしめぬ。

スペイン人は當時外列國に對して攻勢を執るの餘裕なかりき、そはカタロニア人及びポルトガル人等舉兵して同國に反抗せしより、防阻に全力を傾注したればなり(四十一年)。カアディナル・リシェリュウは夙に此等の反撲を熟知し、葡國の親王プラガンザのジョンに援助を與へ、カタラン人を勧誘してルイ十三世をバルセロナ及びルウシロン伯に承認せしめたり(四十一年)。佛軍の一隊はラ・モス・ボンダンコルトを將としカタロニアに侵入してスペイン人を撃退し、他軍は佛王自ら將としてペルピナンを略し、ルウシロンを佛國の有となせり(四十二年九月)。

當時スペインは國內反亂の鎮壓を事とし、外國の權利を保持するの暇なきにより、ゼルマンに於けるアウストリア家の兵勢は孤立の状態に陥りて累卵よりも危かりき。一千六百三十五年に於けるサキソニイ選舉侯の背反以後ポメラニアに退陣せるスウイデン軍はストックホルムの國會のポオランドより歸陣を命じたる軍隊の來援を得、加ふるに優勢なる佛軍の敵を牽制するありて、第二のガスタヴス

なるバアネル直に起て攻撃を始め、三十六年ブランデンホルグのウイットストックに於て帝國軍を破り、三十九年サキソニイのケムニツに再び之れを破り、ボヘミアに侵入したり。四十一年當時の有名なる戰略家グエブリアント伯の補佐によりてダニユップの堅氷を渡り、深く敵地に侵入してラティスボンに到り、殆んど帝國の國會を奪ひ、帝を生擒せんとせり、然るに融雪不意に生じてフルデナンド漸く免れ、數ヶ月の後惡疫流行し、バアネル病沒せしかば、幸にも帝は全きを得たり。バアネルの承繼者トルステンソンは勇將にして兵を行ふこと疾風の如く、到る所悉く勝ち、グロガウ、シウアイドニツ(シレミ)及びサキソニイのブライテンフルドに光輝ある戰捷を博し、(一千六百)大に歐洲の天地を震動したり、其の間グエブリアントはワイマルの軍隊を率ゐて帝國の西部に冒進し、スウイツル兵は東方より攻撃し、帝國軍到る所に潰敗せり。彼は一千六百三十一年ウルフエンバッデルに於て勇將ビッコロミニイを破り、四十二年コロンの撰擧侯領地ケムペンに於てラムポイの大軍を擊破し、到る所ゼルマンの不平黨を援けて帝國を横行濶歩せり。

スペインはリシユウの計略によりて手足の出る所を知らざりしが、彼の死を聞

くに及んで鬱没の勇氣を回復し、シャンペインに向つて進軍し、老將ドンフランシスコ・デ・メロスを將としてロクロイを包撃せり、ロクロイ一たびスペインの有たればバリの防備は無効たるべき要害の地なり、さればスペインは一擧に之れを奪ひてバリの死命を制せんとするにありき。當時ロクロイは寄兵を以て守り、其の將は二十一歳のエギン侯ボルボンのルイ、後年大コンデ侯となりし人なり。兩軍遂に四十三年五月十九日に相會せり。騎兵兩翼は中堅の未だ起たざるに先ちて交戦し、コンデ侯右翼を率ゐて敵の騎兵を擊退し、己が左翼メロスに破らるゝや敵の後方を廻りて敵の右翼に突貫して、擊退せり。スペインの歩兵また動かさず、コンデより進み、包圍して三度攻撃して隊列を破り、指揮官老フエンテス伯戰死し、コンデも亦兩腕に五ヶ所の銃瘡を蒙りたり。

エンギン侯は自ら任ずるに新アレキサンデルを以てし、燃ゆるが如き精氣に驅られ、寸分の隙なく戰捷の餘威を振ひ益々進んで敵を攻撃し、年毎に戰捷を獲ざるることなかりき。スペイン軍の佛國に影を止めざるに至るや、コンテは直にシオンキルを奪ひ(四十八年)更に進んでアウストリア及びゼルマン同盟軍を襲撃したり。

ワイマルの軍はロスウエルを略取せりと雖も、名將グエブリアントの戦死するあり、また諸將の統御宜しきを缺きて陣地互に離隔せしかば、帝國軍の嚇す所となり、ダットリンゲンに於ては戦利あらざりき(十一月二日)。テウレン殘餘の兵衆を集め自ら將となれり、コンデー一萬の兵を率ゐて來り會す。兩雄力を合してプリスカウに於けるフライボルグ城下にバヴリアの將メルシイを攻撃し、二回の交戦毎にコンデーは熱狂の佛兵に擁されて大勝を獲たり(四月十六日)。然れども勝利は寧ろ恐怖すべき虐殺なりき。メルシイは隊伍を亂さず退却せり、しかも二雄のためにフィッブスボルグ、ウオルムズ及びメエンスを抄略せられ、ラインの兩堤最早帝國軍の有を脱するに至れり。

コンデー侯戦捷の名譽を獲てパリに凱旋し、市民歡喜の裡に在り、テウレンは當時トルステンソンの招に應じ、豫て互に指定したるザキンナの城下に赴かんとせり。トルステンソンは已に遠きモラヴィアの地よりジャットランドの邊境に至るまで遍くセルマン全土を横斷し居たりしが、ガラスの率うる帝國軍己を半島に包撃せんと企つと聞き、ブランデンボルグのジャッタアボックにガラスを破り(四月十一日)、又ボヘ

ミアのジャンコウツに於て帝國軍の一隊を撃破しき(一千六百四十五年二月)。トルステンソンのモラヴィアに歸りてブランを包圍し、ザキンナを威嚇し、ダニウプの平原に於て會合すべくテウレンを招きたるは實に此の時なりき。

テウレン兵力を待みて深く帝國に侵入し、ためにマリエンサルに於てメルシイに撃破せられたり(四月十五日)。然れどもエンギン侯凶報に接して急ぎ彼を援けて敵を撃退し、バヴリアに進入し、ノルドリンゲンの血戦に於て帝國軍を全滅せり、此の役に勇將メルシイ陣没す、時に一千六百四十五年八月。翌年侯はフランダアを通過し、ダンカアクを包圍してスペイン軍に對抗し、終に陥れて佛國の有となせり。翌年侯は、またカタロニアに入りて、レリダを包撃せしも、二雄侯及テウレンの武勇にして能く之れを抜く能はず、却て撃退せられたり(七月)。こは初めての敗績なり、然れども侯は他方面の戦捷によりて耻辱を雪ぐことを得たり。此の時スペイン人は侯の不在に乗じ北方に於て威力を回復し、且つ皇弟レオポルド大公兵に將としてアルトイスのレンスに迫り來れり。コンデー彼を撃て二時間に亘る激戦の後遂に大勝を得ぬ(四月十八日)。

此等の戦勝を耳にしつゝ、テウレンはゼルマンの戦役に従事し、大膽にして巧妙なる戦術により戦ふ所に名聲を博せざるとなかりき。トルステンソンの後承ラッセルスウイデン人と力を合せ、四十七年十一月にロオウンゲン、四十八年五月にアウスボルグ附近のサスマルシヤウゼンの役に勝ち、レンなるレヒの通路を扼し、遂に七十六歳のバヴリア撰擧侯をして領邑を捨つるの已なきに至らしめたり。時に大雨襲ひ來り、ライン河の水漲りしかば、ランゲルは進んでザッキンナに侵入することのみは能くせざりき。

是より先^(一四一)平和協商の提出ありたれども、漸く四十八年四月十日に至りてウエストフリアの二域邑に開くを得たり、次でマンスタアに於て新教派諸公及び皇帝の代表者間に協商する所ありたり。エウロッパの地圖は三十年戦争によりて改められ、帝國に新憲法を判定し、又キリスト教國民の權利及び宗教上の特權を確定せらるゝに至りたり。佛國より才幹ある協商者アゾオ伯及びアメルセルグイエンの出席ありしも、外交の手腕を有せるコンデ及びテウレンの武力は能く百説を排して平和を議決せしめたり。ブレエグ城スウイデン人に襲はれしにより、帝は

大に恐怖して平和に心を決定したりしなり。是に至りスペイン兵は當時佛國に起れるフロンデ事件に乗じて利する所あらんとし、兵を引て歸り、他の諸州は戦亂の一日も早く平なるを冀ひて平和條約に署名し^(一六四)年十月二十四日。

三十年戦争に於てアウストリアはゼルマンに起らんとする宗教及び政權の防止に力を注ぎ居たりしが、戦敗れて如何ともする能はず、志望全く水泡に歸し、破壊の目的物却て根柢を固め、其の勢益々強大となれり。新教徒は全く宗教上の自由を得るに至り、一千五百五十五年アウグスボルグの宗教平和は此の時に至りて確立することを得たり。ロオマ教、ルウサア派、及びカルルン教の三大宗派は均一の權利を享有し、教領地及び禮拜の執行に關しては百事悉く一千六百二十四年に於けるゼルマンの舊態に回復せり、但しバラチン領のみは例外なりき。寺領地の多數は新教徒諸公の賠償に供するため平分せられたり。かくしてブランドンホルク撰擧侯はマグデボルグ、ハルベルスタット、ガミン及びミンデンの僧正領土を有し、メツケレンボルグ侯はスクウエリン及びラツバルグの僧正領土を取り、ヘツセ、カッセルのランドグレエツはハアスクフェルドの寺領及び六十萬クラウンを、サキンニ

イの撰舉侯はラサミア及び數多の寺領を享有することゝなれり。バラチン家のためには別に第八撰舉位地を創置せしも、バラチンは上部のバラチンを領有せり。帝權今は強壓を蒙りて無効の有様となり、議會は諸公及びセルマン諸州に同盟、戰爭、平和及び新法律の諸問題に關する投票權を保留し、また各領土内に於て主權の執行權を確定し、外國と同盟締結の特權をも享有するに至れり。スウイッルとオランダとはセルマン事件に關係せざりしも、今は此の法律の制裁を受くることゝなりたり。

アウストリアの敗亡を誘致したる佛、瑞の二強國は各自必要なる賠償を獲たり、即ちスウイッルはルウゲン、ウオリン、及びユウセトムの諸島、ウオスマル、フレメン大公領土のステッテンを併せ、西部ポメラニア及びヴェルデン大公領土、換言すればオデル、エルベ及びウエゼルなるセルマンの大河口に在る部域と、金五百萬、クラウン及び議會に於ける投票權利、箇數三箇を併有したるなり。フランスはロオレンを保持し、此の地の封侯は佛國の諸條件を認容して之れを返附するの約をなしたり。またメツ、タウル及びヴェルダンの三僧正領土をも領有し、一千六百三十一年サヴォ

イ侯より帝國に讓與したるピクネロルの邑土を取り、ストラスポルグを除くの外アルサスの全部を併せたり、これによりて佛國の國境はラインに面するに至れり。加ふるにヴェウ、ブリザック河の東岸を占有し、フィリップスボルグに守兵を置くの權利を有し、ライン河の航行自由なるを得たり。こは佛國に取りて非常なる利益なりといふべし、そはアルサスを領してより佛國は一面ロオレン及びセルマンに接し、他面フランテコムテの北部に隣り、爲に二邑は爾後掌中に在るの形勢となりたればなり。

かくて佛國は自國の防備に關しては巧みに其の邊境を整理し、外に向つては攻勢の體度を保てり。且つピグネロルを通じてアルプ山外に在るイタリアの一部を有し、ヴェウ、ブリザック及びフィリップスボルグに依りてライン河外のセルマンに足跡を印することを得るに至れり。尙加ふるにセルマン諸州は外國と同盟を締結し得るの權利に基き、絶へず貧弱なる諸公を略取し、條約執行を勵行せしため、セルマンに於て事件の發生する毎に關與せざることなればなり。爾來帝國は四五百州同盟の一變形と化し、ルウサア教或はロオマ教は互に一方に對峙し、王權あり、

共和政體あり、貴族政治あり、僧侶政治ありて、近世初期のイタリアの如く、帝國は宛然エウロツバの戰場となれり。

ウエストフリア條約は十七世紀の中葉より佛國革命に至るまであらゆる外交上協商の基礎となりしが、要は歐洲に於けるアウストリア家の大權に終り、ボルボン家の興隆に道を啓きたるなり。

第三章

スチュアアート家とクロムウエル

時代のイギリス

スチュアアート家　　ボルボン家がルイ十四世時代にかゝる興隆を致したる所以のものは、一に三十年戦争の結果、セルマン、スペイン二國に分家せるアウストリア家を自己の膝下に屈服せしめたるに據りしこと勿論なれども、又實に時を同ふせるスチュアアート家の無能なる嘗てエリザベス女皇の偉業によりて優秀の位置に達したるイギリスを再び庸劣の地に落下せしめたるに依らずんばならず。

エリザベスの死後英王ヘンリー七世の女系を繼承せし曾孫メリー・スチュアアートの嫡、スコットランド王ゼエムス四世は英蘭兩國民の歡呼の裡にゼエムス一世の位

に即きたり。王は狀貌甚だ魁偉、其の醜殆んど見るに堪へず、舉措また醜陋として、毫も王者の容威なく、加ふるに性情陋劣にして、德操の稱ふべきものなく、會、寛仁慈惠の行あるも畢竟自己が奢侈榮耀の餘慶に過ぎず、博覽の識あるが如きは、誇學の結果にして、平和を愛好するが如きは實に彼が怯臆の性を發揮するもの、唯々として事無からんことを欲し、其の政略や譎詐其の交情や輕浮、遂に眞の德として認むべきもの一もあらざりき。さればにやヘンリー四世は彼を呼ぶに「マスター・ゼエムス」を以てし、サアライ公は嘲りて「最も賢明なる愚物」と曰へり。

ゼエムス一世は對外策として、嘗てエリザベス代に英國の偉大を致したる新敎政策を放棄し、またヘンリー四世の一大計畫に參助することを拒み、却てスペインの歡心を得んことに努めて、女婿フレデリック五世即ちバラチン選舉侯の没滅を殆ど關せざるもの如くに傍觀し、内治策としては専ら帝王神權説を提唱して、自己の權力を絶對不可侵のものたらしめんと計りぬ。蓋し此の政策こそ彼が全行爲を支配する動機にして、また政治の根本原理となりたるものなり。

エリザベスのため痛く迫害を蒙りたる舊敎徒は自ら頼むらく、斯王の下に於て

は幾分か從來の虐運を緩和し得んとされどゼエムスは依然として虐待を繼續しぬ。是に於てか一千六百〇三年の初期彼等は「メイン」(Main)、「バイ」(Bye)の二ヶの隠謀を圖りて復讐を試みたり、凶變のために名士の災禍に罹るもの多く、先朝の權臣ウオルター・ラレーもまた實に其の一人なりき。就中最も過激なる教徒は五年に至りて兇惡無比の隠謀を企てたり、これぞ所謂「火藥の隠謀」と稱するものなり。

國會の開會に先立つ二三時間舊教徒の一貴族は、匿名の一密書を手にしぬ書に曰く、予は貴下に勸告す、貴下にして生命を重んじなば、國會の出席を暫く遅延ならしむべし、今や神人共に今世紀の横逆を所罰せんとしつゝあればなり、卿が此の書を燒棄する頃には其の危害或は過ぎ去るべしと。書は直に各大臣に廻送されぬ、然れども彼等は一笑の下に附し去りたり。此の時に於ける王は此等有司よりも賢明にして、必ずや一大災厄の來たるべきとを豫測したり。かくて直に人を使はして上院の床下を検せしめたるに、果して三十六バレルの火藥埋設しあるを發見せり。火藥こそ實に王、王族、貴族、下院の議員すべてを一堂に壓殺せんと謀りたるものなり。徒黨の一人は立所に捕獲され、拷問に遭ふて遂に共謀者の面々悉く

舊教徒なる事を白狀せり、是に於て彼等は盡く捕へられて死刑に處せられたり、中にゼズイト派の教父ガアネットもありたり。爾來英國にて毎年十一月五日を以て祭典を行ふは全く此の兇變の紀念なり。隠謀發覺の結果舊教徒は愈、眞の迫害を蒙るに至り、是より以降彼等は宮廷に出入することを禁ぜられ、又ロンドンに往來することを許されず、而して住居は首都を去ること少くとも十五キロメートルを距れざるべからず、又七キロメートル以上を距る地に旅行せんとする者は役人四名の連署ある免狀を携えざるべからずと規定せられたり。更に彼等はルイ十四世の改教徒に禁止したると同じく、醫師、辯護士等高尙の職業を營むこと、并に裁判官、區役吏等公職に就くことを禁ぜられたり。結婚するに就きても夫妻何れが一方舊教を奉ずるものなるときは舊教者は對偶者の財産に就きて何等の請求權なきものなりと制限せられ、彼等一ヶ月の生計は十磅を超ゆべからず、又饗宴費も同上額を超ゆるを許されず、尙家宅は何時たりとも搜索を拒むことを得ずと、之れ明かに市民の個人的自由并に家庭の神聖を保護する英法に背乖せるものなり。かくて一千六百〇五年彼等は奉君盡忠の宣誓を要請せられ、遂に何時たりとも事あ

るに際しては必ず王を擁護すべきことを宣誓せしめられ、剩さへ法王の破門を宣告したる王皇は臣下能く廢立するを得べしとの教條は不義不正の邪義なりと認めざるべからざるやうなれり。此の如き無限の窘迫を蒙りたる英國の舊教徒が漸く自由なる民法の恩澤に浴するを得るに至りしは實に十九世紀の事なりとす。

抑、非國教徒は當王より好遇せらるべき理由を有す、蓋し王はスコットランドに流布せる同教徒によりて人と成りたればなり、然るに王は假借なく彼等を苛遇して飽かず、ロオマ教よりも更に／＼に王の厭惡する所となれり。蓋し斯教は王の最も重んじたる宗教上の階級權を藐視せしを以てなり。之れを要するにゼエムスは生涯を通じて全然英國教會に歸依し、以て帝王神聖權を否認したる舊教徒を迫害し、兼て又王の嫌忌せる共和制の傾向せる非國教徒を窘迫したるなり。されど十七年スコットランドに英國教を樹立せんとの企圖は全く失敗に飯しぬ。清教徒は遂に二十年王の毒手を免れんためアメリカに渡航し、マサチューセツ州のコッド岬近傍の地を求めて茲に自由の禱を捧げたり、今日のアメリカ合衆國は實に彼等避難の結果なるなり。上述の如くにして他教に對する王の迫害は茲に成效を告

げぬ。

かゝる事情の下に於ても一方國民自由の氣は、再三其の閃光を放ちつゝありき。先皇エリザベスは財政策宜しきを得たるを以て國會を召集するの必要殆んどなかりき。之れに反してゼエムスの放蕩奢侈なる、已に相續財産を盡盡して早くも即位當時より負財をなせり。是に於て三度國會を召集し、而かも其の都度直に停會を命じたり、蓋し議會は王が其の特權を放棄するにあらざれば保護金を支辨するを肯んぜず、王は又議會まづ保護金支辨の議を可決するにあらざれば決して自由の保護を約せず、かくて相互自己の主議を固取して動かざればなり。遂に王は一千六百十四年議員五名を獄に投じたれども何等の効なく、餘儀なく國會解散を命じたり、時に一千六百十七年なり。されどこは却て反對の氣焰を高め、更に強固ならしむるの外その効なかりき。王嘗て公言すらく、神は王を以て法律以上に置くものなりと、彼は終始巧言譎詐の閣臣に支配せられ、或はまた主權を無能の寵臣に委ねたり。初めて彼の推舉したるはバルレイ卿の男ロバートセシルなりき、彼はエリザベスの末期宰相に任ぜられ、其の位置を繼續して當王よりサリスベリイ

伯に任ぜられたるなり。十二年少壯のスコットランド人ロバート・カアル代りて職に就き、順次ロチェスター、ソオマアセット伯に任ぜられたり。暫時にしてカアルに代れるを二十二才の嬖臣ジョルヂ・ウイリアとす。彼は才幹の傑出せると共に風貌も尤端嚴、二年間にナイトとなり、侍従となり、男爵となり、子となり、バッキンガム侯となり、提督となり、サンク・ポオツの司令官となり、遂に諸官職任免の最上權を掌握するに至れり(年十五)。彼の才を振ふや、いかなる破廉耻の行爲をも敢てし、倏時にして巨萬の富を積み、奢侈榮耀を極めぬ。王は毫も彼の亂行を制止せんとはせず、只なすが儘に委しぬ、蓋し王もまた彼と同一行爲を成しつゝあるを以てなり。彼は國會より保護金を得る能はざるより、金策の一法として官位官職賣買法を施行し、裁判官、判事職を公賣に附し、また不正なる訴訟は被告の財産を沒收する等の法令を發布せり。此等の餘弊は當時の大法官にして有名なるベエコンをすら官金を私消して獄に投ぜられ、科料四万磅を課せらるゝに至らしめたり(二十六年)。ゼエムスは已にエリザベスの擔保として取りたるラムケンス等の都邑を國會に賣拂へり、而かも此等より得たる収入は直に寵臣等の囊中に收められ、國民は益怨嗟の聲を

高むるに至りぬ。如上の苦策を運らせるにも拘はらず、國庫全く空乏して毫も充實せず、時恰かも新教のゼルマンにて遭遇せる危難を機として新國會を召集せり。されど下院は國民の苦痛を救濟せざる以上は保護金の支出を肯んせず、遂にまた再び王は之れを解散せり(二十年)。ゼエムスはスペイン皇女が巨額の持參金あるに釣れて王子に娶せんことを計りぬ、されど計畫はバッキンガムの愚策によりて失敗に終り、却てスペインと干戈を交ゆるに至れり(三十年)。茲に於て愈資金の必要に迫られ、遂に議會の委員に許すに租稅徵集權及び使用監督の權利を以てし、同時に壟斷權を廢弛し、嚴密に個人の自由を承認するに至れり。後幾何もなくしてゼエムスは薨じぬ(四月一日)。王は臨終に際してルイ十三世の妹ヘンリエッタを娶りて王子に配したり。ヘンリエッタは四世の所謂「ゼエムス先生」は中々の議論家にして著書少からず、就中著明なるは「Basilicon Doron」及び「自由君主政體の眞法」なりとす。已にチュウドア家は君主絶對權を確立に事實とし、ゼエムス一世は之れを法律に規定せんとせり、上記の書中第二のものは此の意見を獨斷的に論述したるものなり、書中に曰く「王は支配するものなり、臣は服従するものなり、王の支配するは神聖權ある

の故なり、そは王は神の權化なるが故に神は之れを法律以上に置きたるなり、是を以て王は自ら法律を制定し、毫も國家の干渉を蒙らずして自由に臣下を懲罰するを得、而して王は嚴密に國法を遵守するを要せずと。説は直に英國教會の採容する所となり、一千六百〇六年の教令を以て教會は君主に絶對的服従する旨を布告せり。

抑も専制主義は事實上久しく存在することを得るも長く論議によりて支へらるべきものにあらず。ゼエムス一世は専制君主たらんと欲したれど、いかにせば希望を實現し得るやを知らざりき。現に彼は之れが資とすべき三個の重要物即ち資金、軍隊、輿論の何れをも有せざりき。此の如く彼が神權説に就て論議せる間に、國民は却て自から自由に慣れ、今將に革命によりて之れを獲得せんと期しぬ。

チヤアルス 一世

（一千六百二十年）

イギリスは新王に望む所甚だ多大なり

き。王は沈着平靜、持操堅實、事を行ふや熱誠、家を齊ふるに秩序と中庸とを保持し、誠に一代の君子人なりき。風貌舉措共に威容ありて、廷臣を服するに足り、國民を撫するに足れるが故に、彼にして一片誠意眞實の徳を有したらんには必らず全國

民の愛敬を享くると疑なし、然れども惜いかな、彼の登極するや、希望と歡喜とは全國に湧起せしと雖も、一朝の夢にして、一度新王が依然パッキムガム侯を信賴し、新皇后また舊教徒によりて圍繞せらるゝを知るに至り、忽然として消滅しぬ。王また嬖臣等に惑はされ、かの統治權の根本問題に就いては國民の同情を喪失しき。抑もチヤアルスは彼の無上權説を父王より傳承し、かねて大陸の事情を窺ふに、輿衆の自由は廢弛され、貴族の特權は粉碎せられ、獨り王權のみ強大となり、いかなる矛盾も障礙も其の前には力なきを見るに至り、以爲く、民の幸福を保全せんがために、は、チュウドア家の所策の如く、其の自由を堅く禁錮するにありとて、各個人の自由を抑止せんとせり。蓋し卅年の長きに亘れる薔薇戰爭の結果による民力の疲弊、次で三十年以上民心を煩惱せしめたる宗教改革、乃至英國の存立をすら危険ならしめたるフィリップ二世との戰爭により一時人心此の方面に凝集して、また各自の特權如何を顧ること莫りしを以て、彼は民權の黙止を以て直に滅亡せるものと誤解し、かく至らしめたる如上の眞因を忘却したり。由來國家がかゝる危急に際する秋は、國民は帝王に許すによく絶對無上の權を以てすることあるなり。されど今翻

つて國の内外を見るに、スペインは喘々として將に死期に瀕せんとし、フランスまた外國に對して威壓を試むるの餘勢なく、宗教問題も一時落着を告げてより已に久しければ、イギリス國民は再び舊に飯りて其の前程を踏行し、一時中絶したる代議政を再興せんことを欲しぬ。また市民はエリザベス女皇及びゼエムス一世の朝商工業によりて大に豊富となり、また王及び宮臣等の奢靡豪奢により彼等は却て王室貴族等の債權者となりて陰然勢力を扶殖したるにより衷心自ら自由愛好の念を勃興しつゝありたり。已に國家の一大勢力となりて下院に最も多數を得首都の市長となれる彼等の今日、權利の配當を受け、稅政の政治を監督すべく希求するは毫も訝しむに足らず。然るに他に一大勢力の英國を驅つて之れと同途に向はしむるものあり。十七世紀に於て王及び貴族は共に宗教を改革して全然貴族的たらしめんとせしを、民衆は全く別途を歩みてこれを完遂せしめざりきことあり、之れ根本的に一大改革を告ぐる曉鐘となれり、即ち清教徒これなり。ヘンリー八世及びエリザベスは政府に對して最も柔順なる、所謂官立教會を設立し、賦するに幾多の富を以てせり、而して榮耀を極めたる僧正は専ら皇室に對して絶對に

臣従すべき旨を潤々として説教せり、されど聖書を手にせる一般の民衆、暴君に對する豫言者の戒飾を信仰する民衆をして遂に満足を得せしむること能はず。却て政治上の自由を希求せる者と、是等信仰上の自由を翹望する者と相合して遂に悲慘の革命を齎らすに至りたり。

チャアルス一世の治世は自ら左の三期に區分せらる。

第一期、有國會の治世(一千六百廿五年より廿九年に至る)

第二期、無國會の治世(一千六百廿九年より四十年に至る)

第三期、無國會を以て統治を持続せんとする強行政治、國會との衝突、及び王

の敗北(一千六百四十年)

チャアルス一世の即位當時政府と國民と相合せず、王は父王の絶對無上權説を固守し、國民は嘗て享受したる自由を再び得んことを希求するの旨を述べたり。かくして避くべからざる衝突は王の即位後幾何ならざるに爆發したり。事は海關稅賦課の議に始まり、政府は王の御宇間之れを徵集せんとを提出し、下院は只一ケ年間のみと可決し、同時に政府の不信任を宣言せり。これチャアルスの大に憤

る所となり、立所に國會解散を命じたり。王は一千六百二十六年再び國會を召集して献金を要請せり、されど國會は人民の暴政に苦しめる事を陳述して、虐政の原因をバッキムガム侯にありとし、侯を弾劾せり。王は一寵臣を救護せんがため再び解散を命じぬ。是に於て侯は輿望收攬策として、已にスペインと會戦せる王を勸誘するにフランスとの開戦を以てし、遂に王を説服してラ・ロオセル (La Rochelle) に在る新教徒救援として艦隊を回航せしめたり。遠征は提督の無能により、レール島攻撃に大敗して計畫失敗に歸せり。王は民衆の憤激を他に轉ぜんが爲第三國會を召集せり、然るに下院はバッキムガム侯の失敗によりて政府反抗の氣勢愈強硬となり、議員は議場に臨むや、國家の蟲毒たる君側の一奸臣を除き、以て秕政の禍根を絶ち、國政の改革を斷行すべしとの一大決心に臍を固めたり。彼等は劈頭先づ二個の諫議を奉呈しぬ、一は關稅の不法徵集に對する非議、一は國民の禍根と目したるバッキムガム侯彈劾案是なり。チャアルスの憤怒は頂上に達し、遂に無期停會を命じぬ。一千六百廿八年バッキムガム侯はジョン・フルトンに刺されて、其の毒手に殞れぬ。越えて翌年國會は所謂權利請願を起草して國王に奉呈したり、これ第二の

大憲章ともいふべきものなり。チャアルスは止むを得ず採納し、自ら左の勅語を發して之れを成立せしめたり、曰く、下院の協賛を経ずして漫りに租稅を徵集せざる事、法令の條文に準據せずして濫りに禁錮せざる事、及び軍律を裁可せざる事等なり。されど口未だ乾かざるに約束を無視して徒に國會を停會し、最も熱心なる議員を禁錮して毫も憚る所なかりき。名士ジョン・エリオットは實に當時の罹災者にして、數年間入牢の後遂に没したり。かくて後チャアルスは勇猛剛毅の聞ある僧正ロウド (Laud) 及びサアトオマス・ウイントゥオスを閣臣に擧げて股肱となし、以て徐ろに自己の慾望を完遂せんとせり、後者は議會に於ける反對黨領袖の一人にしてまた權利請願案の起草者なりしも、自己の榮達を希ふ虛榮心に驅られ、遂に變節脱黨して王の爪牙となり、當時佛國に於けるリシエリュを英國に於て再演するに至れり、權勢漸く揚がるに及んでストラフォード伯に任ぜられぬ。

王は國會を開かざること十一年、未だ嘗て此の如き長時の休會はあらざりき。
 (一千六百二十九年四月) かく國會を無用視したる結果彼は經費の節約を勸めざる可らざると同時に何等の活動をも敢てする事能はざるに至れり。されば此の間專

らスペイン、フランス兩國と和議を結ばんことに汲々とし、今將に大陸に於て新舊二大教派の輸贏を決しつゝある一大争鬭を避けて傍觀したり。蓋しチャアルス一世の下に英國をしてよく卅年戦争の慘禍を免れしめたるは、一に新教化せしめたるエリザベスの偉業によれるなり。遮莫、威信を外に失へる王は内に於ても亦威勢を振ふ能はざりき。彼は密に信ずらく、無上權の堂奥中に自ら安んずるを得べしと。されど空なる信頼の中已に二黨の自己が宮庭内に發芽せんとする専制主義の支配に就いて争ひつゝありたり。皇后は實に幾多陰謀の中心なりき、閣臣は皇后の専横と奢靡とを憎惡せり。閭の内外の愛身に餘れるに、今又蕭牆の鬭を鎮和せざるべからざるに至りては、王の責任もまた重しといふべし。

腐敗紊亂を重ねたる當時の政府ほど暴虐壓制を恣にしたるは古來稀なり、例へば下院の可決せざる船税等の不正税法を制定し、或は朝廷に對して反對行爲ある者は何等の審問をも經ずして直に獄に投じ、而してストラフォード伯の統管にかゝる星院(Star chamber)によりて苛酷の嚴罰に所する等、横暴至らざるなく、更に宗教方面に於ては、ロオドは幕下と共に非國教徒を虐壓し、慘忍其の度を越ゆるものあり、

レエトン博士の如きは只一小冊子のために梟架に懸けられて無數の鞭打を受け、後兩耳を斫り落され、耳を劈かれ、火の如き熱鐵を以て顔面に烙印せらるゝに至れり。狀師ブライン(Pryne)、バストウ、大臣バルトン等又同一の刑に處せられ、其の他日々之に類する無慘の極刑に殉する者殆んど算なかりき。ブラインは梟架に上りて衆を警めて曰く、「キリスト教徒なる諸君よ、余若し單に自己の自由をのみ重視したらんには、今日此處に上げらるゝを要せざりしならん、而かも之れを失ふて願みず、また此の如き慘禍に耐ふる所以のものは、一に諸君の自由を希へばなり、願くは請ふ、よく之れを護れ、而して益々勇猛強忍克く神に信に、國に忠なれ、然らずんば汝と汝の子孫とは永久に奴隸の地に落とすと。ロウドの非國教徒に對する迫害かく嚴酷なりしにも拘はらず、清教徒は益々廣く流布弘通せられぬ。

當時アメリカに移住するもの非常に増加し、本國より此の地に輸出する貨物は實に佛貨二千五百万法を超過せり。一千六百廿七年清教徒はマサチューセツツ灣近傍に植民せる一千六百廿年の移住民の後を追うて本國を去れり、後三年を経てニユウ・ハムプシャイア及びメエンの植民地を建設せり。かく不平民の續々本國を

去る者多を加ふるに及びて政府は大に驚愕し、勅令を以て非國教徒の移住を禁じたり、恰も勅令發布の際八隻の船將に艤裝してアメリカに向けテエムス河を抜錨せんとしつゝありき、傳へいふクロムウェルも又此の時の乗客の一員なりきと。かくて彼は禁止令に従ふて移住を思ひ止りたれど、他は皆初志を翻さずして脱走し、一千六百三十五年より三十七年に至る間に於てコンネクチカット及びロオドアイランド等の植民地は建設せられぬ。

一千六百三十六年ハムブデンの審判は大に王及び政府の蒙を啓くに力ありたるものゝ如し、彼が納税拒絶に關する敗訴はいたく國民の同情を喚起し、かねて又政府反抗の氣勢を早めたるを以てなり。かくて國民擾々の聲は遂に政府をして其の政策全く國民の感情に背馳せるものなるを覺知せしめたり。されど頑冥固陋の閣臣等は頑として毫も志を移さず、却て時のアイルランド總督ストラフォードは常備軍を編成して國民を脅威し、ロウドは非國教徒を隈なく搜索して嚴罰に處し、殆んど一人をも餘さざらんとせり、かくて一時英國國民は全然宗教上の服従をなしたるが如き觀を呈せり。革命の夕僧正等は彼に報告して曰く、今や各所轄の

管區中一人の非教徒をも發見することなしと、其の狀恰かもルイ十四世の閣臣等がナント勅令廢止後王に報告して一人の新教徒の王土に残るものなしといへるに髣髴するものあり。かくロウドはプレスビテリアン教徒を強壓せる餘威をスコットランドに及ぼし、爰に舊教の儀式に類する一新儀範を強めんとせり。是に於てエヂンバラの人民先づ反抗し、次でプレスビテリアン教徒は政教改革の一大合同を作り、名づけてコヴェナントと稱し、與黨大に集り、倏時にして全スコットランドを味方となすに至れり。チャアルスは之れを壓服せんがため二万の兵を率ゐて親征せしも、軍費缺乏のため會戰することを得ずして遂にロウドの儀範廢弛を反徒に許しぬ(一千九百)。此の度の敗亡は王に蒙らしめたる大打撃なりき。チャアルスは軍費の供給を仰がんがために第四議會を召集したり、されど議會は國民の痛苦を訴へ、虐政の攻撃を事として毫も献金支出の可決を肯ぜず、却て要請すること、政治の自由を固く保證することとの三事を以てせり。是に於てストラフォードは王に、今日國民をして常識に復せしむるには唯棍棒あるのみと諫言し、議會は

解散せられたり。而して一方軍隊を見るに、是また蘇國の同胞に同情して戦はんことを欲せず、遂に分散し、ストラフォードをして餘儀なくヨオクまで引上げざるを得ざるに至らしめたり。王の困難は愈、窮迫せり、一旦劍を抜きたるも之れをして耻なからしめんには軍費の供給なきを如何せん、然れども今日まであらゆる課金税金を徴集し竭して今將た何によりてか得らるべき。竟にチャアルスは自己の罪過を責めて、第五國會に依頼せり。實に這回の國會こそマコウレイ卿の所謂幾多の過失と害毒ありしに關せず、世界の有ゆる立憲國民の等しく尊敬と感謝とを拂はざるべからざる千古無比の國會なりしなり。

長期會議

(一千六百四十九年)

十一年の久しき專制を恣にし來りたる今日遽かに國民の幫助を哀訴するに於てや、チャアルス一世は自ら從來の主義政策に一大矛盾を自白したるものといふべし。今や王は全く獨力英國を支配すること能はざるを自覺せり、而して國會は始めて自己の正道を踏むことを得たり。されど久しく苛酷なる抑壓に呻吟したる自由は何すれど復讐せずして止むべき、而かも之れに報ゆるや舊に倍するものあるは人世の常事なり。國會は王に代りて權力を

掌握し、租税の徴集處理は勿論、あらゆる行政權をすら押領せり、而して更らに特別法廷を廢し、議會開閉の定期を布告し、かくて最後に十一年間專制政治の化身となりたるストラフォード伯に令狀を發して拘引せり。審判は直に一國擧て注目する所となれり、蓋し名はストラフォード伯の審判なりと雖も、實は王室の輕重を秤量するものなればなり。義勇伶俐にして雄辯なる伯はかゝる危急に立つも儼然として毫も威容を頹さず、十七日間十三人の原告に對して彼の罪過を抗辯せり。罪過の多くは不義横暴の事柄にして、悉く事實によりて證明せられ、他は大抵憎惡の餘り棒大に誇張されたるものに過ぎざりき、要するに罪狀は一として、反逆を以て問ふべきものにあらずしなり。ストラフォードはかゝる忌はしき罪名を免れんとて謹慎謙讓の態度を以て自己の缺點短處を告白し、何等鄙しき譏詈の言を吐かずして告發者の所置は一ヶの僻見より出でたる不法の行爲なることを醇々として論破するに勗めたり。されど彼の辯護人は事實を直言することを禁ぜられ、且つ證人の喚問を請求したれども採容せられず、漸く辯論開始前三日に聽許せられしも、多くは遠くアイルランド居住者なるを以て如何とも詮術なかりき。彼は機會あ

る毎に判官に乞ふに自己の権利を承認せんことを以てし、縦令斥けらるゝも聊かも怨言を愬ふることなかりき。彼が頑強なる抗論のため宣告の期日を遅滞し、いたく相手の憤怒を買ふや、彼は簡短に答て曰く、こは我を攻撃する者の権利なると等しく己が生命を擁護する我が権利に屬せりと。

上院は彼を赦免せんと力めたれども下院は遂に國事犯人に科する民権喪失案 (Bill of attainder) を以て彼に擬したり。事茲に至りて彼を救済し得るものは決議の裁可を拒む只一人の王あるのみ。而かも王の優柔なる果斷の決意に出づること能はず、偶、ストラフォード最期の決意を認めたる悲壯の手翰を手にするに及びて、志氣愈々挫け、遂に多年自己を保佐し、擁護したる宰相の憤死を採許せり。ストラフォードは王の裁可を聞くに及びて天を仰ぎて嘆じて曰く、噫、王皇に信頼する勿れ、又人の子に信を置くと勿れ、彼等は何等の救をも齎らざるなり (Nolite confidere principibus et filiis hominum quia non est salus in illis) と。恁て司長は人民の騷擾を避けしめんがため強ゆるに乗車を以てしたれども、彼は斥けて徒歩するや護衛に先ち、恰も嘗て榮えける日、皇軍を督して、堂々征行に従ひたる姿勢を持したりき。應て刑場

に落むや、衆に告げて曰く、願くば王國の永久に榮えんことを、生は嘗て常に我の願ふ所なりき、今や我の祈る所は只死あるのみ。遮莫茲に群へる人々よ、乞ふ我いふ所を沈思熟慮せられよ、そも王國革新の卷頭は必ず血をもて染められざるべからざるものなるか、あらずか、歸路に就かるゝ道すがら深く思を凝されむことをと。かくて終に刑場の露と消えたり (一千六百四十七年五月二十七日)。ロウドはストラフォードと同時に投獄せられ、後四年刑せられぬ。

ストラフォード伯の處刑せらるゝや、全朝の有吏驚駭措く處を知らず、直に災害の身に及ばんことを恐れ、悉く行政權を上下兩院に交附したり。間もなくアイルランドに反徒起り、イギリスの新教徒を殺戮すること四萬人に及べり。皇后の舊教徒と計りし隠謀は人をして王もまた同類にあらざるなきかの疑を起さしめたり。チャアルスはアイルランド征討の軍資を國會に要求せしに、國會は御宇の當初より國民の辛酸苦痛に惱める事情を陳じて王を諫諍し、敢て出費を肯せず、却てスコットランド賠償金として金貨六十萬磅の支辨を可決し、同時に兵制改革案を提出して軍隊の編成并に將官の任免を商議する等、全く王の意志を容れず、是に於て王は

再び王権を回復せんため果斷政略即クウデタアを決行せんとし、躬ら國會に臨みて反對派の領袖を逮捕せんとせり。然れども國會は之れが引渡しを拒み、また人民は王の所行に對して激昂し、將に脅迫的態度に出でんとせしかば、王は兵力を用ゆることを得ずして遂にロンドンを去れり、時に一千六百四十二年、實に之れを内亂の發端となす。議會黨は首都、大市邑、港灣、艦隊等を所有して牙營となし、王は多數の貴族を率ゐて之れに對せり。而して北西の地方は概して王に與し、東南及びロンドン附近の人民は議會黨に與したり。

一千六百四十二年八月二十三日王は先づ軍をノッチングハムに起して西方に進み、行く／＼義勇兵を募り、始めてフォルセスタアにて議會軍と會しぬ、されど何等目ざましき會戰なくして道をロンドンに取りぬ。エッセックス伯は主軍を阻止せんとてエッジヒルに一大激戰をなせり(一千六百四十二年十月二十四日)。是に依りてチャアルスは首都進撃を停めてオックスフォードに退却し、爰に冬陣を張てオランダよりの援軍を待てり。此後次の會戰に國會軍屢利あらず、南北の市邑は大抵王軍の占むる所となり、されど議會軍は毫も挫折せず、敗跡に遭ふて志氣益振ひ、議員も亦兵杖を取り

て起ち、就中、ハンブデンは奴僕、朋友、近隣の人々を集めて歩兵隊を組織し、此の一隊は日ならずして訓練と勇氣とを以て有名なるものとなれり。當時漸く頭角を顯はしつゝありたる、オリヅア、クロムウエルは東部地方の郷士小地主等の青年を集めて選抜隊を組織せり。此の間王はグロウセスタア市を包圍攻撃せり、市は常に彼の行動を阻止し、王の最も累とせるものなり、籠城軍は頑強に名譽の抵抗をなし、爲に國會軍に軍備を整ふるの猶豫を與へたり。チャアルスはエッセックス附近に軍を退かしめ、已はニューベリに陣して伯のロンドンに至るべき道路を扼したり。國會軍は苦闘の後遂に王軍を潰走せしめ、加ふるに此の役に於て王軍の最も榮譽とせる名將フォル克蘭ドを斃しぬ。勝利の結果スコットランドと合同するの勢利を得せしめ、兩國民は莊重なる盟約を誓ひぬ。讎つて王軍を見るに、漸くハイランド人を起して手兵に加へ、同時にアイルランドの舊教徒と和して加盟せしめたり。國會黨は元來プレスビテリアンとインデペンデントとの相反せる黨派の合同に過ぎず、而して彼等は一且王の無上權の要求に反抗して合同したりしと雖も、政治上に於ては何等の一致するものなかりき。プレスビテリアン派は教會に於て

こそ階級權を廢除したれ、國家に於ては素より存置せんとを欲したるなり、インデペンデント派は全く之れに反し、貴族并に僧正（エписコプサイ）の監督權を排斥すると共に君主の統治權及び宗教上の最上權をも合せて拒否せんとしたりしなり。されど彼等は遂に人心の機微即ち自由と平等とを愛欲するの念に觸るゝに至りて契盟せるなり、かくて彼等の周圍には新教派より分離したる幾多の宗徒群り、中には材幹秀拔なるルウドロオ、ヴェン、ヘンゼル、グアリ、就中クロムウエルを其の頭首に戴けり。クロムウエルの人格は始めより衆の悦服する所となり、彼の燃ゆるが如き宗教的情熱、いかなる粗野の人をも友として平等に交はる親情、平調粗獷にして而かも肺肝を透すが如き不可思議の言語、凡庸なるが如く狂熱なるが如き態度、乃至有ゆる俗事を化して神役に奉仕せしむる大手腕等の配合によりてなされたる一偉人は幾何もなくして一々の有力なる司配權を得たり。蓋し不和は只に國會黨間にのみ存じたるにあらず、王黨に於ても已に同じくこれありたるなり。

一千六百四十四年の戦役は兩軍の主力を盡したる戦として特に著名なり、この役にルウバ、アト親王の指揮下にありし王軍はヨオクの附近マアストン、ムウアに

大敗して殆んど潰滅せり、國會軍のかゝる大成効を收め得たるは全くクロムウエルの天才と部下の將卒の比類なき勇敢とに依るものなり、されば彼の一隊は此の役によりて驍勇軍の稱を得たり。之れに反してフレズビテリアン派の將卒エッセック、ウォラア等の軍は南に戦ふて屢、利あらず、エッセック將軍は遂に敵の捕ふる所となれり。又王軍の勇將モントロス侯はアイルランドの兵を率ゐてスコットランドに上陸し、土地のハイランド人を起して軍に加へ、行々國會軍を撃破して兵威大に振へり、是等の聲援によりて志氣を恢復したるチャアルスは第三回ロンドン進撃の行動を取りしも、市民は幾何ならずして、王軍がクロムウエル、マンチェスター等のためニユッペリに撃破せられたる捷報に接せり。此の如くクロムウエルの着々として獲たる成効はインデペンデント派をしていよゝゝ勇猛大膽ならしめぬ、彼等は議會に於て少數なるに拘はらず、將官の任免を敢てして、専ら軍事を支配せり。フレズビテリアン派の大將エッセック伯は職を罷免せられ、代りてクロムウエルの帷幄フェアファックス後任に任ぜられたり。かくて軍隊の執權者たるインデペンデント派は着々として勝利を占め、一千六百四十五年最後のチャアルス軍をネスビイに

潰滅せしめたり。後王は再舉を計らんとて専ら外國の救援、特にアイルランドの救援を求めつゝありき。然るに時を同ふしてモントロス將軍はスコットランドのコベナント派に破られ、ルヴァット親王は戦はずしてプリストルを敵に委する等、王軍の窮窘愈々其の極に迫れり。チャアルスは落膽沮喪殆んど戦に困倦し、佛國首相の忠告によりてスコットランドの陣に投じぬ(四一十六頁)。然も忽にして身は全く俘虜の境遇に在ることを覺れり。翌年スコットランドは四十万磅を以て王を國會に引渡したり。

動亂の間プレスビテリアン黨とインデペンデント黨とは内訌を棄て、互に提携し合同せんと極力努むる所ありたれども、遂に其の効を見ず、凱戦の今日となりては愈々希望は水泡に屬したり、即ちプレスビテリアンは國會に依り、インデペンデントは軍隊に主となるに及びて争論は爆發しぬ。國會は干戈既に治定せるを名として軍隊を解散せんと欲せしが、之れを耳にせる軍人の激昂甚だしく、彼等は非議の請願を下院に提出せり、議會は斷乎として排斥しぬ、是に於てかクロムウェル腕力を以て倒すにあらざれば決して彼等は休止せざるべし」と、遂に彼は自ら宣言を

實行したり。

チャアルスは此の軋轢を利用して恢復を謀らんとし、兩黨は王に依りて各自の目的を達せんとし、互に欺を王に通じて味方に引入れんと競ひ、遂に軍隊の一分遣隊は國會の掌中に歸し居たりし王をホルムビーより奪へり。かくてクロムウェル及びインデペンデントの將軍等はチャアルスと商議を開きしも、王の眞摯ならざる、或日皇后に書を送りて曰く、請ふ、今將に爲さんとする讓歩を憂ふるとなかれ、時至るの日此等の惡漢を處置すべき方策已に我が方寸にあり、絹の襪紐に代ゆるに大麻のそれを以てせんのみと。これを會得したるクロムウェルは始めて王を滅さんと決意しぬ。王は私かに逃れてワイト島に潜めり、王の逃避は直に王黨に干戈を取らしむるの相圖となり、再び第二の内亂を醸せり。クロムウェルは再び自己の勢力を扶植すべき機會至れりとなし、欣然兵を起し、幕僚フェアファクスのロンドン附近に破るゝ時、彼はウエイルスに王黨を撃破せり。時恰もスコットランドのイギリスを侵すに遭ひ、彼また之れとプレストンに會して撃攘せり。

此の間プレスビテリアン黨はクロムウェルの外征に在るを機として勢力を復し、

王と新協商を開き、二三商議の後下院を通じて宣言すらく、王が今回の讓歩は平和の保證に十全の根底を供するものなりと。クロムウエルは直に王をウエイルスより追ひ、次で國會を廓清せり。あらゆるプレスビテリアン黨は一人も剩さず、國會外に逐斥せられて議員は僅に八十名に減じ、最早何等の聲のインデペンデント黨を攪すもの無きに至れり。聽て王の審判は始められ、チャアルスは高等法院に召喚せられたり、時の院長は大詩人ミルトンの甥ジョンブラッドショウにしてクロムウエル其の總監たり。王は彼等を判官と認むるとを拒否せしと雖も、遂に宣告を與へられ、オランダ大使の仲裁ありたるに關せず、終に刑せられぬ。王は刑場に臨むや泰然自若として毫も威嚴を損せず、自ら己の行爲の優柔輒弱なりしを悔みて曰く、皇天は此の期に蒞て朕が愆ふる處を禁じ給はん、嗚呼されどストラフォードの所刑を裁可したる朕が不正の判決は、今や他の不正なる判決によりて報らるゝに至れるをやと。

かゝる大事を敢てしたる此等政治上はた宗教上の狂熱者はこれによりて嘗に犯罪を犯したるのみならず、又過失をも合せ行ひたるものなると久からずして

明白となれり。されど彼等はかゝる大悲劇を演じて、從來缺點によりてのみ知られたる王皇の美德——人類をして敬愛の情を起さしむる性情、剛毅ある紳士の氣概、悔罪するキリスト教徒の忍辱柔和等——を諸の國民、有ゆる時代に顯彰せしむるの好機を與えたり。否、嘗に之れのみならず、實に彼等は、またその生涯を擧げて専ら英國の自由を迫害するに竭したる人をして遂に自由のために殉するの止を得ざるに至らしめたり。如何なる蠻勇を逞ふしたる政客と雖も、悲慘の最期を齎らすべき危機に瀕して、凜乎として威嚴を保維し、儼として死に對したる王の如く深く一般人心を感激せしめたるものは未だ嘗てあらざるなり。げに彼は法律によりて制定せられざる法術に於て辯論するとの無用なるを拒めり、兵力を以て暴を逞ふしたる蠻行に對しては之れを憲法に愆へたり、そも何の權ありてか最も尊敬すべき議員を下院より逐斥し、上院より立法權を奪取したるかを語れり、かくて最後に、啼泣噓歎して傍觀せる公衆に面して曰く「朕が今茲に孳々として抗辯に努むるは嘗に我が一身の爲のみならず、又實に汝等の爲なり」と。聽て世は彼の死と共に彼の久しき失政、あまたたび行へる不

信不義の行爲をば忘れ去り、却て彼か多年打破せんと勗めたる自由の制度は彼を追懐するの種となりぬ。蓋し諸の自由制度は彼と共に滅び、世は全く武力に壓倒されて沈黙せり、只此の間彼の名ありて辛ふして之れを擁護したればなり。此の日よりして君主に味方し、亡命の王家を援けんとするの反動は起れり、而かも反動は再び王座を過ぎし日の榮位に復するに至るまでは遂に止まざりき。

(マコウレイ)

イギリスの共和政治(九千六百四十一年)。

王の弑虐後幾何ならずしてインデペンデント黨は共和政體を宣言せり、スコットランドはこの千古比類なき弑虐に寒心して、はじめてスチュアート家の自國の出なるに覺醒し、自ら前非を悔みて此の宣言を否認し、同時に故王の儲チャアルス二世を奉じてスコットランド、イギリス、フランス及びアイルランドの君王に仰がんとせり。然るにチャアルスは彼等の己に賦與せんとする條件を快とせずして拒み、却てプレスビテリアンを嘲罵してオランダのヘエグに走り、後佛に歸れる母皇ヘンリエッタの許に臻り、是よりアイルランドの王黨に合せんことを企圖せり。

イギリスの國會はクロムウェルをアイルランド總督に任じ、同地の王黨征討を命じたり、彼は直に大軍を引率して征途に上れり。然るに王黨は之れに先ちて已にラスマインズの戦に於てダブリンに大に潰え、クロムウェルは勞せずして大捷の實を收め、直にドロヘダに進撃し、一舉して陥れ、その戍兵を塵殺せしのみならず難を寺院に避けたる一千有餘の住民をも虐殺せり。之れより一月の後ウエックスフォードに於てまた同一の慘事演ぜられ、住民となく兵士となく總て此の地に在りしものは婦女子に至るまで悲惨の最期を遂げたり、かかる残忍なる蠻行を目前に見たるアイルランド人は殆んど死物狂となりて反噬し來り、流石に猛きクロムウェルをして稍、鋒尖を鈍からしむるに至れり。かく赫々たる成功を收めつゝありし時に當りスコットランドの本國を襲はんとするものありしを以て、クロムウェルはアイルランドより召喚せられ、更にスコットランドに向はしめられたり。是より先ラスマインズの大敗によりチャアルスはアイルランド上陸の計畫を阻碍せられしと共にスコットランドのプレスビテリアン黨と再び商議を開始せざるを得ざるに至りたり。彼は之れに先ちてまづモントロス將軍を藉りて之れを征服せんことを欲

し、將軍は手兵千二百を率ゐてスコットランドに上陸しぬ。然るにハイランド人は彼と結ぶことを拒み、プレスビテリアンのためにコルピスデルに大敗を蒙り、捕へられて慘刑に處せられぬ。チャアルスは蒼皇としてモントロスと君臣の誓を絶ち、スコットランド大使の提言を全然採聽し、同時に舊教の自由行動を嚴禁する旨を宣誓し、直に彼等の捧呈したる王座に登るべくオランダを出立しぬ。恚くて王とプレスビテリアン黨との訂盟完成し、遂に勇敢なる王黨首領の死屍の上に調印を交換せり。時にアイルランドより此の地に向へるクロムウエルは考功の手兵一万六千を率ゐてトウ^キイド河を渡れり、蘇軍の大將ダビッド・レスリイは彼に倍せる優勢の兵力を有するに拘はらず一月間全く戦線を動さず、堅く陣地を守衛して英軍の倦疲を待たんとせり。されどプレスビテリアンの急燥なる、將軍の耐忍策を遅緩なりと做し、遂にレスリイをして餘儀なく攻勢に移らしめたり。兩軍ダンバアの附近に會戦す、インデペンデンド軍初めに利あらず、次でクロムウエルは騎兵を以て突撃奮闘して之れを潰敗せしめたり、此の役敵を屠ふること三千、捕虜一万、其の他大砲、武器、行李を鹵獲すること無算なりしといふ。エデンバラ并にリイス市は戦

はずして落ちぬ(一十六百五十年)。

大敗はチャアルスに取りて寧ろ捷利よりも大に益する所ありき。蓋し閣臣等の彼に對する戒飾嚴格の度を弛むると共に、王をしていよく油斷なく周密慎重ならしめられたればなり。彼は一方コヴェナントを殊愛するが如く假伴してプレスビテリアン黨を懐柔し、他面ハミルトンをキヤムベル以上に拔擢して王黨員を得たり。一世紀間スコットランドを兩分したる兩黨はかくしてチャアルス二世の旗幟下に合體せり、蓋し彼等の合體し得たるは、始めプレスビテリアン黨は王を以て眞實の士と信じ、自黨に對する彼の言行を以て全く衷心より來るものなりと誤信し、王黨は之れに反して王の心底全く反對の側にあることを察知したるを以てなり。王は一千六百五十一年一月一日スコオンに於て莊嚴なる戴冠式を行へり。彼は確實にスコットランドの君主となりたるを以て、茲に英國征服の企畫を起し、行く／＼同士を叫合して征途に就き、クロムウエルをば欺きて軍を南に出さしめ、ロンドンを指して直進せり。然るにかねて聲援を與ふる筈なりし英の王黨は此の機に際して未だ動かさず、僅かに二三千の王黨呼應したるのみなりしを以て、忽ちク

ロムウエルの追尾する所となり、ウォルセスタア附近に於て激戦數時、王軍遂に潰亂し、チャアルスは漸く身を以て逃れ市は英軍の占領に歸したり、時恰かもダンバア陥落の一周年祭にして、實に一千六百五十一年九月三日なり。此の如くしてスコットランドはアイルランドと共に克服せられたり。

共和政府は茲に全く内部の擾亂を戡定し、今や内憂漸く消散したるを以て餘威を外に張らんとし、會オランダと衝突し、遂に兩國干戈を交ゆるに至れり。端緒は一千六百五十一年發布の航海條例に職由す。これによれば何れの國の船舶といへども船籍所屬國の産物製品にあらざる荷物を搭載して英國港灣に寄港するとを得ず、同時に英國の船舶にあらずしてアフリカ、アジア、アメリカ等より物品を輸入することを禁じたるなり。條例發布以來英國の通商航海は頓に盛大を來し、航海の牧羊者 (The shepherds of seas) と謠はれたるオランダ航運業の獨占を奪ふに至るまで此の條例は存續したり(年一千八百五十一年一月一日)。オランダは當時航運業を以て唯一の事業とし、就中英國を顧客として、世界各國の物産を此處に齎らしたるを以て、條例は即て彼等に蒙らしむる一大打撃となり、彼等は自己の通商保護の爲に武裝し

遂に兩國開戦を布告せり。然るにイギリスの提督ブレエキは一千六百五十二年十月八日ライタアの艦隊をドオバア海峽の北に撃破し、後五ヶ月にして大洋の清掃を以て自任し、記號として檣頭に無數の箒木を掲げたる勇將トロムブ艦隊をチャネルに破れり。後兩軍互に得喪ありたれども、遂に一千六百五十四年オレンジ家のスチアアト家と親婚を結ぶに際し、其の脅威に懼れて兩共和國平和を訂結せり。

かゝる間に於て國會は徒に空論と虚權とを喋々して互に相鬪ぎ、まさに没落の足搔を早めつゝありき。國會は今や國民の代表にあらずして、全く一黨派の表現と化し了りぬ。此の時に方り、國民は缺陷多き共和の政治に倦み、秘密陰謀を企てたる敦厚誠實の人を戴きて強健なる政治を建てんことを願へり。實に此の本願を遂げしむるものは嘗て彼等のために王黨を倒して自由を救ひ、過激なるレベラア黨を屠りて秩序を保たしめたるオリヴァクROMウエルあるのみなり。彼は既に有力なる軍隊の尊信を得しに、今また此の如く民心の悦服を贏ち得たり。時に國會は彼の席にあらざるを機として將に停會の決議を通過せしめんとしたり。彼

は是に於て急遽議場に臨み、將に裁決せんとする瞬間その席より立ちぬ。開口まづ自ら抑制し、慇懃丁寧且つ溫和に國會のなしたる從來の行動を感謝し、やがて議論を進むるや調子頓に激昂し、諤々として彼等の不義不正を責め、中途失言を尤むる者あるに遭ふて彼は遂にその假面を脱し、赫として怒號すらく、汝等は今や方々に議會に非ず、議員にあらず、神は汝等を見離せりと。之れを聽ける議會は沸騰せり、彼は喧擾の中に一々議員を指名して、汝は放蕩者なり、汝は姦淫者なり、汝は耽酒漢のみ、去れ、行けと叱咤し、同時に床板つよく踏み鳴して合圖をなすや否や數多の兵士は一時にどつと鬨を排して場内に現はれ、悉く議員を起たしめて戶外に驅逐せり。議場人なきに及びてクロムウェルは悠然として戸を閉し、その鍵を衣囊に藏めて去れり、かくてその夕貸家札を議院の扉に貼らしめたり(一千六百五十三年四月三十日)。

彼は所謂神の名によりて召集したる國會を開けり。議員の多くは皆小心翼翼、正直一途の者のみにして到底議事を料理するの能なく、只員に備はる者のみなりき。此の議會も直に解散せられたり、時に軍隊も行政執務官の下風に立つを欲せざりしを以て、同官は權利を擧げてクロムウェルに委ね、かくして一千六百五十三年

十二月廿五日彼は、ロオドプロテクトル即ち護國大官てふ尊號を與へられたり。統治の大權全く彼に歸し、事實に於て彼はイギリスの帝玉となれり、而かもその帝王たるや普通正統の君主よりも更に一層強大なるものなり、蓋し彼は自己のためには死だも辭せざる勇敢精忠の兵士五万を有したればなり。

是より先彼は婿アイルトンにアイルランド征討の權を授けて鎮壓に向はしめ、殆んど何等の抵抗なくして直に其の四分の三を平服せしめたり(一千六百五十二年)。叛徒の首魁ランリカードは與黨オルモンド侯の離背より到底勢の非なるべきを察し、全軍を擧げて征討軍に降らんことを請ひしが、アイルトンの天逝後其の後に襲ひたる總督ルドロオ之を納れず、遂に兩軍激戦の後悉く叛黨を降服せしめ、一千六百五十二年の中頃全くアイルランドを鎮定してイリキスの支配下に置きたり。英軍の反徒を所置するや實に殘忍刻薄を極め、人をして悚然たらしめたるものありき。許多の貴族は一千六百四十年の虐殺に與りたりとの科を以て死刑に處せられ、四万餘の兵士官員は國外に放逐せられ、妻子は悉くアメリカに遠流せられたり。一方には殺戮によりて人口を減じ、他方には難をアメリカに避けて移住する

人民愈々夥多となれるに拘はらず當時舊教徒の人口は實に一に對する八の割合を以て新教徒に超過せりと。而して大地主は其の土地財産を擧げて沒收せられ、動産と不動産とを合して漸く十磅を超えざる者のみ辛くも難を免れたり。加ふるにアイルランド全國民は一千六百五十四年五月一日までにコンノオトの地に移住すべきことを命ぜられ、期日を過すものは何人と雖も殺害すべしとの殘虐極まる布告を發布せり。

アイルランドの征服と同時にスコットランドも鎮壓に歸し、國會とクロムウェルとは其の命令をモンクに授けて勵行せしめたり。此地はアイルランドの如き甚しき虐壓を免れたるのみならず、人民は自己の法律、信仰と共に國家をすら保持することを得たり。蓋し之れを能くしたる所以のものは當時國會とクロムウェルは共に英蘇兩國人民を合せて大ブリテンの下に一統せんことを企圖し、今や漸く其の完成を告げんとするに當つて國會先づ顛覆し、次でクロムウェルまた之れを放棄せしによるなり。

かくて半世紀の間英國の聲威は隆々として歐洲外交界を震撼し、列國をして專

ら英の鼻息を窺はしむるに至れり。實にクロムウェルは此の期間歐洲の諸帝王と對等の交際をなし、スペインは我が同盟に加はらんとを切望し、フランスまた同じく願望して成就したり、オランダはブレエキ提督の爲に其の艦隊を海峽に碎破せられて、英國旗の優勝權を承認すると同時に戰費を賠償し、提督は更に戰勝艦隊を遠く地中海に進めてバアパリイ聯邦を懲伐し、またスペインよりジャマイカを奪取し、其の他ダンキルクを併有する等殆んど抵抗するもの破れざるなきの戰捷を納め、ために英をして世界の最強國たるの觀を呈せしめたり。茲に於てクロムウェルはスチユアト家の一旦放棄したるエリザベスの遺業を起して新教大同盟を造り、自らその保護者を以て任じ、遂に舊教國を離散瓦解せしめたる新教教會をして彼を其の保護者と宣言せしめたり。かくて各地の舊教徒は彼の名をだに聽くも猶ほ恐怖の感を起し、ロオマ法王の如きも勢止むを得ず、領域の各國王に令して溫和謙讓ならむとを諭示するに至れり。實にイギリスの強盛なる此の如きは未曾であらざりき。されど此の如き榮華も唯これ五十年の夢にして、やがて半世紀の後再び可憐の状態に陥りぬ。遮莫英國國民の感情に投じて欸心を邀合したる政

府は内治外交大に其の宜しきを得、國家を危きに陥れずして國威を外に張り、威力を以て内に秩序を保持し、かくて國の内外に畏敬せられ、嘆賞せられ、歸服せられたり、而かも其の根蒂は甚だ固からざりき。舊黨は何等の希望何等の活動を敢てせざりしも、猶壓倒の下に餘命を保てり、尤もクロムウルの潛位より五年間は王黨或は共和黨の陰謀背叛を企て、政府を威嚇し、彼を危くしたりしと雖も、皆直に壓倒せられ、一も成効したるものなかりき。されば國民もまた此等の暴舉に就て憂懼を起すことなく、全く安じて平和を守衛せり。されど彼等は之れと同時に、かかる權力の常に此く勝利あり、且つ永久に存續するものなりとは毫も信ぜざりき。げにクロムウルの勢位赫々たる時にすら、輿論は彼を目して抵抗すべからざる一時の君主にして、比敵者なしと雖も、亦未來なき主公なりとせり、遂に千六百五十八年九月三日五十五歳を一期として此の偉人は逝けり。

クロムウルの死後息リチャード父の位を襲へり。されど彼は世を治むるの才幹なく、また其の志をも有せざりき。是に於て各黨再び興起し、リチャードは數ヶ月にして位を辭しぬ(一千六百六十一年)。英國は混沌濛昧全く無政府の態を呈し、國會と

軍隊とは互に權力を争へり。げにクロムウルは幾多の副官を遺したるも直ちに彼に代りて遺業を繼承すべき巨人を遺さざりき。されば第二位に在つては優秀なる彼等も、畢に最高の位置を占むること能はず。茲にオランダ戦争に驍名を轟かしたる提督ブレエクの同僚にしてスコットランドの太守たるジョオチ、モンクは名門より出て、此等儕輩の間に傑出せる人なりしが、私に此等の黨派を倒して王政を復古せんと謀れり。彼は先づ第一着手としてクロムウルの死後組織されたる小國會を解散し、而して全く國會に經驗なく最も御し易き新議員を以て代へたり。當時國民は全く歸趨する所に迷ひ、眞正の共和政治は不可能なるにはあらざるかを疑ひたれど、又敢て名稱を廢棄するの果斷をも成し得ざりき。さればかゝる危機に際して彼等に最も必要なるものは忍耐以て時の推移を俟つことにあり。然るに共和黨員は自己の將來を危惧し、且つ領袖の多く迫害さるゝを見るに及び、遂に忍耐力を捨て、武器を取りしも、一般の民心は全く紛擾を厭ひ、而して安易を得るの道は只前政に復歸するにありと思へり。さればにや彼等は忽ちにして破碎せられ、王黨も民黨も悉くこの希望下に集合して、只一回の合義によりて世襲君主

政を再建せり、かくてチャアルス、ヌチュアアトは無條件にて故國に召還せられぬ
(一千六百六十年)。かゝる輕舉は直に第二革命の先驅をなせり、蓋し彼等が提供したる
 問題は未だ一も解決せられず、猶况んや復古てふ大事はまた直に他の革命を喚起
 せずんば措がざるに於てをや。

第四章 十七世紀中葉のフランス(一千六百四十三年— 一千六百六十年)

附 一千六百六十一年のエウロッパ

マザリンとフロンド黨。ルイ十三世死後のフランスは、嘗てヘンリー四
 世の死後に於けるが如く、幼君冊立より來りたる弊害を忍ばざるべからざりき。
 ルイ十四世の登極するや、僅に五歳の幼童にして王座の後に簾を前れて政を聽け
 るは、皇母アウストリアのアアンなり、ルイ十三世死期に臨み、評議會を以て彼女の
 權力を控制すべしとの令旨を遺したるに、國會は之れを無視して大權を全く彼女
 に委托せり。而して皇后はカアディナル・マザリンを擧げて万機を關り白せしめ
 たり。

マザリンは一千六百二年イタリーの舊家に生れ、三十四年ロオマ法王の聖使と
 してフランスに使用するに及び、偶、時の攝政リシュリューの知る所となり、拔擢せられて
 後樞要の地位を占むるに至れり。皇后は一君主の利害の外全くフランスの休戚
 に關しては何等顧みる所なきこの一外人を深く信頼し、彼の政策を贊して驚御に
 一任せり。

リシュリューの没後フランスは其の政策を保維持續せんとして一大反抗を招き、た
 めに政府は幾多の敵を作り、數多の犠牲を出したり。而かも其の起るや猛烈にし
 て、從來監禁せられたる囚徒は解放せられ、放逐せられ、國外に流離せる亡命客は直
 に召還されて宮庭に入り、さすがのアアン女皇も何事も彼等が成す儘に任したる
 にはあらぬかを疑はしむ、蓋し年金、特權より位階、叙勳等請に應じて與へられ、彼等
 をして女皇の如き寛仁慈惠にまします君主はあらじとまでに思はしめられたればな
 り。首領ベスアン、ラ・シャートル(La Châtre)就中無能を以て知られたるポチアルの如
 きすら威權一時は雙ぶ者なき觀を呈せり。されど自ら尊しとする、自分免許の人
 にといふ稱呼は爾來永久に彼等に蒙らしむるの別名となれり。此の時に際しマ

ザリンは辣腕を以て易々として此等暴徒を平げ、ポウフォト侯をバスチイル獄に投じ、ポウヴェエのピシヨップを其の領地に放還し、セヴァルス(Chevrouse)の女公を本國に送還せり。是に於て女皇はマザリンを擧げて宰相となせり。

斯してリシエリュウの政策は持續せられ、彼の理想は凱歌を奏し、彼が建設したる絶對權は廢滅を免れ、マザリンの事業は雷之れを繼行するにありき。蓋し行政上に專制主義を謳歌せんとするには必ず一般國民の利害を覈査し、諱察して、之れに忠實ならざるべからず、然るにマザリンは一々の未熟なるリシエリュウに過ぎざりき。彼は外に向て樽俎折衝の大才を有したれど、國の財政を料理するに至りては全く無頓着否寧ろ許すべからざる不義不正を行ふて顧みる處なかりき。彼は平然官金私消を看過せしのみか、自ら其の率先者となれり、是に於てか國政の弛解財政の紊亂甚だしく、將に國家をして破産の危險に瀕せしめんとせり。大藏大臣デムリイまた彼に類して如何なる方策手段をも行ふて憚らず、一千五百四十八年發布の建築制限令を復興して地主を苦しめ、税率改正令を發布して食料品及び他の商品に對する關稅を増加して一般人民を苦しめたり。時恰もネエブルスに於て

漁夫マサッショオ事件の最中なりしかば、パリ市民は直に之れを喧傳して彼等またネエブルス市民の例に倣はんとを決し、市民は新稅の納入を拒否し、パリ議會はその代辯者となれり。かくて議會と朝廷とは屢衝突し、論難したる後、二ヶ年間を限りて同稅法を施行する事に議決し、漸く事落着せり。然るに國家の財政は益窮乏に陥り、剩さへアウストリア家との戰爭に資する軍費を供給せざるべからず、是に於てマザリンは四ヶ年間の俸給を債券として發行すべきことを各省に要請し、同時に議會を除外せんとせり、是に於て議員等は己等を侮辱するものと倣し、各省と共に同一の責任あることを言明して有名なる合同法案を議決せり。The Grand council The Court of Aids, The Court of Accounts 及び議會は各一人の委員を選定し、而して四人の委員はセントルイの評議室に集合して、茲に一商議會を組織し、要求件を二十七ヶ條に認めて攝政皇后の手元まで奉呈したり。二十七ヶ條の請願は全く一ヶ革命の旨意を含めるものなりき、提案によれば、議會は總ての法令を論議し、裁定するの權あると同時に、不正不義の官吏を告訴するの權を有すと、又王臣はいかなる人と雖も之れを審問せずして廿四時間以上囚監すべからずと。是によりて之れを觀る

に、正しく専制君主政に代ゆるに二百の官吏よりなる寡頭政治によりて制限せられたる君主政を以てせんとしたるものなり。蓋しパリ議會は名の同一なるに欺かれて自身また英國議會の役を演じ得しと誤想したるなり。

時にアンギアン公はロンに大捷を博しつゝありき、マザリン之れに力を得て一方ノオトルダムに *Le Duna* の頌歌されつゝある間に政府に反抗せる反對黨の知名議員三名を逮捕せり、人民之れを知るや大に激昂し、直に武器を取り、三時間を過ぎざるに二百の堡壘築造せられ、十萬の戦士王宮の周圍を取捲きてブルウセルを解放せんことを迫れり、同時に議會は又一隊となりて皇后に薄り、禁錮者三人の引渡を強請せり、而かも遂に何等の得る處なかりき。アアン女皇は最期に至るまで彼等と争ひ、かの請願を飽まで裁許せざらんと欲したれども、マザリン及イギリス皇后の切願、忠言再三なるに及び止むを得ずし、ばし彼等の意に従ふ事とし、やがて叛徒は解散し、市は全く靜穩常の如くなれり。

然るに女皇はかゝる讓歩を以て極めて意氣地なき懦弱の所爲と做し、憤懣抑え難く、遂に皇子とマザリンとを従へて、パリを出で、セント・セルマアンに蒙塵せり。

そはアアン皇后の甚だしく強壓されたることセントルイ評議會の二十七條請願に承認せしめられたる時の如きはあらざりき。此の批准の日は恰もウエストリアア平和條約に調印を終りたると同日にして、一千六百四十八年十月二十四日なり。議會は恰も全立法權を附與せられたるか如くに思惟し、自ら國民選舉の代表者たる英國議會議員に等しと信じたり。

國會の威勢盛なる間に宰相マザリンは私に勢力を畜くて時の至るを待ち、外國との戦争漸く終るに及び、所謂王權を暗殺したる王の臣下の徒黨を撲滅せんと計りぬ。一千六百四十九年一月六日アアン女皇は皇子を伴ひて再びパリを去り、軍隊を召集し、反徒誅戮の師を起しぬ。一方議會には大貴族等其の麾下に參し、就中有名なるは大コンド公の兄弟なるコンチ公、義兄弟なるロングヴル公、ブウヨン公、ロジェフウコウル及びチュウレン等なりき。

人民は始めより闘争を好まず、速に之れが終末を告げんとを欲せり、偶、貴族等の意志唯國家を覆すにあるの事實を認むるに及び、益、志を固ふし、之れと同時に議會また貴族等のスペインと和を講じたるを知るに及び、て隱謀を覺り、遂にマッシュウモ

オムに命じてマザリンと和を講ぜしめぬ、かくて朝廷は屢、躊躇の後パリに入れり
(一千六百四十四年四月)。

されど平和は遂に永く保持されざりき、コンド公は嘗て自己の保護したる政府
 を管領せんと志望を懷き、女皇宰相に屢要請して困憊せしめ、以て一方朝廷と疎
 隔し、同時にフロンド黨中の舊員を疎外して憤恚せしめ、自ら國政を見んとしたる
 市民を嘲罵して怒らしめ、他方には虚榮心に驅られたる血氣の少壯貴族等を懐柔
 して麾下を聚め、徐ろに謀叛を圖れり。かく輿望を疎外し、専ら戰によりて克服せ
 んどしたる猛將に對し、人心を收攬して自己の勢力下に合同せしめんことマザリ
 ンに取りては極めて易々たるものなりき。彼は直に公及び兄弟コンチ公、義兄弟
 ロングヴィルをロオブルに逮捕せり(一千六百五十年一月)。逮捕の報各地に傳はるや、反徒各
 地に蜂起せしも直に鎮壓せられ、ポルドオ降服し、スペイン軍を率ゐてシヤンペイ
 ンに侵撃したるチュウレン將軍はブラスリンに掩撃せられたり。是に於てマザリ
 ンは自ら勝利者なりと早信し、ゴンドのパウル公を女皇の味方たらしめんがため、
 約するにカナディナルの法冠を授けんことを以てせり。されど後之れを授けざり

ければ、コンド公はコンド黨に加盟して議會の勢威を回復し、人心を鼎沸せしめたりしが、一時必要上結黨したるこの二ヶのフロンド黨は皇后に迫りて遂にコンド公等を引渡さしめ、同時に宰相マザリンを國外に放逐せしめたり。かくてマザリンはコロンに避退したれども、猶ほ實際に於て遠く女皇后とフランスとを支配せりき。

然るにコンド公は新合同と永く和親を保つ能はざりき、彼謂らく女皇は我を十
 三ヶ月の間俘囚となしたる償贖として必ずや授くるに全權を以てすべしと、而かも希望は全く空に歸し、實權は放逐中のマザリンに猶ほ存したり、是を以て彼は大に憤恚を燃し、遂に斷然武力に愬えて之れを獲得し、出來得べくんば玉座をも併せ掌握せんと決意し、勿々として南に出てギイアン(Guyenne)を唆かして先づ反せしめ、而して彼の友をしてパリ附近に戰を醸さしめ、其の間自身スペインと親交を結ばんことを努めたり。是に於てマザリンパリに還り(一千六百五十二年十二月)當時王黨に歸順したるチュウレンを以て征討軍の總督に命じたり。チュウレンはコンド軍の不意を襲撃せんとして軍をロアアに進めたれども却て撃退せられ漸くブリアアルに

遁れぬ(二六五)朝廷大に驚駭し、ブルジョイに走らんと謀れり。されどチュウレン再
 ひ英氣を回復し、四千の兵を以て一萬二千の兵に當り、遂に敵の進軍を阻碍せり。
 女皇后の喜悅禁する能はず、流涕將軍に謝して曰く、げに爾は既倒の中より國家を
 救ひぬ、爾なかりせば各都邑の門戸は王のために鎖されしならんと。後兩軍パリ
 に入らんとするに際し、パリ市民は何れにも加擔せず、自ら戈を取て兩軍の入市を
 峻拒せり。かゝれば激戰となりて勝敗久しく決せず、遂にフロント黨の軍包圍せ
 られて將に掩撃せられんとする瞬間、オルレアンのガストンの女マデモアセル俄
 然門を開きてコンドを迎へ、バスチイルの巨砲を以て王軍を砲撃せしめたり、チュウ
 レン周章度を失ふて退却しぬ。コンドのバリに入るや、マザリン黨を虐殺し、悲惨
 其の極に達し、折角の彼が光榮も汚血に汚されて永くパリに停ることを得ず、去て
 フランダアに退き、スペイン軍に投ずるに至れり。

マザリンは王の民望を回復せんため自ら再びパリを去れり(八月)是に於て議會
 と市民とは市の靜穩に歸したるを以て(十一月)コンドの去れる三日後女皇后に奏請
 して還御を乞ひぬ。かくて高官の多くは罷免せられ、或は獄に投ぜらるゝあり、カ

アディナルレツツはヴァンセヌに幽閉せられ、コンド公は叛逆の罪に刑せられ、ガストン
 はプロアに放逐せられたり。後三ヶ月を経てマザリンは執權の全權を掌握して
 パリに還れり(一千六百五十二年二月)。これをフロント黨の最期なりき。此の如く逆徒に世
 を狭められ、王威萎微して光明を没し、反徒の襲はんことを恐れては女皇后と共に朝
 に走り夕に遁れたる流離落魄の感懷は深くルイ十四世の心肝に徹して遂に湮滅
 するの期なからしめき、應てこの憂愁は彼を驅つて極端なる專制政治を執行せし
 むるの素となりぬ。王のバリに還るや、直に主權の確立を布告して議會の專擅と
 僭冒を嚴禁し、次て國政の總務に就いて議會の承認を停め、且つ財政の監督權を褫
 奪せり。

スペインとの戦争及びピレニイ條約(一千九百一十五年)。フロントの亂鎮定

に歸したれどスペインとの戦は猶ほ未だ終らず、國內かく紛擾せるの間外に向て
 はダンカルク、バアセロナ等を略取したり。コンド公はパリを去りて先ブロン
 平野より程遠からぬアルラスに籠城せるレオポルド大公爵に合して結びたるも、
 チュウレンは襲ふて遂に彼をして背進せしめたり(一千九百一十五年八月廿五日)。後二ケ年間

は只邊疆要塞の包圍ありたるのみにして、兩將互に決戦を交ゆる事なかりき。

前相リシエリウが宗教上に果斷決行の資を有したるが如く、マザリンは勤王の上にて之れを有せり。リシエリウはアウストリアに對して新教徒と結び、彼マザリンはクロムウェルと結びてスペインに對せり、さればスペインは兩相のために一度は佛と合し、再び之れと離れ、僅少の間に離合を異にせり。かくてイギリスのジャメイカを取りカデイズの艦船を撃破しつゝあるの間、フランスはフランダアの鍵鎗ともいふべきダンカルクを海陸より包圍攻撃せり、よりてスペイン救援軍は海に沿ふて救助に進軍せしも、遂にチュアレンに撃退せられ、(一千六百五十八年六月十四日)ダンカルク全くフランスの有に歸しぬ、されど後條約によりて市は英國の手に落ちたり。

スペインはかゝる英佛兩軍の強壓に絶えず、遂に媾和を乞ひ、兩國大使はパリに協商を開きし後、マザリン及びドン・ルイ・ド・ハロとフランス、スペインの境域を限れる山脈の麓なるピダツア河の一小島に會し、茲に媾和條約成立し、一千六百五十九年十一月三日調印を了りたり、之れ即ちピレニイス條約なり。此の條約によりてフランスはリシエリウの嘗て降服したるアルトア、サルダヌ、ルウシロン等を確實

に收め、ロオレエンをば總ての武備を撤回すべき條件を以て領主チャアルス四世に交付したり、されど領主の肯ぜざるにより之れをも再び併せぬ。後コンド公は歸國を許されて舊地位に復し、ルイ十四世はスペイン王の長女マリア・テレサと婚儀を結び、テレサは五十萬クラオンの持參金を携へてルイに嫁し、同時に父王の全相續權を放棄したり。此の結婚は殆んど十五年の久しきマザリンの日夜考慮を凝らしたるものなりき、實に一千六百四十五年ウエストリアの會合に於て、彼はルイ王とテレサとの婚儀調ふたる曉には吾人は王を推してスペイン王位に上すことを得べし、假令皇女いかに拒否するも毫も意とするに足らず、只これを阻むものは彼の皇弟あるのみなれば、希望の實現は敢て遠きにあらざるべしと云ひしにても知らる。マザリンは一千六百五十九年最も巧妙なる策を以て皇女の棄權を全く法律上無効ならしめ、かねて又スペインの漠大なる持參金全部を拂ひ能はざるを知るを以て、殊更支拂を確保せしめ、將來ボルボン家か要求をなすに對して一ケの口實を提供せしむるの基を基りぬ。マザリンは同時にポルトガルを放棄したり、よりてポルトガルはフランスの救護を去つてイギリスに赴きぬ。

マザリンはかく一方に佛西の合同を企つるとともに、スペイン王フェルナンド三世の死後(一七六〇年)ルイ王を以て皇帝となさんと謀りたれども、レオポルド一世即位するに及びて企圖遂に成らざりき、されど彼は直にライオン同盟(一七六〇年)を締結し、プロシア公、スウイデン、デนมアルク王等と結びてウエストファリア條約を保護し、此等諸王をフランスの保護下に立たしめたり。ライオン同盟はフランスの勢位を強大ならしむるに與て大に力あらしめたり、こは後年ナポレオンによりて再興せられ、且の大に範域を擴張せられたるものなり。

マザリンは外に向て着々成效を博し、列強の間に介して大に國威を宣揚せしめたれども、内政の治蹟に至ては到底同日に論すべからず、彼は全く農商業を忽諸に附して省みず、海軍の衰頹を顧慮せず、就中財政策の拙なる彼の晩年には國庫實に二億五千萬法の巨債を負へり、國庫此の如くなるにも拘はらず、彼の富は實に其の額の半に達したりと。されど彼は之れを徒に空費せず、多分は悉く文藝の保護獎勵に使用せり。哲學家デカアトはオランダに退隱中彼より年金を受け、史家メズレニエは四千フランを給せられ、其の他、巨費を投じて壯大なる圖書館を建設し、或は

スペイン、イタリイ、セルマン及びフランダア四國民大學設立の基本金として遺産の内四十萬クラウンを寄贈する等、文藝のために盡したる處甚だ少なからず、猶ほ彼は美術の趣味殊に深くして、イタリイより夥多の繪畫、彫刻、骨董品等を齎らし、同時に俳優工匠等を招聘し、始めてオペラをフランスに輸入せしめたり。かくて彼は一千六百六十一年三月九日享年五十九歳を以てゲンセンズに病歿せり。

一千六百六十一年に於けるエウロツバの形勢。 ウエストファリア

及びピレニイス條約はフランスをして全歐の覇權を握らしむるに至りたれど、此に至るの間内部の紛亂は王權の行使を控制し、徒らに國の財源を涸渴せしめたり。然れども一旦國內に横はれる障礙除去せられんか、道は直に外に向つて坦々として開かるべきなり。げにやルイ十四世は専らリシエリユ、マザリンの事業を繼いで之れが完成を計り、また賢相良將を擧げて内治外征に隆々として威勢を耀かし、加ふるに隣邦貧弱なるが故に頓に彼の權勢を全歐に強大ならしむるに至りたり。如上の事實を了解すべき一法として少しく當時のエウロツバの形勢を略述すべし。

イギリスは一千六百六十年ヌチアアト家の再興によりて小康を得たるも、數年

ならずして再び紛亂の街となり、王の專制的傾向と國民が自由を欲するの志望とは飽までも相容れず、事實に於て神聖權派と自由派とに兩分し、加ふるにチャアルス二世は自己の無上權を擁護せんが爲に國家の名譽と利益とを毀損して憚らざりしこと當に一再ならざりき。例へば五百萬フランを以てダンカルクをフランスに賣れるが如き、將た年金を得んがためにルイ十四世に自己を賣れるが如き、最も醜とする所なり。また一千六百五十二年發布したる航海條令は從來オランダの獨占したる通商業を奪ひて之れに代らんとするの意を示したるものなれば爾後オランダの激昂する處となれり。然れどもスコットランドは嘗てゼエムスの登極に際してイギリスと合せるを、更にアイルランドを加へて大ブリテン及びアイルランド合王國を建立せるは此の時なり。

七ヶの聯邦より成れるオランダ共和國は今や繁榮の頂點に達したり。一千六百四十八年アウストリア家は遂に其の獨立を承認し、同時にブラバント、ルキセンブルグ、フランデア等の諸地方を割讓し、又 Scheldt, Meuse, ライン、及びエム等の諸河口を領有して儼然勢力を此の地に振へり。インド地方には専らポルトガル人を

一移植せしめて已に五ヶの政廳をすら設立し、ジャバを以て主廳とせり。又アフリカ南端の喜望峯は歐洲よりインドに至る沿道中唯一の寄港地として繁華他港を凌げり。自ら海上の主宰者を以て任じたる彼等は、他方に於て未知の地を發見して、其の範域を擴め、一千六百十五年には、レマリア海峽 (Lemaire) を發見し、久しく諸國民の相争ひしアウストリアの發見も畢竟當時に於けるオランダ人によりてなれるものゝ如し。一千六百〇五年より四十二年に至る間、其の沿岸に數多の探險隊を出し、就中尤も有力なるタスマン隊は、ニュージーランド及び數多の未見地を發見せり。實に當時造船術に於ては如何なる邦國もオランダと比肩すべきものなく、船賃及び水夫賃銀の低廉なる、他に競争し得るものあらず、要するに彼等をして是の如き繁榮を來たらしめたる最大要素は實にオランダ國民の特性なる活動の精神、秩序と勤儉との力に歸せざるべからず。されど一朝にして得たる強盛の地盤、餘りに狹隘なりしたため、遂に永く確守する事能はざりき。オランダは曠漠たる領土を支配するには餘りに領域を細別し、又餘りに人口少かりしなり。オランダの獨立するや、もとフランスの協力に依れるなり、而かも今や同盟國は勢力益々強

大となり、オランダを棄て、衰頹の域にあるスペインを選べり、是に於てオランダはルイ王に反抗せんとして、フランスを敵とせる合同國を援けたり。然るにスペイン領ネザアランドは將に頼むべからず、而してルイ王はオランダの中心を窺ひ、はた側面を撃んとするの概を示し、危機漸く迫れり。然るに同盟國たる英國はオランダに取りてはフランスよりも更に禍あるものとなれり、イギリスの長期議會は航海條令を發布してまづオランダの衰滅を計り、クロムウェルは強て英旗の優勝なるを承認せしめたること等あり。

スペインは嘗て一千六百〇九年二十萬のムウア族を追放してより財源殆んど渴れ、加ふるに幾多の敗跡によりて困憊極點に達したり。もとより全領土を保有するを得たれども、毫も利を齎らさず、却て重荷となりて煩惱の種子となれり。而して近年ルウシロン、アルトア及びポルトガルを失ひ、當時満足に保有せる唯アマリカの植民地あるのみにして、終始本國との往來ありたり。されど其の農業は荒るゝがまゝに顧られず、商工業全く杜塞して殆んど屏息の有様なるを以て折角本國に往來する植民地の船舶も本國より持歸る物料とはあらず。スペイン王フイ

リップ五世は猶ほ未だ位に在り、而かも廿年間オリブレズ公補佐の下に在位したるのみ。かゝる凋落の時に於てスペインの誇りとするものは唯詩人、美術家の未だ現存したる一事のみ。されど此等天才中ロオペデヴェガ (Lope de Vega)、ベラスケス已に故人となり、カルデロン、ムウリイロ等また將に過去の人たらんとす。而してコルネイエ、デガアト、パスカル、乃至プウザン等によりて文藝の最盛期を開きつゝ、あるフランスは已に實權を奪取したるが如く、スペイン文運の光榮をも併せて略取せんとしつゝありたり。

スペインの衰頹に向ふやポルトガルもまた運命を共にせり、葡國は敵手たるオランダのために植民地及び通商を劫掠せられ、ピレニイス條約によりてフランスに放棄せられ、寄邊なきまゝ、イギリスを望みてポルボン家のチャアルス五世即位せしが、果して直に其の腕に絶るに至れり。スペインに従屬せるイタリヤのネエブルス、ミラン、シシリヤ、サルヂニア、エルバ等の島嶼又同じく衰退せり。嘗て前世紀中半島を震蕩したる舊教回復の活動も今は全く音響をだに傳へず、僧正連は今や全く浮世の野心にかられて再び天上の光明を思はず、さればとて嘗て暴徒の蜂

起したるカリグリアノよりポオ河に至る管領地の平和に就いて敢て佳良の擔保をも得る能はずして止みぬ。リシエリュウ、マザリン共に屢、イタリアの諸公を煽動してスペインに對する同盟を組成せしめんとせしが其の効なく、フィリップ四世庸弱ながらも猶ほ此の間に介して是等諸侯を駕御し、一千六百四十七年シシリイの反徒を制歴し、また同年ネエブルスに起りたるコッサチウ等の亂を鎮定せり。さればマザリンの力によりてなし得たる事業は、グアセルリイをサヴォイ公に割讓せしめ、モデナ公をスペインと和せしめ、またネエブルス王國の國事犯罪者に大赦令を行はしめたる等あり。されどマザリンの手腕によりて、よし半島よりスペインの勢力を驅逐し、かつ彼がセルマンに成したると同一の合同を是等諸公の間に結ばしむること能はざりしとは雖も、少くとも彼がイタリアに於ける總ての事件に干涉し、必要に際してはフランスは直にスペインに對する同盟を此の國に作成し、之れに對する行動の手段を茲に發見することを得たりしは事實なり。

かかる太平のため二公は各、特殊の方面に大なる利益を獲ることを得たり、即ちサヴォイ公チャアルス・エマムヌエル二世は専ら精銳の軍隊を編成するに努め、タス

カニイ公フェルヂナンド二世は窮理思索に全力を竭したために十七世紀に於けるフロレンスは科學の淵藪となれり。ガリレオの高足として、また晴雨計の發明者たるトリセリイは恰も此の時代に物故し(一千六百四十七年)幾何學者ヴィヴィアニイは將に是より大名を博せんとせり、而して有名なる *Accademia del Cimento* は當時代に創設せられたるなり。

ヴェニスには半島の東北を領してイタリアの騷擾には係らざりき、蓋し彼が利害は全く爰にあらずしてアアキペラゴ及びアドリア海面に存したればなり、さればトルコとの衝突屢あり、一千六百四十四年之れと開戦せり、役中カンディアの包圍尤も有名なり。これによりてヴェニスは猶ほ愛國心、勇氣、忍耐を失はざる事を示せり。此の間、ゼノアに就ては録すべきものなし、蓋しレヴントの全商業は全然ヴェニスの掌裡に歸したれば、ゼノアは遠くスペイン、アフリカの海岸に出でて通商を壟斷したるなり。三十年戦争はセルマンをして全く衰亡の地に失墜せしめ、爾後何等の威力なきものとなれり。皇帝に代りて現はれたる多數の小諸侯等は朝廷を維持し大使を派遣するがため無益なる出費に苦しみ、人民は君主の虚榮に資す

る費用の収斂に殆んど疲憊し盡し、今や餘財なし。是に於て小君主等は其の同盟を賣買し、かつ軍隊をも賣りて辛くも自己を支持したり。かくてヴェストフリア條約によりて彼等は獨立を保證され、ライン同盟によりて多くはフランスに從屬せり。一千六百六十三年のラチスボン國會はまた永久的のものとならんとせり、實にこの國會こそ帝權に蒙らしむる最期の打撃なりき。

アウストリアは三十年戦争の創痍稍癒えて徐ろに勢力を恢復し、私にまた禍心を包藏せり。一千六百五十八年レオポルド一世父王フェルディナンド二世に死して立ち、一千七百〇五年に至るまで在位せり、其の間別に光彩を放つものもなかりしと雖も、内は材幹ある良將の補佐により、外は列國の援助あるありて王家に取あては最も多幸なる時代なりき。後同家系分れて三支となり、一はマドリッドなるスペインのそれ、他は一千六百七十三年に合したるタイロル家及びステチリア家なり。之れと同時にブランデンブルク家別に興起しつゝありき、當家は一千六百十八年にプロシアを略してクウニグスベルクに在るロシア人に對抗せり。フレデリック・ウイリアムは既に大選公の稱を受け、彼の子は自稱してプロシア王と云ひたり。

スウイットルは十三の聯盟郡カントンと數多の同盟國より成り、バアン尤も強盛なれども、昔て十六世紀に活躍したる驍武は今や地を掃つて僅に諸國の募兵に應じつゝ、其の餘勢を保てるのみ。

スウイデンは三十年戦争の勝利に依りてゼルマンの三大河ウエゼル、エルベ、オデル等の地を占有し、フィンランド近傍にては一千六百四十七年ロシアより割讓したるカレリア、イングリアを領し、更に又一千六百三十五年ポオランダの放棄したるエソオニア及びリヴォニアの二土を併有せり。さればバルチック海は全くスウイデンの領海となり、北歐の覇權は久しくガスタダス、アドルフスの掌握に歸じたり。

アドルフスに次で其の女クリスチナ位に即ぎぬ、王女は穎敏にして赫灼たる國威を失墜するとなかりしも、遂に執政の繁を厭ふて一千六百五十四年位を甥チャアルス・ガスタダスに禪りぬ。王は天性學問を好みかねて勇武絶倫の聞ありたるが、即位の當時専らポオランダ王ジョン・カシミルの侵略を防ぐに全力を竭せり、後王は至る所に利益を占領し、一舉ワルソウ市を奪取し、ジョン主をシレシヤに走ら

しめぬ。然るにポオランド人は其の首都を回復せんがため、五萬五千の大兵を以て市の廓外に進撃し來り、奮闘三日に及びたるも遂にチャアルスの寡兵に撃破せられ、市は全くチャアルスの掌裡に落ちたり。大勝は隣邦の大に震撼する所となり、ゼルマン皇帝、デムマルク王、プロシア王等相合してポオランド救援の同盟を作り、以て彼の勝利を放棄せしめたり。されどチャアルスは復讐としてデムマルクを伐ちロスキルドの和約によりてハラランド等の地を割讓せしめ、サウンド海の自由航海權を承認せしめたり。此等の成効によりてチャアルスの野心いよく増長し、眞にデムマルクを克服せんと欲し、和約訂結後數月を経ざるに、再びコオペンヘエゲンを圍みぬ。市は頑強に防守し、オランダは其の艦隊をサウンド海に派し、アウストリア、ポオランド及びブランデンベルヒ等又兵をデムマルクに出すに至り、其の強壓に絶えずして遂に圍を撤したり。斯て間もなくチャアルス殂せしにより、再び兩國和議をコオペンヘエゲンに結び、次で又スウイデン、ポオランド、オリアに和約し、(一六六〇年)翌年カアデス條約によりて瑞露間の平和を結びぬ。

之れは要するにスウイデンは是等の諸訂約により國威に毀損せずしてかの不

均衡の苦痛を脱するを得たり。即ち是等諸條約によりてブレキンデ、ハルランド、スカニア等を領して南方の境界となし、ポオハス、ジエムトランド(Jemtland)、及びヘリダリアを得てノルウェイ海岸上の境界を成せり。更にポオランドよりリポニアを得、イングリアにカレリアの大部を併せ保持し、以てフィンランド海の全權を掌握したり。されど繼起したる戰亂によりて、さらぬだに貧弱の國民は益々負擔の重に懊み、全く農工の産出物を缺乏せる同國は戰費を償ふの餘地なく、殆んど困疲の極に達しぬ、これがため一旦獲得したる北方の霸權は遂に支持する能はざるに至れり。

而かも戰亂の最中に於て已に革明の萌芽北歐の天地に發生したり、而して其の結果は實に吾人の最近に見る所のものなり。當時デムマルクは貴族の勢力最も強盛にして、フェルデナンド三世は漸く僧侶市民等の助力を藉りて其の權力を粉粹し、王家世襲の宣言を布告せり(一六〇六)。之れによりて獨裁君主政を確立し、爾後一千八百三十四年に至るまで持續せり、されど世襲王統の始祖ゼルマン人なりしことはデムマルクに取りて最も不幸なるものなりき。即ち最初の王は國の政治を舉

げて同國人に任せ、一人もゲムマルク人を官府に採用せず、かかるが故にセルマン語は全くゲムマルクの官語となれり。げに同國は猶ほ今日に於てすら其の威化の抜く可からざるに惱みつゝあり。

嘗て北方の雄鎮として威權雙ぶものなかりしポオランドはめぐり來れる衰運遂に支へ難く、霸權は已に他に移りて第二位に下り、今や將に第三位に落下せんとしつゝありき。今猶ほ領土はカアバシア山脈よりバルチック海に及び、オーデル河よりドニイバル及びウルガ河の水源に擴がると雖も、無政府的制度はたその主權選舉の制度は外侵に對して到底國防を確固にするに足らず。而して前にチャアルスガスタヴスが成したるものを令やロシア着々として完成せんとせり。ロシアは一方スウイデン、ポオランド、クウルランド、及びセミガル等のためにバルチック海の出路を塞がれ、他方ポオランドの最も制御に苦める屬民コザック族及び韃靼人のために黒海の門戸を鎖されたり。是に於てロシアは廣漠不毛のシベリアに出るの外其の出路を求むる能はざりき。されど一千四百七十六年ノブゴロド共和國イヴン三世に滅ぼさるゝや、始めてバルチック海并に北極海に出るの門戸を開き、

遂にアストラカンの韃靼人を滅ぼして(五十四年)一世紀前カウカサス山系に達せり。一千六百六十七年アンドラッソウ條約によりてポオランドよりスモレンスク、チェルニゴウ、及びウ克蘭等を收め、以て西下の第一歩を作れり。ミカエル・フエオドロウイチの創設したるロマノフ朝は一千六百十三年後ロシアに君臨し、一千七百六十二年に至りて滅しぬ。

イヴン三世は十五世紀の後半に際し自族に食封を興ふる法を廢して政治の統一を計り、同時に貴族には該法を存置せしめて其の勢力を分割し、薄弱ならしめたり。十六世紀に於てイヴン四世は殆んど十五年間貴族をして抑壓に馴れしむる事に全力を注ぎ、人民に、加ふるに暴虐の度を過し、鬼王てふ名を受くるに至れり。かくて一千五百九十二年勅令を以て農民を全然土地の奴隸たらしめ、主人及び居所を變ゆるを禁止したり。

トルコは當時全く前代の宗教上はた軍事上の情熱を喪失したれど、猶ほ東歐に在て嚴然第一位を占めたり。トランシルヴァニア公其の隸屬となり、テメスワアの領土及びハンガリーの大部分より黒海の全海岸は悉くトルコの領有なりき。而

してアジア方面の領土はエリツンよりバグダドに廣がれり。ヴェニスは之れと幾度か辛き争闘を敢てせり。一千六百六十年にはハンガリイにアウストリアを撃破し、六十三年には奥軍の將ノウホイゼル土軍の爲にプレスベルヒの城壁に斃れ、ヴェンチ危殆に頻しき。是に於てルイ十四世はセントゴオタルドの戦にアウストリアを援け、(六千六百)カンヂアの包圍(六千七百)にヴェニスを助けんがため、精銳なる援軍を送りてその大征服の序幕を開きぬ。

第五章 ルイ十四世の治世

フランスの中央集權并にユルバルトとルヴォア マザリンの死後ルイ十四世は斷然宰相を廢し、自身親しく一日八時間政務を聽き、彼が裁決を仰ぐにあらざれば如何なる事件も執行することを許さざりき、實に彼は生涯を終ふるまで一日も親政を整ざりき。君主にして彼の所謂王の商賈てふ事を彼の如く理解し、かつ實行したるもの殆んど稀なり。彼王子に訓諭して曰へ、君主たる者は、事業をなして以て世に臨むと同時に、又事業のために君臨す。若し他を成さずし

て之れを欲せんか、是れ神に對して不虔忘恩の所爲たり、又人に對して非義不法の所作なり」と。更に彼をして卓然傑出せしめたるものは、親しく統治の大權を掌握するの時に於て、既に自己の政策に關して一の統一したる意見を把持したるにあり。げにや彼は無限の權力を以て國家に臨みたるのみならず、又君主獨裁説をフランスに設立したる始祖なり。彼以爲く、王道は神の設くる處なるが故に、王權は即ち神權なり、君主は此の土に垂迹したる神の權化なり、而して補佐の將相は豫め天命によりて機縁相感應したるものなるが故に、時ありて君主權の幾分を分たるゝ事あるなりと。此の如くして彼は往、王權に陰霧を起さしむる自由を絶對に禁止したり。また其の郡縣中獨立の政廳を有して自治制を施行せるものは多く廢止し、偶、バルガンデイ、プロヴンスの如く保存したるものも、只閣臣の命令を執行するに止まりたり。また市町等に殘有したる自由は全部破壊し終り、從來の市長の職を廢して世襲官廳となし、最も高價に購ふ者に之れを與えたり。是に於て自治の生命は全く窒息したんぬ。かくてフランスは悲しむべき境遇に陥れり。後一世紀を経て幸くも專制君主より政治を恢復したりしと雖も、而かも其の時に於て

フランスを導くべき豪膽なる幾多の理論家を有したれど、過去を顧みて將來を整齊するの實際家一人も有らざりき。蓋し確固不動の政治的自由を得んとならば、必ずや自治制の自由を基礎として建設せられざるべからざればなり、かくの如きは唯對岸のイギリスに於て保持せられたるまた發達せられたるものなり。

ルイ王下の議會は全然一の裁判所に過ぎざるものとなり、貴族は只戰場に出てし、或は凱の際風釐に隨行する一介の武辨に過ぎざるものとなり、僧侶は愈王に信賴して最早ルイの憐れとならずなりぬ。而して人民は軍隊、警察及び苛酷の法律によりて容易く威壓せられぬ、それは數百年の封建制度の後を受けたる際なれば、却て内治の平和を興ふる一勢力下に歸服したるなり。之れを要するにルイ王が治世の根本要旨は國の全力を自己一人の掌中に收容し、以て國家の利益、就中自己の利益に充てんと欲するにありき、さればこの中央集權政の極端なる、フランスの商工業と政治的生活はもとより、其道德的生命をも併せてその下に集中せしめたり。是に於てかフランスは全く自己の生命により生存せずして、死活を一政府の生命に委ねたり、されば歲時惡弊積重し、一朝此の全能力萎微したるの日は又

万事休するの時なりき。げに此の大國民は今や一君主の隆退と運命を共にせざるべからざるに至りぬ。されど幸多き治世間は人民はその自由を失ひたるに比敵すへきだけの平安と幸福とを享受するを得たり。上述の如く、ルイ王もまた自らこの無限の權力を持する以上國民に對して重大の責務ある事を自知したればなり、彼の所言に、朕は己の可からんよりも、先づ臣民の幸安を宸念す、朕が掌握する統治の大權は特に汝等の福祉を増進する上のみ其の力を致すとあるにても察せらる。彼の大官に富貴榮譽權力を授くるや、必ず彼等を誡めて曰く、汝等假令一瞬時たりとも衆庶のためによくこれを竭せと。フランスの政務最も活躍周到なりし事實に當王の治世に於けるが如きは未だ稀なり。而して其の政治史は殆んど二大臣、セルバルト、ルウヴオアの傳記に盡く。

コルバルトの威權の大なる實に現時の五大臣の位地を兼ねたり、彼はフツケの死後直に其の後を繼て財務長官に任ぜられ、兼ねるに宮内、農工商、海事、内務等を以てしたり。抑も佛國の財政はサリエ以來全く紊亂して殆んど混沌の境に陥り、國債四億三千万フランに達したり、是に於て彼は先づ財務官の非行を發かんがため

に大檢舉を行ひ、其結果科料金一億一千万フランを得たり。彼はまた豫算案の創設者なり、此の時に至るまで國庫の收入如何に關せず之に就ては何等の商議すら經ずして經費は隨時支出せられたり。是に至り彼は年度の豫算表を製し、歳入歳出を豫め定めたり。當時の地租は専ら借地人平民等より徵集し、一千六百六十一年には額五千二百五十万フランに達せり、從て此等納稅者の勢力自ら強大となり、プロント黨争亂の頃には自ら貴族と稱し、或は冥加金等によりて貴族の榮爵を購ふ者少からず、爲に當時貴族の數倍加せりといふ。コルバルト之れが抑制策として從來の租稅負擔額を殆んど半額に減少し、後敕令を發布して、最近三十年間貴族に推舉せられたる者の特權を廢馳せり。之れがため貴族の門地を剝がれたるもの實に四萬の多きに及べりと。更に從來一般に課したる冥加金を廢し、代ゆるに Villain tax (從僕稅) を以てし、又珈琲、烟草、骨牌、當籤等に新稅を課し、或從來の稅率を増加して歳入の増加を計れり。要するに彼は専ら歳入の増加を計ると同時に年金俸給等を減少して國庫の充實に勤め、却て從僕稅を輕減して下層民の負擔を輕からしめたり。

屢傳へられたる如く、コルバルトは決して工業のために農業を犠牲に供したる事なし、彼は多數の家族に從僕稅を免じ、農具、道具及び家畜の差押を禁じ、また馬族繁殖の一法として種馬法を創定し、アフリカ、デンマルク等の種馬と盛んに交尾せしめ、一方セルマン、スウィツル等の種馬を輸入して大に馬種の改良を計り、最上の種馬を有する者には特に賞與を與えたり。或は沼澤の排水を命じ、灌溉森林法を發布して農林の發達改良に努めたり、最後の法規は現今に至るまで尙ほ行はれつつあるなり。

嘗てヘンリイ四世の銳意努むる所ありたるに拘はらず、フランスの工業は猶ほ遅々として幼稚の状態を脱せず、殆んど一として外國に仰がざるものなかりき。ライムの商估に生れたるコルバルト深く之れを嘆じ、自國の製品を以て自國の需要に充てしめんが爲め、外國産に對して重稅を負課したり。これ保護制度の創始にして、幼稚の工業に取りて必要缺く可からざる法策なれども、一旦發達したる時には却て害あるものなり。かくて彼は隣邦の工業上の秘訣を購ひ、或は探知し熟練なる職工を招致して、順に製作物を増殖せしめたり。又一方に於ては保護金を

與へて作品を保管し、各商には相應の資金を貸與し、同時に工業及び職工には莫大の賞金を與へ、寸時も其の奨励を怠らず、他方に於ては教會に請ふて十七日の休日をも廢して無用の時間を節し、工業界の異論を裁定するためには仲裁局を設置せり。如上の結果一千六百六十九年には羊毛のみにて四萬四千二百臺の織機と六萬の職工とを有しき。さればセダン、ルウヴィエ等の毛織工場に比敵するもの當時歐洲中一も見出し能はざりき。其の他葉鐵、甲鐵、陶器、鞣皮等皆て外國より輸入したるものを自國にて製造し、今や全く他の供給を仰ぐの必要なく、絨氈はペルシア、トルコ等の産地を凌ぎ、金銀を縷めたる刺繡はリオン等に産し、特に鏡類、帷帳の類は數等元産地を駕するに至れり。コルバルトは從來道路、橋梁等に設けられたる通行税を全然廢止する事能はざりしも、之れを十二郡に制限して内國關稅を制止し、輸出税を輕減して葡萄酒、ブランデー等の輸出を奨励し、或はダンカアク、マルセイユ等を開放して自由貿易港となし、後者には海上保險會社の設立を許容せり。尙ほ市場を創設して、外國品の輸入を勸迎し、同時に殆ど敗壞したる往還を修葺し、或は新造したり。是等の事業中特に大事業と認むべきは、バルカンデの運河鑿開の工

事なり、セド港を以て其の一端とし、ツウルスを以て他端とし、以て地中海と大西洋とを聯結せり、工事は一千六百六十四年に起工し、八十一年に至るまで間斷なく續行せり、工事擔任者は有名なるリチエにして、アレドレオシイの設計にかゝる、費用七百萬フラン、日々一萬二千の職工を使役したるものなり。

是に於て商業は急速の進歩を來したり。かゝる發達の様運と共に一千六百六十五年に商務局を設置してルイ王隔週に親しく臨御し、各地にも同一の設備ありて、最も經驗に富める商人三人を選出して宮廷に伺候せしめ、將に起さんとする事業に就いて王及びコルバルトに彼等の意見を奏せしめたり。

從來海上に於ては外國人、フランス全商業の主公となり、オランダ人は毎年四千の船舶を以て自國の製作品及び諸國の商品をフランスの港灣に輸入し、また同國製の絹糸、葡萄酒、ブランデー等を歐洲其の他の遠國に輸出せり。コルバルトは此の方面に於てもまた自國の興隆を來さんことを計り、嘗て一千六百五十八年フウケエの長官たりし時、自國の港灣に出入する外國船に對して一噸につき五十スウの碇泊税を負課したり。彼は此の稅法を續行し、加ふるに自國船舶の出入及び遠

海航行に耐ゆる船舶の建造には奨励金を授け、同時にオランダ及びイギリスの商會に倣ふて五大會社を設立したり、即ち六十四年に東西インド會社を六十六年に北方及びベリツンド會社を、七十三年にレネガルに設置したる等是なり、而して是等に許すに壟斷權を以てし、皇族貴族富豪等をして株主たらしめ、遂に六十九年に至りては敕令を以て、貴族にして海運業に従事するも毫も不相應の事にあらざる旨を發布せり。

從來フランスは殖民地としてキアナダにアカディアを、ギアナにカイエヌを有し、其の他マダカスカル及びインドに二三の工場を有するに過ぎざりき。是に於てコルバルトはまた諸方面の擴張を企て、先づ百萬餘金を以てマルチニック、ガダロウブ、セント・ルウシア、グレナダ、其の他十數の地を購ひ、またセント・ドミンゴ島に占據して近海を掠略せる自國の海賊船に保護を與へ、或はカイエヌ、キアナダに新殖民を送遣し、或はニューフオンドランドを奪取し、或は有名なる探險家ドラ・サアルの發見したるミッシピイ河の沃野を占領し、アフリカに於ては、オランダのゴオレエを割取してマダカスカルの東方海岸を所有し、アジア方面に於てはインド會社をスウラッ

ト、シヤングナゴア等に設立し、後またポンヂセリイに増設せり。而して此等植民地の商業を確保せんがためには各港灣を開鎖して、外國船艦の入港を嚴禁したり。マザリンは嘗てリシエリュウの開設したる海軍に就いては顧みる所なかりしを以て艦船殆んど衰滅の境に彷徨したりき。コルバルトは、植民地の擴張と共に其の再興を企圖し、先づ殘存の戰艦を修葺すると同時に新にスウィイデン、ポオランド等より數多の兵船を購入し、船渠をダンカルク、ハアブル、ロッシェフォール等に建設したり。嘗てヘンリイ四世はツウルン港を、リシエリュウはプレスト港を築造せしも、當時未だ大港たるの觀を呈する能はず、プレスト港は一千六百八十三年ウバンに包圍攻撃せられて、甚だしく破壊せられたることあり。コルバルトはニメエゲン條約後ツウロン港の改築に巨額の資金投じて世界最良港の一となせり、げに彼が此の港に建造したる浮船渠は優に百隻の兵船を容るゝに足るといふ。

コルバルトは海員補充策として海事籍を創設し、之れを以て海濱に住する人民に或種の特權を與へ、その代償として必要の場合には、水夫應募の義務を負はしめたり、而して募兵は年齢と家柄とによりて諸種類に區分せられ、滿期退役者には年

金を給せられたり。此の制は今日尙ほ現存す。一千六百七十年の調査によれば海夫三萬六千と註せられ、八十三年には七萬七千八百六十二人の多數に達せり、同時に船艦また増加し、一千六百六十一年には戦艦僅かに三十九隻なりしもの、七十八年には一百二十隻となり、後五年には一百七十六隻と算せり。一千六百九十二年王の所有にかゝる戦艦百三十一隻、フリゲット艦百三十三隻、其の他の船舶百〇一隻と註せらるゝに至れり。一千六百七十二年には一千の貴族を以て海兵團を組織して精練なる士官の養成に力め、他方に於ては砲科、水路測量科の學校を設立して大に海事の發達を謀りたり。

コルバルトは以上の如く國威を外に宣揚せんとに銳意力むると同時に、内に於ては立法行政の改善を計り、また文藝の發達を獎勵せり。彼は度量衡の制度を改正し、從來莫大の收入を國庫に致したる官職の賣買を廢弛し、僧侶の數を減少し、以て有要の業務を獎勵したり。彼の効績中尤も多とすべきは委員會の開設なり、會は政府の評議員と請願委員とより成り、各大臣又は大法官の監督下、或は王の直裁下に國家の大事を討議するものなり。六法の完成は實に是等商議の結果なりと

す。即ち一千六百六十七年發布の民法勅令を以て、中世紀の不公平なる施制を廢止して正義の實施を嚴達し、六十九年には灌溉森林法を改正し、七十年には刑法の改正令を出して、苛酷なる拷問機の使用并に豫審收監の規定を制限すると共に、重罪犯人に對しては殘忍なる古法を襲奪し、罪過と刑罰とを均齊ならしめんことに勵めたり。七十三年發布の商法は特にコルバルトの光榮を加ふべきものなりとす。八十一年の海上法は直に歐洲各國の通商法となり、遂に今日の海上法の基礎となれり。八十五年の黒奴法は佛國植民地に於ける黒人に制裁を加へたり。要するに如上の法令はジャスティアン帝よりナポレオンに至るまで久しく着手せられたる法典編纂の大事業を構成せるものなり。此等の法令中今尙ほ現存して有効なるものあり、就中海上法の如きは、今日のフランス通商法の騰本とも見るべきものなり。此等法規の實行を監督するがために屢請願委員を議會に召集したることあり。

彼はまた文藝の獎勵を怠らず、一千六百六十三年文學院を設立し、六十六年科學專門校を創立し、同年音樂學校を、七十一年工藝學校を建設せり、或はまた美術研究

者を奨励してロオマに留學して美術を研究せしめ、或は外國語學校を建設して専ら東洋語の研究を鼓吹し、他方に於ては王立圖書館を擴大して巨萬の藏書珍異の書寫等を藏せしめ、マザリン圖書館を公開し、動物園を擴張する等、知識の啓蒙に竭めざる處なかりき。

ルイ王は内にかゝる賢相を推舉すると同時に外に向て秀才英靈の士を求むるに吝ならざりき。コルバルトの言に、王は汝等の主權者にまします、されどかねて汝等の恩惠者たらんことを希求し玉へり、之れを以て王は我に命じて汝等に爲替手形を下賜せしめたまへりと。王の眷顧を蒙りたる者の内にて最も有名なる二三を擧ぐれば、グチカンの博學者アラッジイ、マッフエイのメロオブの先驅をなせるイタリイ一流の悲劇作家グラジアニイ伯、史紀編纂家ヴェシナス、オランダの天文家ロオメル、ハイゼンズ、其の他フロレンスの有名なる數學者ギアニイ等なり。

コルバルトの競争者ルウボア侯は一千六百四十一年に生れ、十五歳にして乃父の官省に入りて秘書官と成り、久しく軍政の學を研究し、此の方面に於ける銳腕はコルバルトを凌駕せり。ルイ王の親政を採るや、彼は實際に於て軍務大臣となれ

り、然れども名實共に就職したるは一千六百六十六年なりき。彼の軍政を握るや軍隊に大改革を行へり、尤も募兵策としては従前の任意徵募法を襲套したりと雖も、よく嚴肅なる紀律と制裁とを加へて弊害を掃盪したり。彼が改革の重なるものを見るに一定の制服制を施行し、各聯隊により軍隊の服色を變じ、各隊に一々特異の標章を附せしめ、或は縦隊進軍の紀律を實行し、或は從來の鎗隊を廢して銃劍に代え、或は渡河用として銅製の舟橋を用ゐしめ、或は兵器彈藥糧秣等を常備する倉庫、兵營及び衛戍病院等を建造したり、是等は皆從來未知の組織にして、全く彼の新設にかゝるものとす。また工兵隊を新設し、メッツ及びストラッスブルヒ等に砲科學校を設立し、或は歩兵中に擲彈兵の一隊を選抜し、或は驃騎隊を組織し、富有の子弟のために一種の兵學校を起して士官候補生の一隊を組織したり。彼はまた一定の陞級規定及び檢閲制を施行して軍隊組織に一新紀元を劃せしめたり。陞級法施行せらるゝに及びて貴族の門閥制打破せられ、彼等は等しく軍務に服して徐ろに陞級を俟たざるべからざるに至りぬ。また軍功を表彰するために勳章授與の規定を設け、一千六百九十三年始めてセント・ルイの勳章を實施せり。げに後年

フランスがフランダアと戦ひし際に十二万五千の兵員を動かし、ポオランドとの戦争に十七万を、スペイン王後位繼承戦争に四十五万の大兵を動員し得るに至りしは一にルウボアが如上の大功に因據するものとす。

フランダア戦争(一七六六年)對フランス第一同盟(一七六八年)、ポオランド戦争(一七六六年)。ルイ十四世愈々大權を掌握して親政するに至るや(一七六六年)歐洲列國の諸王も將た列國民もルイ王の威勢に比敵する者なく、佛國と比肩するものあらざりき。彼が對外策の第一行動はいかに彼が大野心を包藏するか、いかに自己の威嚴の大なるかを自覺したるか、の意をほのめかせるものなり。公使の席次に就いて兎角の議論ありたるに拘はらず、スペイン大使は遂に佛國大使の次席に位せざるべからざるに至れり。王の使節としてロオマ法王に使したるクレエキ公が法王の衛兵によりて辱を受くるや、ルイ王は直に莫大の賠償金を得たり。アルキイル并にチュニスの海賊フランスの商業を妨ぐるや、ポウフォルト公之を懲治して、彼等の囚へたるキリスト教民を解放せしめたり。ポルトガルはスペインに對てフランスの援助を請ひ、佛將のためにブラガンザ家を王位に即かしむる事を

得たり。更にルイは當時オットマンに脅壓されつゝあるレオポルド帝に六千の援兵を送りて勝利の功を二分し、ヴェニスを援護してカンディアの防禦に力を分ち、一千六百四十五年より六十九年に至る間五万の佛兵を同島に送れり。佛の猛將ポウフォルト侯此役に斃る。

トルコの敵を援助したるは一方より見れば功譽赫々たるものなれども、他面より觀察せば實にフランスの傳說的政略の放棄なりき。ルイはトルコとの同盟を廢棄し、直に新教同盟を逸脱せり、蓋し彼はかくして、嘗てチャアルス五世并にフィリップ二世の雄圖を繼ぎ、自ら舊教の首領となり、はた獨裁君主として歐洲の覇權を握らんと欲したるなり、さはれ此の大野心は嘗てスペインに衰滅を招きしと同じく、又彼に一大禍害を齎らすものなりき。

フィリップ五世の薨去はルイ王に始めて干戈を取らしむるの機會を與へたるものなり。抑もブラバント家は家憲として父者の死後は相續者として初妻の子を以て之れに充つるを掟とせり、然るにルイ王の妃マリア・テレサはフィリップ五世の長女なり、而して現スペイン王チャアルス二世は後妻の子なり、是に於てルイ王は王妃

の既得権を名としてスペイン領ネザアランドを要求せり。蓋しルイはライン河を以てフランスの境界となさんと欲したるなり。此の際ルイ王を助けてスペインを孤立の位置に立たしめたるは實にルウヴァが外交の妙腕大に與て力あるなり、彼先づオランダを説くに、王は只ネザアランドの一部を要求するのみにして、毫も大禍心あるにあらざる旨を辨じてその疑惑を解き、同時にポルトガルの幫助を收め、又イギリスをして嚴正中立を宣言せしめたり。更に彼はライン同盟の諸侯を誘ふてゼルマン皇帝を緘黙せしめ、剩さへ彼と一々の秘密條約を訂結し、スペイン征服後收果の分配を約せり。かくして全く孤立したるスペインは勢の蹙迫する處到底フランスの侵入を阻止する能はず、一千六百六十七年諸壘多くは陥り、命脈殆んど縷の如し。大勢を見たる海強國は始めてルイの野心容易ならざるを看破し、互に相結びてスペイン救援同盟を作れり、是ぞヘエグに盟約を擧げたる有名な三國同盟にして、其の與國はオランダ、スウイデン、イギリスなりき。ルイ王は同盟の干涉によりて最初の企畫を果すこと能はず、エクスラ・シャペルに平和條約を締結せり、條約の結果ルイはフランデ・コムテをスペインに還附し、彼はネザアラン

ド於て占領したる十二の堅城をのみを保留したりき(一千六百六十八年)

オランダは久しくルイ王の妬憤する所なり、特に府尹ジョン・デ・ウィット、三國同盟を主唱して彼の素志を齟齬せしむるや、愈彼を惡む事甚だし。加ふるに商業殷盛にして國富み、自主自由を以て建設したる共和國の存在は、彼が専制君主の性情に抵觸すると甚だし、必ず討伐せんことを期せり。是に於て彼は久しくフランスの援助を仰ぎながら今に際して背反せるは甚だしき忘恩不義の所行なりとてオランダを責めぬ。是より先コルバルトは佛國商業の一大勁敵として太だ之れを惡み、オランダの船舶を自國の海岸より驅逐し、自國の商業を奮勵して國産の物資を却て彼に供給せしめたり。オランダは自衛策として佛國の製産物に重税を附加し、以て彼を阻止せり(一千六百七十一年)。當時コルバルトは一使臣に告げて曰く、オランダの此の舉は極めて大膽なる所置なり、されど貴下はやがて彼等の後悔すべき日あるを見らるべしと。當時の軍務大臣ルッポア私かに思へらく、スペイン領ネザアランド克服を完遂せんとするには先づオランダを屈服せしめざるべからずと。かく財務、軍務、兩大臣の意、相合致し、王また素より好む所なれば、直に此の計畫を嘉

納せり。されど戦争は佛國に取りて最も不利愚劣の策なりき。蓋し之れが爲にヘンリー四世及びリシェリュウの苦心して組織せる新教同盟を根本より破壊し、且つ當時の佛國に取りて最も利害の關係厚き唯一の仇敵をその大打撃より逸せしのみか、之れに依りて奪取し得たる洲國はフランスの邊疆より隔離して、到底久しく保有し得べきものにあらず、また必要なる土地にもあらざればなり。

時にルイ十四世は巧妙なる外交を以て容易に三國全盟を破壊せり、先づ些少の苞苴を賂ひスウイデンを脱盟せしめて舊誼を温め、イギリス王チャールス二世に二百万フランを與へて自己を助けしめ、更にライン同盟の諸侯伯及びゼルマン皇帝を招誘して緩急呼應せしめたり。斯くして前にスペインを孤立せしめたると等しく、今又オランダを全く孤獨ならしめたり。戦争の初期に於てオランダ屢、不利なりき。共和黨の主領デウイット兄弟はナッソウ家を恐れて從來軍備を理めざりき、さればオランダはフランスの猛將チュウラン、コンデ等の指揮に幾度か驍名を轟かしたる精兵拾二万に對して僅に二万五千の武備薄弱なる烏合の兵を以て當らざるべからず、戦の數已に決せり、佛國の進む所眞に戦にあらずして一種の散歩に過

ぎざりき、彼等の到るや城門は開放せられたり、チュウラン麾下の一士官大將に請ふて曰く、我に五十の騎士を借さんか直に二三の要塞を陥れんと、或日四兵卒劫掠の途中途を迷ひ、計らずマイデンに到着しぬ、之れを見たる吏尹の驚愕甚だしく、直に都門の鍵を彼等に渡さんとせり、されど後、後續隊の來らざるを知るに及び、彼等を泥酔せしめて城外におきぬ。アムステルダムの陥落實に瞬間に在り、そは都城の内外を擧げて氾濫中に置しむるの鍵鑰はマイデンなればなり。

フランス軍は今やアムステルダムを去る數里の地に迫れり、ジョン・デウイットは和をルイ王に請ひしも直に排拒せられぬ。然るに都府の守備頑強にして佛軍容易に肉薄するを得ず、稍逡巡の色あり、かくと見たる防禦軍は再び勇氣を回復し、軟派のウイットを殺し、主戰派オレンヂ公ウイリアムを擧げて總督に任じぬ。公は決然として立ち、四方の堤防を決して満目悉く水を湛え、而して久しく英佛艦隊のために苦しめられたる水師提督ロイターは其の艦隊を城下に集めぬ。かくてオランダは其の最期より救はれたり、佛軍徐々に退却し、從來占領の諸壘を放棄してライン河に退きぬ(七千六百)。

ウイリアムこれを好機として對佛同盟を組織せり、英王チャアルス二世は同盟に加入するを肯んぜざりしが、國會の反抗を受け、遂に餘義なくオランダと和議を結べり。ルイはスウイデンを除くの外一ヶの與國を有せず、スペイン、アウストリア、ゼルマン及びオランダを敵とせざるべからざるに至れり。當時ルイは僅にメエストリヒト及びフランシユムテを領したるのみ、偶々ネザアラレト、アルサスの兩地先づフランス討伐の兵を擧げぬ、ルイは前者にコムデ將軍を遣はし、後者にチュレンヌ將軍を派して激撃せしめたり、チュレンヌは行、諸侯伯の地を剽略し、小部隊を以てラインの疆城を防守せり、されどモンテカカリの大兵殺倒し來るに及び遂に支ふる能ずして退却し、六万の皇軍はアルサスに冬營を張れり。チュレンヌ時に新銳の援兵を得てサスバツパに戰ひて敵彈の殪す所となり、兵もまた大半斃れ、遂に大敗して遠くライン河を渡りて退却したり(一千六百七十五年一月)。コムデ將軍はセネフに激戰して勝敗相半ばせり。されど海戰に於てはフランスの提督デウケスン三度シリイ海岸にスペイン艦隊を擊破し、オランダ艦隊の援助ありしに拘はらず遂に之れを鏖殺し、オランダの名將ルイターアはアゴスタの海戰に戰死し、同時にデ・エスト

レイ *de Witt* 將軍はオランダ植民地を劫掠し、勢威大に揚れり。又陸戰に於てはクレエキ將軍前年コンサルブラックの敗衄をコケルスベルグに復讐して大勝を占め(一千六百七十六年)、リュクセムブルグまたカッセルに勝利を博し、ザランシユヌを攻略し、オランダの形勢日に窮迫し、加ふるに英王チャアルス二世はかねての盟約を履行せず、遂にオランダをして媾和の已み難きに至らしめたり。かくて一千六百七十八年ニメエゲンに和約を結び、オランダは再び領土を復するを得たり。爾來ルイ十四世は列強の覇權を掌握し、殆んど彼等をして維命維奉せしめたり。スペインは再び戰費を賠償し、フランシユムテ、アルトア、ヴランシユヌ、プウシユエン、コンデ、カムブラア、イフレヌ及び其の他數多の市邑を割讓し、ゼルマン皇帝はフィリップスブルグを得んがためにフライブルクをフランスに割與し、スウイデンは私にフランスを援けたる効によりルイ王は一千六百七十九年セント・ジエルメエン・レエイにブランデンブルグ及び丁抹と和議を訂結して、嘗て彼等の劫掠したる侵地をスウイデンに還附せしめたり。爾來フランスは愈々全歐の實權を握り、各國其の威令に懼伏し、國民は皆王の武雄を頌して「大王」の號を奉りぬ。

斯の如くルイ十四世は利益と光榮とを加へて治世の第一期を終りぬ、此の間フランス、ランダ、フランチ・コムテの二大都市其の領土に屬せしめられ、一方フランダは北疆を固め、且つ工業上に一勢力を加へ、更にフランチ・コムテは東邊の要鎮となり、ウエストファリア條約の實果を此の地に收めたり。

平和期に於けるルイの征服及びナント敕令の廢止(一千六百八十五年)。

ニメエゲン條約後フランスは益々領土擴張に努めたり。他國の武装を解除して軍隊を撤回せる間に、フランスは却て之れを堅實にし、平和を利用して克服を恣にした。彼は所謂複合法院なるものをメッツ、ブリザック、及びピサンソン等に建設し、最近條約に依りて獲得したる諸市邑に嘗て從屬したる領土の有無を調査し、苟くも之れあるものは悉く復舊せしめ、合せて版圖に加へしめたる結果アルサス、フランチ・コムテ等に嘗て隸屬したる地は舉げてフランスの領土となりぬ。バラチン撰候、ゼルマンの諸侯伯、并にスペイン王等相合して抗議を提起せしも兵力に強壓せられて効なく、ルイは却て甘有餘の諸市邑を得たり、是等の諸市中重なるものをサルレブラック、デュ・ポント、リュクゼンブルク、モントベリアア及びストラスブルグ等と

す、就中最後のものはアルサス已にフランスに歸したるも尙ほ自由を稱したるを以て、遂にルウボア將軍二萬の兵を以て攻略し、後ブウバン之れに一大防禦工事を加へてライン河岸の金城鐵壁の重鎮となしたり。

此の他佛國の色彩に化せられたる地少からず、嘗てポウフォルトのため膺懲せられたるバブリアは近來再び海上剽略を始めたり、よりにテウチン老艦を冒して征討に向ひ、無名の一水兵ベルナアド・レノウドなる者の發明にかゝる一種の砲艦大効を奏し、エルデア再び砲撃せられて殆んど壊滅し(一千六百八十一年)、チニス、及びトリポリイスも同一運命に陥り、かくて間もなく地中海上海賊船の隻影を止めざるに至れり。

當時ゼノア人はエルデアのために兵器彈藥を製し、スペインのために四隻の戦艦を建造しつゝありたり、ルイ王彼等に製艦の禁止を命ぜしが聽かざるに及びテウケス艦隊をツウロンより回航せしめ、猛射してゼノアを脅威し、遂にドオジ(ゼノアの主裁者)をしてヴェルサイユに到り和を請はしむるやうなれり(一千六百八十五年)。ルイの勢威の旺盛なる、時の法王をすら屈せしめ、殆んど一候伯の如く之れを待

遇せり、其の頃ロオマ駐在の列國使臣は居住地既得權を濫用して市の四分の一を罪人避難所たらしめんとせり、茲に於て時の法王インノセント十一世此の弊害を矯正せんと欲して改革を列國君主に諮りたるに、獨りルイ十四世はかねて法王權に不滿を抱けるものから、斷乎として聽かず、却て權利保護を名としてラザールデ
ンに八百の兵士を附隨せしめて派遣したり、是に於て葛藤生じ、法王は直に使臣を破門し、ルイはアギグノンを占領せしめたり(一千七百)。爾後久しく反目せしが、インノセント十二世立つに及び和議調ひたり。されど法王の憤懣は容易に氷解せず、其の影響は一千六百八十八年の戰爭に及べり。此の役の基因はコロオンの大監督選舉に關してフランスの候補者フステムブルク僧正九に對する十五の多數を以て當選せしに拘はらず、法王彼を許さずして却て少數者たるバヴリアのクレメントを叙任したるにあり、ルイはかゝる不當の任命を憤り、直に出兵して、ボオン、ヌウス、カイゼルワアス等を奪取したり(一千六百八十八年)。加ふるに彼がセルマンに對し、義姉オルレアン公主の名義を以てバラチネエトの一部を要求し、又イタリイに於て半島の北部を號令せんがために、カセルを購入せしにも騷亂の一因たりしなり。

平和の時にすら以上の如き領土略取、不遜暴悖、及び彼が大野心は大にエウロッパを震撼せしめたり。既に一千六百八十一年にセルマン皇帝、スペイン、オランダ及びスウイデン等、オレンヂ公ウイリアムの首唱の下に、ニメエゲン條約保維のため秘密同盟を組成せしも、未だ一人の彼に對して反撃を敢てするものなく、且つ八十四年八月ラチスボン議會は二十年の休戰條約を締結してフランス王のルキセンブルゲ、ランドウ、ストラスブルヒ、其の他一千六百八十一年八月一日までに併合したる諸市邑を領有するを承認したり。されどルイの大望愈增長するにつれ、彼等は益々緊密に結合し、一千六百八十六年七月九日遂にアウグスブルヒ同盟を訂結し、サヴォイ候は次年に、イギリスは八十九年加盟せり。

かゝる危急の秋に際して佛國の内情は如何。げに國勢隆々威權赫灼たる最中に於て、已に内奥には微かに困倦、不安の聲響きつゝありき。從來虛日なかりし戰爭に對する巨額の費用、平時十五萬の兵士を備ふる費用及びヴェルサイユ、ルツブル等壯麗なる宮殿の造營に要する出費、其の他無數の土木の爲に費したる巨億の支出は全く財政を不可救の底に陥没せしめたり。いかに靈腕あるコルバルトなり

と雖も最早殆んど財源の發見に窮し、遂に憂愁懊惱、重荷の下に殞れぬ、時に一千六百八十三年、享年六十有餘歳なりき。彼は生涯全力を竭くして王に事へしも、彼が平和政策は遂に王の熾盛なる功名心と相容れず、晩年に至るに及び、王の窘迫虐遇甚だしく、彼が死は寧ろ王の呵責によるとさへ噂せられたり、英雄の末路憐むべきものにあらずや、彼死期に際し嘆じて曰く、我若し王に謀したる所を以て神に致したらんには、救を蒙むること豈に如斯ならんや、今將に我は我が行く先に就いて深く憂愁に堪えざるなりと。

彼の死後二年にして、ルイ十四世は治世中隨一の一大過誤をなしたり、これなんナント勅令の廢止なるなり。ホルバルトは生涯を通じて樞要にして勤勉なる臣民として極力新教徒を保護したり。されどルイの見る所全く之れに反し、彼等を目して謀叛者の餘裔なりとし、異端として厭惡し、特に君主獨裁權を好まざるものとして彼等を恐れたり。

第六章 一千六百八十八年のイギリス革命

チャアルス二世とゼエムス二世(一千六百八十八年)。ナント勅令廢止に對する新教徒の捧答は、カゾリック派のゼエムス二世を帝位より貶し、カルボン教のウイリアム三世の彈劾となりたるイギリス革命なり。

ルイは英國と同盟を保持する限りは歐洲各國の敵意も更に恐るるに足らずとせり、彼が海陸に勢力を分割することなきを得たる秘計は此の同盟に存せり、されば彼はチャアルス二世(即ち一千六百四十九年)ロンドンに於て斷頭臺上の露となりたるチャアルス一世の子にしてクロムウルの死後迎えられ無條件にて王となる人)と同盟を維持せんが爲には如何なる苦痛を拂ふをも辭せざりしなり。

王は輕躁放埒なりしも、配流によりて大に反省する所あり、初年に於て顧問クラレンドンの忠言を嘉納し、議院に許すに從來の權利を以てし、喜んで帝室の威徳を宣揚するに勉むるが如く見えたり、而して必ずしも舊教徒にあらず、また必ずしもプレスビテリアンにあらず、其の何れをも捨つることなく、新教アングリカン教會の熱心なる信徒なりき。若し夫れ一千六百六十二年に於てルイ十四世に賣るにクロムウルの最も重すべき勝利を以てせしとするも、其の禍害は六十八年にネザ

アランドに於ける佛國の發展を止めんが爲にスウイデンとポオランドとを結合したることによりて償はれたり。さはれ治世の第二期に至りては己が權力を絶對的ならしめんが爲に、自らカゾリック教派と結びて援助を借らんとし、恰かも大陸に於ける舊教及び王室の勝利を得んと苦心しつゝありしルイ十四世に保護を希ひ、イギリスの名譽と利益の交換を爲すに躊躇せざりき。彼は死に至るまで年々二百万フランの恩給金を受け、同時に佛國公使はスチュアート家に對する議院の反對を鎮めて、兩家相依頼するの利益を鼓舞せり、實にこれマキアゾリイ主義の政策にして、しかも王は高價に過ぎたる購買によりて生じたる議院の惡感を和げんとはせざりき。チャアルス二世に對するルイの勢力はオランダの戰役に於てオランダ商權を奪はんが爲に彼の臣民を從軍せしめたるまでに及びたり。

イギリス民は自己の宗教と自由とを壓迫するが如き交換を憤るに至れり。最初反抗は微弱なりしと雖も、漸く勢を加へ、遂に千六百七十四年ホウイグ黨即ちアングリカン教徒及び議院の特權擁護者の數はオランダとの平和條約を締結すべくチャアルス二世を壓するの勢力となりたれども、フランスに對して宣戰を布告す

るまでには至らざりき。前年國民は王に迫りて化體説(キリストの血肉は麵包とふい)を信仰せざるべき宣誓書に裁可を與へしめたり。一千六百七十八年上下兩院は全然舊教徒を拒みて、一千八百二十九年に至るまで彼等の入ることを禁じたり。同年陰謀者テイマス・オオツは有名なる法王崇拜黨を興し、恐惶は大陸にまで及びぬ。六十六年ロンドンの大火災は法王黨の所爲なりと認められ、同時に頽勢を挽回すべく察せられ、國民は確實に法王はイギリスに於ける勝利を夢想せるものと信ずるに至れり。此の輕信は慘酷にしてまた一笑を値せざりき。八人のゼスネト教徒絞殺せられ、ストラフォード子爵は七十の高齡を以て反逆者として宣告せられ、絞罪に代ゆるに斬首の刑を受け、またチャアルスの弟にして推定繼嗣たるヨオク公は新教と絶ちし爲に、下院は彼の相續權を剝奪すべき議案を提出せり。宗教問題に於て失敗したる王は政治上に於てもまた打撃を蒙りたり。イギリスはオランダを援助すべく準備せしを知るや、ルイ十四世は同盟を妨げんが爲にニメエゲン平和條約に調印せり。

チャアルスは議會を解散せり、然るに總撰舉の結果更に多數の反對黨を得たり。

議會の第一問題は護身律(Habeas Corpus)の議決にありき、こは君主神權に對して國民が獲得せる最も大なる勝利の一にして、既に大憲章中に存せしと雖も、當時に至るまで法律家及び政府の抑壓によりて避けられたるものなり。此の議決の効力により、如何なる囚人に對しても監禁の初めの廿四時間以内に法廷に於て拘引せられたる原因を宣言し、もし一旦放免せられんか、囚人は再び同一の理由によりて捕縛せらるゝことなきに至れり。故にイギリスは暗殺と内亂とによりて民衆を戦慄せしむる急劇黨のあるにも拘はず、平和と法律とによりて着々内部の革新を遂行せり。スコットランドに於ける清教徒叛逆して、セント・アンドリュウの大僧正を虐殺し、武器を執て起てり(一千六百八十一年)。彼等はチャアルスの私生兒モンマウス侯の爲にホスウェル・ブリッチに於て撃破せられ、次で苛酷なる責罰を加へられたり。

ライ・ハウス・プロットと稱する他の叛逆は殆んど想像し能はざる悲慘の虐刑を惹起し、深く國民を震慄せしめたりき。ホイッグ黨中知名の士にして、また貴族中の門閥家として知られたるアルケル・ノン・シドネイ、ウィリアム・ラッセルの二人は刑場に消えたり(一千六百八十三年)。恐怖により反逆鎮靜し、チャアルス二世の死するや、當時五十歳

のヨオク侯は下院の議決によりて帝位より貶せられたるにも拘はず、一の異議なくして帝位に登れり(一千六百八十五年)。

君主神權の思想を以てスチュアート家と等しく教育せられたるゼエムス二世は、チャアルスのルイ十四世と締結したる同盟をして一層緊密ならしめたり、彼は國民の共に嫌惡すべき二事を遂行せんと欲せり、即ち舊教復活及び公民自由の廢止となり。兄チャアルスも密にこれを希望せしなり、然るに王は公然實施の手段を執れり、そは彼は自己の伎倆以上の熱心と執拗とを以てし、而してシド・ニイ及びラッセルの死後國民の形式的表面の服従を甘んじたり。即位するや彼は直に法律を無視し、下院を永久に停會し、ヴェルサイユ宮殿に於けるルイ十四世の華麗莊嚴に眩惑して國民のあらゆる感情を度外視したりき。されば追放者等は最初の第一撃によりてゼエムスの政府は轉覆すべしと思惟し、アルギイルはスコットランドに、モンモスはイギリスに上陸せり、然れども前者は殆んど一撃を加ふることなくして軫滅し、後者はブリッヂ・ウォーター附近なるセッヂムウア虐殺後に同一の運命を蒙りぬ(一千六百八十五年)。かく二回の戦勝によりてゼエムスは胸なき二つの首級と、頭なき二つ